

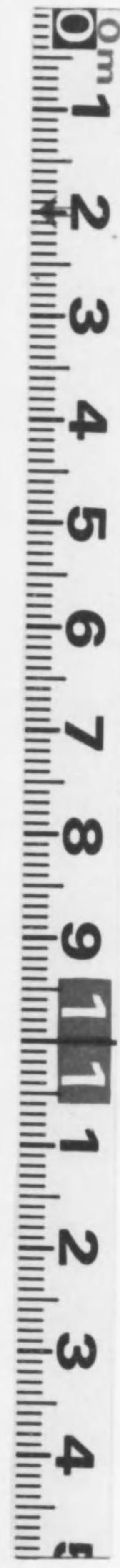
嬰
人

324-279



1200501380315

24
79



始



聖人
物語

324-274



24

79

聖人物語



聖
人
物
語

第十一之卷

シルベイン・ブスケ 著



大阪司教ヨハネ・バプチスタ出版認可

324-279

はしがき

諸兄弟方の御渴望に應じて前巻に引つゞき、茲に第十一の巻を刊行することにし
ました。本巻には主として十一月中に祝する聖人の傳記を撰集めました。

カトリック教會では、毎年十一月に於て在天の諸聖人を偲び、且つ同時にやがて天國
の諸聖人の仲間に入らば煉獄の靈魂を追念し彼等の爲に祈る慣習があります。それで
本巻には先づ第一日に諸聖人の祝日に就て、第二日に死者の記念日に就てその意義を解
明し、第三日より其日々に祝する聖人の傳を載せました。

御承知の通り十一月は著名な聖人が多く、たとへばルツテルが宗教改革を叫んで却つ
て人心を腐敗せしめてゐる時に當り、天主に選ばれて大徳を顯はし綱紀を肅正された聖
カロロ・ボロメオ司教。日本切支丹殉教者として名高い福者パウロ・ナワロ及び木村レ

はしがき

Nihil obstat.

A. Vagner.

censor

Kyōto, die 18^a Septembris 1930

Imprimatur

Osaka die 3^a Octobris, 1930.

+ Joannes-Baptista

Episcopus Osakensis.

オナルド等。青年の模範たる聖スタニスラス・コスカ修道士。王女として生れ悲惨な生活を送つて謙遜の頂きに達し各階級の龜鑑となつた聖エリザベト寡婦。童貞の模範として世界に其名も隠れなき聖セシリア童貞殉教者。支那に於て辛酸を嘗めた上殉教されたパリ―外國傳道會所屬宣教師福者ヨハネ・ガブリエル司教等九名の殉教者。皇帝をはじめ五十名の學者を向ふに廻して宗論を戦はした信仰の勇者聖カタリナ童貞殉教者、聖女小さきテレジアが尊崇してゐた十字架の聖ヨハネ博士など、其他聖會史上に不朽の名をとめてゐる聖人達の傳が夥多收められてゐます。

彼等は皆傑出した信仰と燃ゆるが如き天主の愛との模範を以て我等をして信心生活を勵まさせ、徳の道に手を曳てくれます。願はくは本書が諸兄弟の靈的生活の指針となり且つ御愛子方の徳育の一助ともならば譯者の本懐之に過ぎませぬ。

基督降生一九三〇年九月八日

シルベン・ブスケ識

聖人物語

Dai juichi no maki

目次 INDEX SANCTORUM NOVEMBRIS

十一月一日	諸聖人の大祝日 Festivitas Omnium Sanctorum.	一頁
二日	死者の記念日 Commemoratio Omnium Fidelium Defunctorum.	七頁
三日	聖女アルヘ童貞 Sa Alpais, Virgo.	二三頁
四日	聖カロロ・ボロメオ司教 S. Carolus Borromeus, Episcopus.	二七頁
五日	日本の福者パウロ・ナワロ及其侶殉教者 B. B. Paulus Navarrus et Socii Martyres.	二八頁
六日	聖レオナルド山修士 S. Leonardus, Monachus.	四三頁

聖人物語目次

聖人物語目次

七日 {聖レスチット司教 (イエズス・キリストの弟子) S. Restitutus, Episcopus, 四六頁

八日 {聖クロチオ外四名の彫刻家殉教者 S. Claudius et Socii Martyres. 四九頁

九日 {聖テオドロ・チロ殉教者 S. Theodorus, Martyr. 五二頁

十日 {聖アンドレア・アヴェリノ S. Andreas Avellinus. 五三頁

十一日 {聖マルチノ司教 S. Martinus, Episcopus. 六〇頁

十二日 {聖マルチノ教皇殉教者 S. Martinus, Papa et Martyr. 六八頁

十三日 {聖チダコ S. Didacus. 七二頁

十四日 {聖スタニスラス・コスカ修道士 S. Stanislaus Kostka. 七九頁

十五日 {聖女ゼルツルダ童貞 S^a. Gertrudes, Virgo 八八頁

十六日 {聖エドモンド大司教 S. Edmundus, Episcopus. 一〇〇頁

十七日 {聖グレゴリオ・タウマツルゴ司教 S. Gregorius Thaumaturgus. 一一二頁

十八日 {聖ロマノ補祭殉教者 S. Romanus, Martyr. 一二三頁

十九日 {ハンガリヤの聖エリザベト寡婦 S^a. Elisabeth Vidua Marburg. 一三三頁

二十日 {聖フェリクス・デ・ワロア (三位一体の律修會創立者) S. Felix de Valois. 一四三頁

廿一日 {聖マリアの奉獻 Presentatio B. Marise Virginis. 一五三頁

廿二日 {聖女セシリア童貞殉教者 S^a. Cecilia, Virgo et Martyr. 一六三頁

廿三日 {聖クレメンズ第一世教皇殉教者 S. Clemens, papa et Martyr. 一七六頁

廿四日 {福者ヨハネ・ガブリエル司教・ベトロ及其侶殉教者 BB, Joannes Gabriel Taurinus Dufresse Episcopus et Socii Martyres, .. 一八六頁

廿五日 {聖女カタリナ童貞殉教者 S^a. Catharina, Virgo et Martyr. 二〇六頁

廿六日 {ポルトモリシオの聖レオナルド S. Leonardus a Porto Mauritio. 二三八頁

廿七日 {日本の福者木村レオナルド及其侶殉教者 S. Leonardus Kimura et Socii Martyres. 二〇〇頁
廿八日 {十字架の聖ヨハネ博士 S. Joannes a Cruce. 二〇三頁
廿九日 {聖サツルニノ司教殉教者 S. Saturninus, Episcopus et Martyr, 二〇三頁
三十日 {使徒聖アンドレア S. Andreas Apostolus et Martyr. 二〇三頁

目次 (終り)



天國に於ける諸聖人 (一日)

(日三) 貞童ペルア女聖



(日二) 魂靈の獄煉



(日九) 者教殉ロドオテ聖



(日四) 教司オメロポ・ロロカ聖



(日四十) 士道修カスコ・スラスニダス聖



ふ給れば現に彼スズエイキ幼

(日一十) 教司ノチルマ聖



聖人未だ軍人なりし時、貧者に外套を裂き與へらる。

(日九十) 婦寡トベザリエ女聖のアヤリガンハ



ふ給み憐なごな人病人きし貧

(日五十) 貞童ダルツルセ女聖



(日二十二) 者教殉貞童アリシセ女聖



(日十一) 聖マリアの奉獻



(日五十二) 者教殉貞童ナリタカ女聖



。るらめしせ心改を等彼後の戦論ミ者學の人十五

願者ヨハネ●ガブリエル司教。ペトロ及其侶殉教者 (二十四日)



(日八十二) 士博ネハヨ聖の架字十



(日六十二) ドルナオレ聖のオシリモトルボ



(日十三) アンドンア聖徒使



聖人物語 (第十一之卷)

十一月一日

諸聖人の大祝日

公教會は、その信者に世界人類の歴史を追想させるため、一年間を色々の期節に分けるのです。即ち教主御降誕前の待降節は、世界の始めから人々が教主の御降誕を待つてゐた舊約時代を想起させます。又御降誕から聖靈降臨迄の間はイエズス・キリストの御一生涯に於ける私生活、公生活及び光榮の生活などを想ひ出させ、聖靈降臨により公教會を確立致された時を以てキリストに關する期節は終ります。又聖靈降臨から諸聖人の祝日までを此逐諳の世に於ける聖公教會の種々の歴史を記念する期節と定められてゐるのです。即ち十一月は歴年の終りの月であります。

さて、天國は我々公教信者の目的であつて現世に於ける功績の報いを受ける所であります。其處は再

聖人物語 諸聖人の大祝日(十一月一日)

び失ふ事の出来ない幸福な所、もう何物にも別れることのない、天主様を失ふこともない場所でありませぬ。此天國のことを思考へるのは、此島流しの世に生活してゐる我々にとつて此上なき慰めでなければなりません。聖公教會が今日の祝日を定められた理由も實に其處にあるのです。

此世界に始めて人類の先祖が造り出されてから今日に至るまで、生れては死んでいつた人の數は何千萬億人あるだらうか？、それは誰れも數へることできないでせう。その中天國に入つて終りなき福樂を受けてゐる者が幾人あるのでせうか？、「地獄の道は廣いが天國の道は狭くて此處に入る人は少ない」とキリストが歎息なされたことを考へ、また實際世人の日々爲す所の行ひを熟視すると矢張り極めて少ないやうに思はれますが、しかし、天國に無事に入る人がいくらずかないと謂つても、長い世紀の間に此處に入るの榮えを得た人の數は實に數へきれないほどあるに違ひありません。聖ヨハネも黙示録に「我れ誰も數ふる事能はざる大群集を見たが、彼等は諸國、諸族、諸民、諸語の中より來りしものである」と謂つて居られます。

聖公教會は歴史年中、毎日聖人を記念し、之を祝して居りますが、無數の聖人の中には其名さへ知られてゐないのもあつて、實際三百六十五日間に充分祝することが困難であるところから、聖人全體を一緒

に祝するために特に諸聖人の大祝日を制定し、戰鬪の此世に居る我々信者に、榮えの天の國に居る諸聖人達を祝させるのであります。

此祝日が制定されたのは六〇七年でありました。當時ローマにパンテオンと云つて名高い偶像禮拜堂があり、此の建物は形が圓くて頗る壯大なものであつて天井に大きな穴が開てゐます。キリスト降生前二十七年に、偶像教の人達がジュピテルと凡ての神々を祀るために建てたものであります。約そ四百年間此處に於て彼等は盛んに偶像を拜んでゐましたが、後ローマ皇帝が眞の宗教の信者となつてから該禮拜堂は閉鎖され、其儘長い間打捨てられておりました。六〇七年、時の教皇ボンファツシヨ第四世はフォカス帝に請うて之を天主堂に使用すべく譲り受け、自ら之を祝別して眞の神に献げ、聖母マリア、諸殉教者の保護の許に置かれました。そしてカタコンブから發掘した殉教者達の遺骨を此所に納めて、殉教者の元后なる聖母マリアに献げられたのであります。

斯の如く長年間偽りの神々、諸の罪惡を祀る爲に使はれてゐた此建物は、こんどは眞の神、聖母マリア、諸聖人のために使はれるやうになつたのです。之は實に、眞理と正義の勝利であつて、若しネロ、ジオクレシアノなど昔聖公教會を迫害した皇帝達を蘇へらせて此光景を観せることができたならば、

彼等はこの長年間拜んでゐた偶像は亡び、迫害を加へて虐殺した殉教者達が尊ばれてゐるのを見て如何なる感じがするでせうか。その時の彼等の驚きと後悔の有様が目に見えるではありませんか。しかし世の終りに當つてイエズス・キリストが大なる權勢と威光とを以て天降り、萬人蘇へりの中に、すべての敵に打ち勝ち給ふ時の有様は、是よりもどれほど大なる光景を呈することとせう。我が日本に於て今尙偶像を拜んでゐる人達の多いのは洵に悲しむべきこととあります。しかし、いつか偶像に打勝つて天様の御光榮が顯はれる日が来るに違ひないのです。我々はその爲に熱心に祈らねばなりません。

名高い雄辯家ブルダルは諸聖人の祝日について斯う申しました。

『聖公教會は一年中毎日色々の聖人を我等に見せてから一たん幕を下し、こんどは聖人全部を一時に觀せる爲幕を切つて落すのである。そして諸々の聖人の模範は我々に斯う語つてゐるやうに感じられる。公教信者よ、汝等の信仰の英雄豪傑を見よ、世は彼等を受け容るゝに足らない、彼等は浮世を輕んずることによつて天主の聖意に適ふ者となり、今は天國の限りない幸福を受けてゐる。汝等も各々己に顧みて、彼等の遺した模範に倣へ。彼等はすべての理屈や權利を以て我等を屈服させるのではなくたゞ何となく我等を引付ける力を有つてゐる。天主は丁度昔モイゼに契約の櫃を造らせる時、その形

を示して、此形に造れとお命じになつた如く、聖人達を我等の目の前に置いて、汝等是に倣へ、而して信仰上の務め、正義、愛徳、神に對し他人に對し己に對する務めを完全に行ふやうに努めよ』と。聖徳を行ふは人間の力に超えるものであります。之を行ひ易くするためにイエズス・キリストは『我が負はする範は快く、荷は輕し』と被仰つた如く、天主様は聖人達の模範を示して下さるのであります。實際模範が無いと我々は失望するかも知れませんが、幸に夥多の殉教者、童貞者、色々の階級の人が聖人になつた事を見せて、我々に力を添へて下さるのです。

聖人達が天に於て大なる幸福を得るやうになつたのは、決して此世に於て奇蹟を行つたためとか、或は目に立つ様な異常な行ひをした爲であるとは謂へません。奇蹟を行ふ力は天主様の聖慮からのみ出る恵みであつて、奇蹟の有無は聖人となるに關係がありません。多くの聖人達はさういふ力は受けてゐませんでした。たゞ天主様の御勸めによく従ひ、聖寵を受け、超性的の狀態のうちにすべての業をした爲であります。多くの聖人の生活は、外面に於ては普通の人と別段異つたところはありますが、人の心の秘密までも知り給ふ天主様の御目には、人間の見る所と大に違ふのです。聖人達は常に天主様の御前に歩み、絶えず厚い信仰、勇ましい心を以て天主様の聖旨に適ふ様に且つその光榮を求むる熱望を抱き

つゝすべての行ひを致され、それによつて天國に功の大きい寶を積んだのであります。然らば聖人は少しも罪を犯さなかつたかと謂ふに決してさうでない、矢張り我々同様の本性を具へ、同様の生活をしてゐたのであるから、罪を犯す機会もたび／＼あつたに違ひありません。しかし、その心がけが違つてゐました。即ち毎時も五官を慎しみ、慾望を抑へ、祈りにつとめ、天主様を敬ひ愛し、どんな小さい罪でも之を犯さないやうにその機会を避ける様に努めてゐられたのです。聖人の中にはダビド、ベトロ、パウロ、マリヤ・マグダレナ、アウグスチノなどのやうに大罪を犯して天主様に遠ざかつてゐた方もありましたが、後悔を起して苦行と奪發とを以てその罪を滅ぼし、救靈の生涯に入り、大聖人となられたのであります。

之によつて考へると、我々は聖人達の跡について行くのは決して難事でないことが解ります。天主様の聖寵は昔の聖人方のみ加へられたのではなく、我々のためにも等しく與へられるのであります。公教信者なる我々は、此諸聖人の祝日に當つて勇氣を新たにし、厚い信仰を起して、その示して下さつた模範に倣ふやうに努力せねばなりません。

十一月二日

死者の記念日

カトリック教會では十一月を以て死者追念の月と致します。故にその第一日には天國に居る聖人達を祝してその善徳を讚美しお傳達を祈り求むるのですが、翌二日には煉獄の靈魂達即ち死したる信者方を追念して特別に是が爲にお祈りをするのであります。

聖人方の幸福な住み所である天國と、惡人達の苦罰を受ける所である地獄との中間に、犯した罪の償をまだ充分に果さないやうに死んだ善人の靈魂かとまづつて清められる場所即ち煉獄が有るといふのは信仰すべき一つの教理であります。

古來聖公教會の教へる所によつて知られてゐる煉獄の存在といふことは、また天主様の完全なる正義に於ても必要であることが知られます。何となれば、天主様は完全無缺で聖なる御者でありますから、全く聖なる者のみ之に近づくことができます。又天主様は至つて明かなる、至つて義なる審判者であるから、凡ての罪とその償の完全なる度を守り給ふのです。故に善人であつても未だ赦されない小

罪あるか又はすでに赦された大罪の償を果してゐないならば、聖人の純全な幸福を得る前にその罪に對する償を全く果して天主様に對して負うてゐる罪の負債を果す必要があるのです。

煉獄に居る靈魂は何な苦しみを以て此償を果すかといふに、聖會博士達の説によると、煉獄の苦しみは此世の如何なる苦難、刑罰にも勝つて苦しいものであると謂はれて居ります。煉獄に於て靈魂は火を以て清められるのです。其火は物を焼いて之を失せしめるやうな性質の火ではありません。聖トマスの意見によると、此火の恐ろしいことは、永遠に繼續すると云ふ點を除くと地獄の火と少しも變らないと謂ふことです。しかし煉獄の一番の苦しみは此火ではなく、もつと他に殆んど無限ともいふべき苦しみがあるのです。それは即ち天主様を睨りながら、直接視ることができないといふ事です。現世では我々は天主様を物影から見る如くおぼろに睨ることができるとのみですから、従つて之を愛することも淺いのですが、煉獄に在る靈魂は、有形的の此世と肉體とに離れたのですから、天主様の美善を直接見る如く完全に睨ることができるとです。ですから天主様を愛する程度は、此世に肉體を有する我々の想像も及ばぬほどであります。されば一刻も早く天主様の御側へ行きたいと云ふ望みが盛んに燃えて堪へられないのです。しかし天主様の正義の爲に之に遠ざかつて居ることはその苦痛實に言語に絶するほどで、煉

獄を出たいといふ望みは一日千秋の思ひをして居るのであります。煉獄に在る靈魂が、斯く長く感じつつ苦しんで居る期間は實際どれほどであるか、勿論その人の犯した小罪の数や、また残つてゐる大罪の償の多い少いによつて差違はあらうが、これ／＼の罪のためにこれほどの期間煉獄に滞留すべしと云ふ天主様の教へがないから明確には申されませんが、聖人方の謂ふ所によれば數年間ともいひ、或は公審判の時までもいはれて居ります。

しかし煉獄と云ふ暗黒の獄に止まる靈魂は苦しみばかりで何の慰めも無いかといふに決してさうではありません。苦しみばかりあるのは地獄です。煉獄の靈魂の爲に大なる慰めとなるのは、先づ第一罪が無い事、また罪を犯す危険も無い事、その救靈は確定してゐるのを知つてゐる事などでありませう。尙煉獄の靈魂は天主様と友愛の關係があるから深く天主様を愛するのです。其爲に煉獄の苦しみは人情としては恐ろしいが、しかし此處に居る靈魂は却つて喜び甘んじて苦しみを忍ぶのです。なぜならば苦しみを以て天主様の正義に満足と與へ、次第に清められて天主様の聖意に適ふものとなる事を知るからであります。それですから煉獄の靈魂は現世に再び歸つて、すでに確定してゐる聖寵と天の永福を失ふ危険に逢ふよりも、寧ろ如何ほど長くても此處に於て苦しみを忍ぶ方が遙に勝ることを知つてゐるのです。

斯の如く彼等は聖寵と天主の永福の價値を悟つてゐますから、煉獄は苦痛の所であつても其靈魂は大に慰めを得てゐるのであります。

煉獄について以上の事を考へると、我々は茲に二つの教訓を與へられるのです。第一は煉獄の靈魂を勞つて彼等を助けねばならん事、第二は天主様の審判を恐れて罪を犯さぬやうに注意し、犯した罪は之を償ふやうに努めるといふことであります。諸聖人の通功の教義によりますと、煉獄の靈魂は天主様の愛子であつて且つ我等の親しむべき兄弟であるから、我々は祈禱と善業とを以て彼等を助け得られるのであります。されば我等は喜んで此愛の業を行はねばならぬのです。天主様も亦これを爲すことをお勧めになつて居られます。なぜならば煉獄の靈魂はその愛子その親友であるから、一刻も早く彼等をして天の永福に與らしめるやう我等が彼等に代つて天主様の正義に對するその罪の償をするを切に待ち給ふ所だからであります。故に煉獄の靈魂を助けるのは一面に於て天主様の聖意に満足を得させ奉つることであるのです。

尙煉獄の靈魂は我等の親しき兄弟であります。その兄弟が甚い苦しみを受け、自ら助くるの力なく、我等に向つて「我が友よ、我を憐れ、そは神の手我を打てばなり」と泣き叫んでゐるのです。我等どう

して之を助けないと云ふ無情な態度を持してゐられませうや。また煉獄の靈魂を助けるのは己の裨益でもあるのです。なぜならば彼等は決して恩義を忘れるものではありません、煉獄に居る時は勿論、天國に入つて後も、その苦しみを縮め天の永福を得させてくれたものを忘れず、其恩に報ゆるため天主様に代願すること疑ひないのです。ですから煉獄の靈魂を助けることを熱心に勵んだものは、必ず彼等の傳達によつて肉體上にも靈魂上にも著しき恵みを受けるに違ひないのであつて、昔から其例は數へられないほどあるのです。

煉獄の靈魂を助ける方法は數々ありますが、その主なものは、祈禱をする事、祈禱の中にも特にロザリオの祈禱、十字架の道行、お告の祈りなどの如き贖宥のついたのをするは更によいのです。次に慈善の業、即ち貧困者に施し、病者を見舞ひ、無學な者に教へを聽かせるなどの如き業をすること、大齋、小齋、其他の苦業を爲す事、聖體を拜領する事、特にミサを拜聴し、またミサ聖祭の執行を願ふことなどであります。斯ういふ善業、特に無限の功德あるミサ聖祭は煉獄の靈魂を助けるに大なる効果がありますから、熱心な信者は之等の善き業を屢々行うて彼等を助けるに力めるのです。

煉獄の罰の恐ろしいことを想ふのは我等にとつても有益であります。即ち天主様が聊かの罪までも斯

程の苦しみを以て罰し給ふのですから、我々はすべての罪、とりわけ故意と犯す罪を避ける様にせねばならんといふ事を強く感ずるのであります。聖パウロの言葉によれば「小罪は薪、秣、藁のやうなもので、之を犯すことに己を責める煉獄の火を熾にするための燃料を積むのである。あゝ己を焼くが爲に薪を積むは愚の極みではないか」と。然るに信仰が冷かで信心の務めを怠る罪を避けるのに不注意なのはとりもなほさず此愚の極みなる行をするものであると謂はねばなりません。されば我々は斯様なことのないやうに氣をつけねばならぬのです。

尙其他われ／＼は、犯した罪を以て天様の義に反き、その光榮を傷けたのですから、之を一厘一毛も残すことなく償はない中は、天の幸福を得ること出来ないのですから、何も煉獄に行く堪へ難い苦しみを受けて償ふ時を待たずとも、現世に居る間に其償を果すにつとむべきではありませんまいか。

聖公教會は十一月二日を以て死者の記念日と定め、尙此月を死者追念の月として我等に煉獄の靈魂を助けるに力を注ぐやう勧めるのです。故に我々信者は本月中特に彼等靈魂の爲によく祈り、なるべく平日にもミサ聖祭に與り、また時々ミサ聖祭執行を靈父に依頼し、又自宅に在つてもその目的の爲にコンタツを繰るとか其他の祈りをするなど、つとめて煉獄の靈魂を助けるやうに勵むべきであります。さす

れば、それはつまり自己の爲ともなつて、死後天様の御憐みを蒙ること疑ひありません。

十一月三日

(降生後一二二一年生)

聖女アルペ童貞

(羊飼ひ)

彼の名高い十字軍の戦のあつた時代には信仰の固い勇者が多く出ましたが、こゝには可弱い婦人の身でありながら、他のそれに劣らない程の信仰をもつて居つた方のお話を致しませう。

その名はアルペと云つて、フランスの片田舎の農家に生れました。幼時から深く天様を愛し、心柔和で慎み深く、親の手傳のため終日野原に出では羊の群の番をして居りました。その心はつねに平和で、凡ての人に對して親切を竭し、會ふ人皆その微笑を見て居りました。

聖女も常に自分の言葉、行ひ、身なりが他人に對して心配の因となつてはならぬと注意し、またその心は日一日と天様の方へと引きつけられて参りましたが、漸く十五六歳に達したとき生涯をイエズスキリストの天配として捧ぐべき決心をして靈父に意見を聞き、その承諾を得ました。彼女は常に「主イ

エズス・キリストは十字架をもつて人々を救ひ給うたのであるから、私も人々を救ふために自分を犠牲にしよう』といふ雄々しく美しい心を失ひませんでした。

それから間もなく、信仰の厚い父親は立派な死を遂げました。家庭の杖とし柱ともなつて居つた父親に死なれた彼女にとつては大きな悲しみであり苦しみでもあつたでせうが、信仰の厚い彼女は、たゞ天主様の思召であると思ひ心よく服従し何一つ不平を云はず、やはり活潑に忠實に働いて居ましたが、たまたま彼女は恐ろしい世人の嫌悪する病に襲はれたのです。

美しい柔和な愛嬌のあつた顔には醜い腫物が一面に生じ、青くなりついで黒くなり、悪臭をさへ放ち出しました。人々より嫌はれ恐れられてゐる癩病であつたのです、薬もなく施す醫術もありません。

世間の人から見すてられたアルベは只一人生活せねばならなくなりました。それで藁小屋をつくり羊の番をしながら天主様へ祈を捧げて居りました。ある日のこと非常に渴を覺えたので水をのみに清い流の小川に参りましたが、その川の水を汲みとることは癩病患者には法律で嚴禁されてあるので、道往く人に一杯を願つたのです。しかし誰も汚い恐ろしいこのあはれな患者の願を聞き入れるものはありませんでした。それでしかたなく天主様に御願をし、持つてゐる杖を地面に立てますと、其下から清らかな

水が湧出でましたので、やつと渴を癒しました。然し病はますます蔓るばかり、たう／＼羊の番も出来ず、どうと床に臥しました。友達等は勿論兄弟さへも離れ、母親は時々食物を持つて来て飢死を防ぐ位で丁度食物を犬にでも與へる様になつてはすぐに立ち去るのでした。時にアルベは二十歳でありました。

まもなく聖き週間になり、自分のこの苦しみをば御主イエズス・キリストの苦しみに合せ、次の日曜日のキリストの復活の喜を考へ、一心に謙遜して熱心に健康回復を聖母マリアの汚なき御心に願ひました。ところがその願ひは聴き入れられ、聖母マリアはアルベの部屋に光り輝く姿でお現はれになつたのです。

アルベは病床の中からこの不思議な有様を見て驚き平伏して居りますと、聖母は徐ろに『私は汝が深く心の底より愛し、度々の苦痛から救を願つて居つた憐の母である。汝の手を伸ばせ』と仰せになりました。アルベは腕は腫物のため體から離れかつて居るので『どうか憐みの母様、御望みならばこの腕をとつて下さい、私は今日のあたり母様の美しさを見、くるしみは少しも感じません』と。聖母は微笑んで手をお伸ばしになつてアルベにお觸れになると、今まで醜かつたアルベの皮膚は見違える程に白く美しい健康の皮膚となりました。さうして新しい彼の使命をお告げになつてそのお姿は見えなくなり

ました『汝は天主様によつて撰ばれ多くの靈魂を救ふ様に』と。
アルベはこの時から物質的の食物は不用とまでなり、心は常に恍惚として、天界の秘密、不思議を知る様になりました。

この不思議な出来事は先づ第一母親の知るところとなり、次いで町の人々はそれよりそれと聞き傳へ多くの人はその話をきいて彼女のもとに参りました。人々は彼女の熱心な信仰とこの恵まれた奇蹟とを思ひ、等しく感動するのでした。彼は食物とてはたゞ御聖體ばかりであります。

ある時のこと、九歳になる生來の啞が居りましたが、聖女の手を口につけると直ちに言葉が発する様になり、またある時は大名が債務者が義務を果さないのを理由としてその妻を人質として牢獄に入れてゐましたが、彼女はアルベ童貞の事を懐ひ出し、切りと天主様へアルベ童貞の功績によつて救けられる様願ひました。ところがまもなく固く結ばれた鐵の鎖は解け、脱れてアルベのもとに至つて御禮を陳べました。また胃痛で苦しむ婦人が聖女のもとに来て『憐み給へ』と泣きながら願ひました。アルベは斷つて『私の様な者がどうして貴女を癒すこと出来ませう、それよりは天主様に祈るか聖母へ御傳達をお願ひなさい』と言ひましたが、病める婦人は強いてアルベの手をとり、十字架の記號をして御祈りをし

深い信頼心をもつて歸へりましたが、まもなくアルベのところへ戻つて全快したことを告げて御禮を述べました。

色々の奇蹟はそれからそれへと擴まり、つひにその地を管轄される司教はこれについて調査を始めましたが、不思議な徳を行ふに充分な謙遜を有つてゐる彼女を見て、果して天主様の御力であると判定を下しました。

司教はこの優れた童貞のために天主堂の横に一つの家を建て、與へました。そして感謝に充ち満ちて降生後一三二一年十一月三日、その靈魂は永遠の楽しい天國へ昇りました。

聖女の死後多くの奇蹟が行はれ、あらゆる階級の人は聖女のもとに傳禱を乞ふ様になりました。

十一月四日 (降生後一五三八年生一五八四年死)

聖カロロ・ボロメオ司教

プロテスタン教の人達が常に曰ふのに『今から四百年ほど前にキリスト教は大に腐敗したから、神は

之を改革する爲に一人の改革者ルーテルを遣して教會の衰亡を救はれたのである」と。之について茲に論ずることを避けませんが、事實ルーテルが如何ほど精神界に害を與へたかは獨逸國の歴史を見るとよく判ります。丁度今日祝ふ聖カロロ・ポロメオはルーテルと同時代の人ですから、彼の傳を録すに當りルーテルの略歴を併せ記して讀者の判斷を請ふことにしませう。

聖カロロ司教は一五三八年イタリー國の有名な貴族の家に生れました。その両親は熱心なカトリック信者でありましたから、其子の教育には特に意を用ひ、善き習慣をつけるやうに注意し、いつも道徳に關する話を聞かせて居りました。其上親は愛の深い人でありましたから常に貧しい人を憐んで食物を與へ、金を施しなどして慈善の業を爲すのを樂みのやうに、また自分の爲すべき義務のやうにしてゐました。其施しをする時には必ず子供達を連れて行くのが例でありました。そして子供達に言ふのに「貧しい人でも金持でも同じ人間である。貴い者も賤しいものも同じく天主様の與へ給うた靈魂を有つてゐる。されば誰でも皆兄弟であるから之を憐んで救はねばならぬ」と。

此親にして此子あり、カロロは五歳にしてすでに幼な心にも、はや天主様の聖應を曉り、その行狀は聖人のやうでありました。彼は父に向つて司祭になりたいと願ひました。それは、司祭は天主様に仕へ

る聖い職務であつて、また深く人を愛することもできると考へたからであります。父はかねてから彼を軍人にしようと思つてゐたのですが、此願を聞いて大に喜び、汝の望みの通り司祭になることを承知するから必ず聖人になるやう努めよ」と申しました。それから彼の教育に力を入れ、良い師を選んで學問を勵ませたので、十七八歳の頃にはその學力人並勝れて拔群の成績を擧げ大學校に入りました。

カロロは品行方正で學力は優れて居りましたから誰とて尊敬せぬものはありませんでしたが、學友の中に非常に不品行なものがあつて、カロロの正しい行ひを目的の上の痛となし、どうかして聖人の心を墮落させようと思ひ、一人の淫婦と語らひ、彼を聖人の室に遣し、毒言を以てさまざまに誘はせました。しかしカロロの心は鐵石よりも堅く、山よりも靜かで、如何にしても動かすことができないのみならず却つて此女に向ひ熱心にその邪惡の身に害なることを説き聽かせ、天主様の御怒りを蒙ること、地獄の苦罰の恐るべきことを語り、いと懇に諄々と諭しましたので、罪を犯させる爲に出て來た此女は却つてカロロの眞面目な正しい言葉に泌々と感じ入り、今迄の悪しき行を恥ぢて涙を流し、其不心得をひたすら詫びて心を改めたのであります。カロロは大に喜んで圖らずも一入の罪人を救ふことができたのを天主様に感謝しました。

斯て大學校を卒業し、ます／＼熱心に天主様に對する義務を盡し、朝夕教への道に精進し、身は貴族の出でありましたが少しも奢ることなく、さながら貧しい人の様に生活してゐました。されば其名聲次第に廣まり、人々は聖人の如く敬ふのでありました。時の教皇は彼の學徳勝れたことを聞いて召寄せられ、まだ若いにも拘らず樞機官の高い位に就かせられました。彼は從順を守つて此顯職を受けましたがしかし其身分の高い爲に今迄のやうに無暗に質素な生活もできにくくなり、衣服もあまり粗末なものに着けられず、交際も自然華美にせねばならないので、此點を深く悲んで居りました。

茲に所謂宗教改革者なるルーテルの事を挿みませう。

彼の兩親は他國から入り來つたもので其國の人ではなかつたのです。それは生國に於て殺人事件に關りがあつたため逃れて浪ひ來たと謂れてゐます。家許より貧しく、その性質は剛情で、ルーテル自ら言つてゐるのに、「幼少の頃父に足にて蹴られ手にて打たれしこと度々あつた」と。以て彼の性質なり父親の慘忍性までも伺はれるのです。ルーテルは成長の後學校に入りましたが、中々剛情な性でありましたから學友らと争ふこと常時であつて、打たれ、傷つけられたこと度々でありました。彼は大學へ入つて勉學致しましたが、素より伶俐で其進歩も早く、教授は修道者であつて懇切に教へましたか

ら優等の成績を擧げたのでありました。彼はその性質強かつたに似ず頗る臆病で、殊に雷を恐れしました。或時大雷雨があつてルーテルは怖れ戦き、一室に閉ぢ籠つてひたすら神に祈り、雷の禍を脱れ、一命を助けて下されば必ず修道者となつて神の爲に盡すことを誓ひました。後にその約の通り朋友に別れて修道會に入り、不犯の戒を守り修道者の勉めを行つてゐましたが、是が却つてルーテルの身の不幸の緒となつたのであります。なぜかと謂ふに、ルーテルが修道者となつた動機が、心から天主様を愛する熱心の爲でなく、一時身の危険を怖れて臆病の爲に誓を立てたのを破り難くして修道者となつたのであるから、眞に天主様の聖意に叶うたものではなかつたのです。ですからルーテルの爲には修院に入らずに世間に居つて天主様の道を歩んでゐたならば、その博學、智識の俊才となつて世を益したかも知れません。又異教を建て眞正の宗教に反旗を翻すことに至る筈もなかつたのでせう。彼は止むなくして修道者になつたのですから、時日が経つに従うて始の熱心はだん／＼冷え祈禱を怠り、規則を破り、行狀荒んで、終に事に托けて修院を脱したのであります。さて修院を出た彼は忽ち前の誓約を忘れ、不犯の戒を破つて或る婦人と親しみを妻として同居し、近傍の貴族の家に身を寄せたのであります。此貴族は品行良からぬ者でありましたが、よくルーテルを遇ひ共に

酒を飲み肉を食ひ、教會を罵り、男女の物語を爲し、いたづらに大言壯語して、己が世話になつた修友をさへ悪しざまに誹り、遂に異端を建てたる基礎を定め、茲に人々を説き勧めましたから多くの墮落したもので、平生教會に不満を抱いてゐる者など多数彼の許に馳せ参じて其弟子となり、彼等は教會は腐敗してゐるから之を改革するのであると公言したのです。當時世の中は亂れ何となく騒がしく獨逸では諸所に戰亂が起つてゐました。

さて、ルーテルが宗教改革を叫んで精神界に波紋を起した時であり、且つ教會内にも聖會法規を改めねばならんことがあつたので、教皇は諸國の司教をトレンチノに招集して大會議を開かれました。多くの司教は互に意見を吐いたのでありますが、カロロは此時ミラノの大司教でこの會議に出席し、卒先して色々の規則を設け、當時ある司教の中には衣服を飾り、美麗なる乗物を用ひ、多くの供を隨へ、美しい装をして誇る習慣があつたのをカロロは之を改め、先づ自ら從者を廢し、出來得る限り冗費を省いて衣食を質素にし、祈禱を長くし、度々禁食を爲し、またすべての聖職者達に其職務の尊いことを徹底させ、其務を忽略に爲さぬやう戒め、世俗との交際をなるべく避けるやうにして専ら天主様に仕へ、人々の靈魂を救ふことに努め、之が爲に祈りせねばならぬことを諭し、自ら先立つて實行に力め、熱心

と温和な手段を以て勵みましたから、人々は大に感服して彼に倣ふやうになつたのであります。

多くの修道者中には金銭を澤山持つて贅澤をする者もありましたので、司教はそれらの人々に對して御主イエズス様の御生涯は清貧で御自分の爲には少しも金銭を使はず、すべて人を救ひ民を助け給うたことを懇ろに説き諭してその行を改めさせたのであります。又病人を憐み貧しいものを恵み、時には自ら貧者の家を訪れて之を慰め勵まし、富める者の家には他の人を遣して教へを説かせるのであります。まことに彼は衣類、什器等あらゆる持物を賣て之を貧困な人々に施し、自らは全く貧乏人の如く生活して居りましたから、人々は之を見て甚く感動し、涙を流してその教に従ひ徳の道に勵むのであります。

聖人は是でもまだ己が徳の淺きを思ひ、人々の爲に終夜眠らずに祈禱をし、或は悪人あるときは特に長い祈りを天主様に捧げて其改心を願ひ、暑い夏も寒い冬もたゞ一枚の薄い布子を纏ひ、眠る時は蒲團を用ひず板の上に臥すといふ有様でありましたので、人々はあまり嚴しい行をして身體を害はるゝを慮りて、少しは休みてはいかゞと注意しますと、彼は少しも聽容れず『我身體はミラノ市の信者の爲に犠牲として天主様に捧げてゐるのである』と申され、之を聞く者皆涙を流して感じ入るのであります。

た。悪人の中にも聖人の話を聞きその崇高な姿貌に接して心を改め善良な人になつたものが少くありませんでした。

こゝで又ルーテルの事を少し挿みます。

ルーテルの異端は、墮落に傾いてゐた不品行な人民に迎合した爲に、日に増し盛んに弘まつてゆきました。そも／＼此ルーテルの異端の説は、何事を爲さずとも唯々キリストを信じさせれば救はれる悪魔を憂ふるに及ばず、人は自分の心の儘に、成さうと思ふ事をしたらよい、人は自ら己の主人であつて、其心は自由であると云ふのですから、蒙昧な無學者らは是は面白い教へであるといつて我も我もと集り来り、その結果いよ／＼不品行に流れるものが多くなつたのであります。ある貴族は行状良からぬ人でありましたが、ルーテルは夫れを咎めぬばかりか、彼の爲に二人の妻を持つことを許したのであります。是は實にキリストの教に甚しく背いた亂暴な處置であつて、ルーテルが後に自ら、『我が教へは初めのほどは道徳も保たれてゐたが後に亂れたものが多い』と云つたのを見て、其教の良からぬことが明かに分るのであります。

さて聖カロロの更に有難い聖人である事の最もよく顯れたのは、ミラノ市に悪疫饑饉の流行した時で

ありました。此疫病と云ふのはペストであつて、其勢ひ猛烈で之によつて斃れる者日に數千を以て數へると云ふ次第で、之を救助すべき政府の役人、又は貴族の人達は悉く恐れ戦き、己が身の危険を避けて他に逃げ出すといふ始末で、疫病は益々猖獗を極めるのであります。ある人聖人に向ひ、此病に罹らぬやう避けては如何と勧めました。聖人は聖書を引いて、眞の牧者はその羊の爲に生命を棄つとあり故に我は此所に留つて斃るゝまで救助に従ふべしと謂つて、それから毎日晝夜の區別なく諸所を巡回して罹病者を慰め、死者を丁寧に葬りました。寔に此病氣にかゝる者は悲惨の極みで、七轉八倒の苦みを受け、道傍に倒れ其儘死ぬ者さへあるのです。されば至る所に呻吟の聲聞え、行倒れの死體を見るといふ痛ましい光景を呈して居るのであります。ある時聖人はその通行する路傍に一人の小兒が、死んだ其母の傍に寝てゐるのを見て之を連れ歸り養ひ育てたこともありました。

斯の如くペスト病の勢ひ少しも衰へる様子がなないので、聖人は此病氣にかゝつてゐない信者を呼集め天主様の救助を祈り、自ら跣足となつてその首に繩をかけました。之は當時の風習に従つたもので、罪人が刑場へ曳かれ行く時に爲す有様であつて、聖人自ら罪人の姿態を示されたのであります。聖人の斯る熱心によつて、さしも猛威を逞しうした疫病も次第に勢ひ衰へて遂に全く終熄するに至りました。多

くの信者も聖人に倣つて深い愛を現はし能く救助に盡したので全快した者も尠くありませんでした。疫病は跡を絶ちましたが、次で再び難義が起つて参りました。それは長い疫病の爲に人々其日の職業を爲すもの少く、農業に従ふものもなくなつたので忽ち大饑饉が起つたのです。此時聖人は先に疫病を避けて他に逃れた貴族の人達の許に行き、彼等に對して恐るゝ事なくその卑怯を責め、義務を盡さず安逸を貪つたことを謝罪して之を償ふやう諭し、多くの金錢、穀類を出させて窮民を救ひ、病院を建て、病者を收容し、孤兒院を起して寄邊ない孤兒を育てたのであります。その功績は實に偉大なものでありと謂はねばなりません。

此時彼のルーテルは何うであつたかといふに、當時獨逸國の政治は我が封建時代の頃と同様に萬事壓制を以て人民を支配して居りましたが、ルーテルは我が教へを信すれば汝等人民は自由を得べしと教へた爲に、之に従へば政府の命令に背くも皇帝に逆ふも亦自由であることになるのですから、無智の人民は大に騒ぎ出し、國中諸所に反亂が起り、數年間騒動絶ゆることなく、其結果として飢饉、疫病など流行して死する者續出する状態でしたが、ルーテル一派の者は飲酒に耽り、公教を誹り、其上己が誘因となつて起つた騒動について人民の無智を嘲るのでした。斯の如く不品行であつたルーテルは

其死する時愛妾と共に棲んでゐましたが、ある時彼女は、天空の澄みわたつた清らかな景色を眺め、實に美しきは大空ですね、と言つたとき、ルーテルは之を聽いて、其美しきは我等の爲ではないと云つて歎息したさうです。此時から毎日惡魔に襲はれ、此處にも怖あり、彼處にも怖ありと晝夜の別ちなく叫びつゞけ、終に落膽失望の裡に死んだのであります。

それに引かへて聖人カロロは教への道の爲に種々の勞苦を重ね、そのため身體を損ひ、次第に病身となり、すでに臨終に迫つた時靈父達を戒めて謂ふのに、天主様に祈禱し、人民に道徳を説き教へる外、必ず俗事に關係してはいけない、決して聖職者たるの自分を忘れ、其務めを怠つてはならないと懇に諭し、又修道者達に對しては、常に貧しく生活して其心を高尚に保ち、人民を憐み、施しを爲し、苟にも教へに關しては勇氣を奮つて之に従ひ、天主様の光榮を衆人の上に顯すべく努めよと遺言をして眠るが如く御死去になりました。其時御主顯れ給ひ、聖人の容貌はまことに麗しい悦びの色を現し、其靈魂は天に上げられたのであります。

天主様は御自分の教會を常に保護なされますから、信者が信仰上の迷ひに遇ふ時には奇蹟を現はして信仰を強め給ひ、又異端の起る時には學徳優れた聖人を遣して、その行ひの手本によつて誤謬を正させ

給ふのです。聖カロロも矢張り異端の起つた時代に選ばれた高徳な方でありました。我等は此聖人の事蹟を読んで異端の説の恐ろしいことを曉ると共に公教の旨に従つて正しい生活を爲し、天主様の聖意に逆ふ所の異端異説の滅びるやう同聖人のお傳禱を祈らねばなりません。

十一月五日 (降生後一六二二年死)

日本の福者パウロ・ナワロ及其侶殉教者

聖パウロ・ナワロは、イタリー國ナポリに生れ、十八歳でイエズス會に入り、其處に於て司祭となりました。彼は永祿年間に日本に渡來し日本語に熟達して初め伊豫に布教し長崎、大村、有馬等に傳道し、次いで山口に至り此處に留る事四年、其間數多の人々を教化して眞の宗教に導きました。慶長六年再び長崎に移りましたが思ふ所あつて願を立て、自ら進んで豊後に至り十二年間一日の如く東に馳せ西に走り熱心に奮闘した結果、師の徳を慕うて教へを受けに来る者多く信者も多數出來ましたが、慶長十九年幕府の嚴命によつて布教師を悉く本國に逐放する事になり、師も又退去を命ぜられたのでありま

した。止むなく豊後を立退かれましたが、我子の如く愛する信者を棄てて歸國するに忍びず、ひそかに日向に止まつて信者を慰めて居られましたが、元和四年再び豊後に入り同七年十二月御主御降誕の祝日に當り、ミサ聖祭を立てる爲有馬を距る一里余の柱尾村に至り、其歸途に捕へられ島原に護送せられました。此時供をしてゐた家主のリヲニヨ藤島と其子佐太夫及び僕クレメンヌ久左衛門の三人も同時に捕へられました。然るに有馬の新領主松倉豊後之守重政は至つて温和な人で、布教師が罪なくして捕へられたのを深く憫むと共に、ヒリツピンや、マカオ方面と交際を親密にしたいと云ふ考もあつたので師を普通の牢屋には入れず、新たに家を建てて此處に入れ且つ信者の出入を自由にし、聖祭を行ふ事も秘蹟を授けることも敢て咎めず至極寛大に扱つておりました。師は此の新らしい家に自由な生活をする事か出來たので此處で一通の手紙を認めて長崎に留つてゐる布教師長に己が捕縛された顛末を書き送りました。其文面は次の通りであります。

「元和七年十二月御降誕祝日の前に當り支配する布教師の爲に呼出され、上總に至り此處に於て總行解を爲し直に海を渡り島原の大濱に赴き、此所に二日間滯留して夜の間に柱尾村に行き、修行の爲窃に止り此所より有馬の信者に書翰を贈り、御降誕の祝日には必ず其地へ往くべし、故に悔悛及び聖

體の秘蹟を受ける覺悟をせよと知らせましたが、有馬の信者は途中で捕縛せらるゝを氣遣ひ、割禮の祝日迄延し暫く柱尾村に隠れ其地の信者と共に御降誕祭を祝し必ず外出してはいけませんと返事が來ました。しかし私は有馬に往かうと思ひ夜中柱尾村を立出しましたが便船がない爲詮方なく西海道を歩きました。正に一時と思ふ頃國主の家來に出會ひ、すれ違つて行過ぎましたが、彼は私を聊さか疑ふ様子で忽ち歩を止め、月明りに私を眺めるのでした。やがて馳せ返り突然私の胸袷を取つて床屋の家に來れと申します。私は彼を探偵の者と知り庄屋の家に伴はれ夜の明けるとまで預けられましたが、朝に至り國主は私の捕へられし事を聞いて大に心痛したさうです。それは昨日まで私に親切を盡し殊に將軍の命令のあつた時我が領分には布教師の止まる者一人も無しと答へて置いたからであります。斯て國主は心痛のあまり急に使者を馳せ長崎の奉行に報道し如何に處置すれば宜しきかと協議したのですが、其時最早遠近に噂が廣がつておましたから止むを得ず島原に護送すべく決心しました。私は有馬に二十日余り拘留せられ、終に他の大勢と共に島原へ赴く途中、私はキリストの教を頻りに説きましたので護送の兵卒各自大に感心しその長たる人は殊に喜びの色が見えました。此人は先年洗禮を授かつた者で一旦惡魔の誘ひに陥り、今また信仰の話を聞いて心を改め天主の民に立歸らうと思

ひ定めたからでした。有馬に留まる間は信者未信者の別なく私の説教を聞きに來る事を許され誠に都合でした。私の預けられてゐた家の主及び其妻は格別信仰の念を起し心を合せて私を大切に扱ひ、私が島原へ送られた後も土産を携へ來つて領主に見え、私を他の布教師に面會させ様として大村の牢屋に送らるゝ様請願しましたが許されませんでした。しかし私は島原の信者四人と有馬の信者四人とが保証人となりましたから彼等の仲間に預けられました。彼等は大に喜んで私を國主の懇意なる孫右衛門と云ふ人の許に宿泊させ、日々數多の信者を伴ひ來つて深く慰め祭壇を設けて聖祭を行ひ悔悛に力を盡してゐた事です。異教人も絶えず訪ね來り種々物語する中に貴族の人があつて、來る度毎に未來の事や學問の奥義などを質問し、私の答辯によつて大に悟る所あり、之を國主に傳へて信仰の念を起させましたから國主は直接話を聞かんと私に珍らしい菓物を贈り、且つ一人の家來を遣はして私の安否を問ひ、今度將軍の命に依つて止むを得ず師を禁錮しましたが、是は私の本意ではありません。若し師を發見する者が無かつたならば我は師が領内に滞留する事を知つても知らぬ風を装うて

過す答であつたのに之を認め捕へた者のあつたのは返す／＼も遺憾でありました。然れど何とかして師を本國に送り返すべく昨今工夫中なれば、不日よき手段を構する事が出来ませう、其時は師の爲に堅牢な船を準備して充分に食糧を積み大勢の信者を乗せて送らせませう。師の外に尙十名ばかり我が領地に布教師が留つて居るのを知つてゐますが之を認める者が無いのを幸ひ打捨てあります。斯る事情なれば暫く苦しみを忍んで下さい、不日必ず本國へお送り致しますせうと。懇に意中を告げさせました。しかし私は御主の御行ひに倣ひ血を地に流す事を望み日夜その覺悟のみ致して居ります。他日また事の決するを待つて再び報道致します。

師が此書翰を長崎へ贈られたのは元和八年の春でありまして當時の模様を明かに知ることが出来ます師の許へ訪ひ来る人は鳥原、長崎、高久等の信者のみならず豊前、豊後方面から海を航り山を越えて来る者も多く恰も教會の如き觀を呈してゐました。ゾーラ・ヨハネ・パプチスタ神父を時折訪づれて師に告解をせられ、又國主は直接師の話を聞かうと思ひ城中へ招待しました。其時師は一通の書を國主に呈し、自然の道理と聖書の金言などを以て信仰を勧め、且つイエズス會の成立より公教の大略を述べ蘭人

の讒言を辯明せられたので國主は、其書を見て大に感じ師を深く尊敬したのでありました。師は此時の模様を書簡に認め朋友バイザ神父の許へ贈られました。

「豊後侯は私を城中に招き茶菓を饗して後、未來の説を聽いて忽ち不審を起し、萬民の造主たる仁慈の天主は何故萬民悉くを助けずして地獄へ陥し給ふのであるかと。そこで私は侯の身に假令て説明しました、即ち候は其領地を支配するに住民の善惡正邪を糺さず誰も彼も同じ様に賞を與へますか決してさうでないでせう、善にして正しい者は之を賞し、惡にして邪なる者は之を罰するのでせう臣下を任免するにも忠臣は擧げて用ひ、不忠な者は必ず之を退け或は罰するでせう、天主様が萬民に對して爲し給ふ處置も亦之と同じく善人を助け惡人を罰し給ふのは當然ではありませんか。國主之を聽いて大に曉り一言も反對せず、更に親切を盡して謂ふのに、尊師が日本に長らく止まつて居らると其身は危険ですから早く本國に歸へられる方がよいでせう、私が良い様に計らつて上げませうと私は此時國主の厚意を謝し且つ申しました。私が萬里の波濤を越えて遠く此日本に參つたのは日本人に眞の道を教へるのが目的であつて此世の榮えを求めざる爲ではありません、さればこそ三十六年間さま／＼の辛苦を嘗め布教に盡力して齡すでに六十二に達しました、最早本國に歸つて餘生を送る考へ

はありません、日本人民の救霊の爲身を天主様に捧げるの外他に何等の望みを有て居りませんと。國主はますます感じ入り自ら手を揚げて近侍の人達に感服の意を表しました。近侍の人達もまた私に向ひ、斯程結構な宗教をなぜ是迄人々は罵詈譎したのでせう、何か理由があるのでせうかと尋ねましたから、私は懐中から一冊の書物を出して、是は聖き教の罵詈譎せられる理由を記し夫れを辯明したものです讀んで下さいと申しましたら、國主は其書物を近侍の人に朗讀させいよく感服しましたが私に向ひ、今此書物の第四章にある國を奪ふ云々の點に將軍は疑念を抱いて居られると。私は其言葉の終らない中に口を開いて、如何にも將軍の疑念は消えてしまふでせうと謂ふと、國主は暫く頭を傾けて後、水の暖を受けて解ける如く忽ち疑念は消えてしまふでせうと謂ふと、國主は暫く頭を傾けて後、彼のヒリツピン島が歐洲基督教徒の爲に奪められ終に屬國と成つた事實を見ると容易に疑念は解けなると申しました。それで私はまた國主に向ひ、ヒリツピン島の事は餘程複雑な事情があり且つ我國に關係の無い事ですから詳細は調べて居らず從つて充分なお答へは出来かねますが、我がポルトガルがマカオ、マラツカ、コシン、ゴアなど東洋諸國と親密に交際してゐるのを見ても決して國を奪ふなどの事がないのは明かです。又ローマに於てもコンスタンチン皇帝の時代に盛んであつた教會が無事

であつたのを考へて下さいと云て詳しく説明致しましたので、國主は漸く安心して「願くは天主の功によつて日本將軍が信者となることを希ふ、さすれば日本全國の人民は忽ち眞の道を歩み、無上の幸福を享けるでせう」と申しました。さうして私が歸らうとする時、國主は嘆息して私に向ひ、「嗚呼御身を長く日本に滞在することを許し得たならば、日本人民は眞理の教を受ける事が出来て幸福であらうに夫れが叶はぬのは誠に遺憾千萬であります。それは兎も角、其辯明書を寫して置きたいから暫く貸して下さい」と願ひました。私は快く承知して別れを告げ座を立つと國主は玄關まで送り出て厚く謝辭を述べました。私は城を出て歸りましたが、其後國主は貴族の信者に向ひ、自分は佛法八宗が眞の宗教でない事を始めて知つた。故に彼の辯明書の寫しを將軍に献上し、天主の聖寵が將軍を眞の道に入れ給はん事を希ふ。と語つたさうであります。

此書翰を贈られたのは元和八年の春であります、教會に於ては貴い遺物として今尙大切に保存してあります。

斯て師は熱心に祈禱を爲し默想や其他の修業怠りなく只管殉教の準備をしてゐられました。又師と共に

に捕へられた家主のリオニヨ藤島、其子ペトロ佐太夫、僕クレメント久左衛門の三人も深く殉教を望んで他意なく其日の来るのを待てました。師は三人の信仰堅固なのを見て神弟の願を立てさせようと思はれましたが、久左衛門は妻があるので之を除き他の二人に布教師長の許可を得て願を立てさせました。藤島は高久の生れで、幼少の頃洗禮を受け天主様の子となつてゐたのですが、早く両親を失ひ親族の異教人に養はれ、成長して長崎に來り専ら布教に従事した人であります。佐太夫は有馬の鷲の尾で生れ、イエズス會の學校に於て教育を受け、片時も布教師の側から離れたことなく勉強した人で當年十八歳の熱心な青年信者でした。久左衛門は妻のある身であつたので神弟の願は立てませんでした。信仰によつて殉教の幸福を得る事を熱望し他の者と一緒にと専ら天主様に祈つてゐましたが、此年十月に至り師を始め一同放免せられるとの噂があつたので大に落膽して、師は左の書翰を長崎の布教師長に寄せ失望の意を表はされました。

『私は曩に殉教の幸福を得られたスピノラ、カミロ兩神父と同様イタリア國に生れ、同じイエズス會に於て修業したものです。他の二人は既に身を天主様に献げられ、私のみ取残されたのを本意なく思つてゐましたが、此度捕縛せられ、彼等の様に殉教の幸福を得られる時が來たと思ひ、日夜其沙汰』

のあるのを待つてゐますが、國主は將軍の許に往てまだ歸らず、早晚天主様のお恵みによつて血を流すことが出來ると信じますが、萬一放免せられる様な事があらば寔に此上なき失望です。』

此書翰を贈られたのは元和八年十月十七日であります。其後快々として樂ます、日夜黙想に専念してゐられましたが、殉教の五日前に至り、偶と天主様の御告ある如く殉教の事を聖祭中に悟り、最早天國に登つた心地して大に喜ばれたのであります。果して此月二十八日の朝、いよく不日死刑に處せられるとの便を聞くに至つたのであります。其時一通の書翰を認め、前日監獄へ訪ねて來て窺に面會をしたゾーラ・ヨハネ・バプチスタ神父の許へ贈られました。其文は左の通りです。

『昨日はお目にかゝる事ができて歡び筆紙に盡されません、偕て今日私等は最も喜ぶべき便を聞き深く天主様に感謝してゐます。それは他ではありません、將軍はすでに私等を火刑に處す旨命令を發し國主は長崎の奉行に刑場取締の役人を派遣する様頼んださうですから、役人が到着すると直ちに私等は、主の宴席に連る事が能うのです。斯く勝れたお恵みを受けるのを深く天主様に感謝します。貴下も私等に心を合せて感謝して下さい。特に最後の時は非常の耐忍力を與へて下さる様に祈つて下さい、さらば天主様の御前にお別れ申します。』

當時將軍は布教師の窃に滯留する者少からずあるを聞き大に怒り、悉く捕縛せよと嚴命を下し、既に捕へた者は直に火刑に處すべしと命じましたから豊後の國主松倉重政は師の事を長崎の奉行長谷川權六に依託しました、そこで長谷川は彼等を火刑に處すべく準備に取りかかりました。

斯て十一月一日世界中のカトリック教會に於て諸聖人の祝ひを勤めてゐる日に當り、諸聖人の保護によつて師は天國の勝利を得られる事になつたのでありますが、しかし師は未だ其事を知らず毎時の様に朝早く起きてミサ聖祭を執り行ひ、二十人の信者に講義を聴かし、續いて豊後に於て十年間布教を助け師に従ひ熱心に教を守つてゐた田宮と云ふ人と種々話をして暫く時を移してゐられました、田宮は此時深く師の話しに感じ入り、知らず識らず師の足にすがりついたのでありました。是ぞ今生の暇乞であつたのです。此田宮と云ふ人は何處までも師に従ひ師と共に殉教する覺悟をしてゐたのでありますが、丁度師の捕へられた時他に在つて免れたので共に殉教の恵みを受ける事が出来なかつたのであります。其日すでに正午ちかくなつたので田宮を初め他の信者等皆別れを告げて各々宿所へ引揚げ、師たゞ獨り默然として居られた其時、俄然一人の役人ものくしく入り來り、嚴然として「汝今日死刑に處す」と宣告して去りました。師は之を聽いて大に喜び、豊後の國主へ最後の別辭を貽されました。「私は三十

六年間この國に眞の道を傳へ、教の爲に今生命を果す、是に勝した喜びはありません。今後御身の爲に天主様に祈りませう。御身早く眞の教に従ひ現世後世の幸福を得る様にして下さい。」と、國主は之を聞いて感涙を止めることが出来なかつたと云ふ事でありませう。

師はまた一通の書翰を認めて長崎の布教師長バロサ師に贈られました。其文は次の通りです。

『尊下の御手紙を受け大に慰を得ました、心の底より感謝致します、今日返書を差上げるに當り私の爲に最も喜ばしい知らせを得ました、それは今日諸聖人の祝を爲し其取次の功德によつて私を死刑に處すべき役人が到着し、私は御主キリストの爲に死ぬ事になりました。尊下に謹んでお願い致します會て頼んで置いた様に私の修行の怠りや行ひについて犯した罪に對して赦しを與へて下さい、會の兄弟にも同じく赦しを請うて下さい、私は天主様の聖寵によりイエズス・キリストの名譽の爲に生命を獻げることが出来るのを喜びます、之は私のかねての望みですから決して心配なき様願ひます、どうぞミサの時又は祈禱の時に當り私を記憶して下さい、さらばです。』

一千六百二十二年(元和八年)十一月一日

島原に於てイエズス・キリストの爲に生きながら火に焚かるゝを待兼る尊下の下僕

聖人物語 日本の福者パウロ・ナワロ及其侶殉教者(十一月五日)

師は斯く謙遜な書簡を布教師長に贈つて別れを告げ、教會に善き手本を遺し、別に一書を認めて其代父たるクロス・マテウス師に贈られました、其文は次の通りです。

「親愛なる師よ、師は幸ひに長命ならんことを祈ります。私は今日の聖き祝日が命の終りとなりますから、全善なる天主様に深く感謝して居ります。私は私等の爲に御死去になつたイエズス・キリストを頼もしく思ひ、其御前に到る事を望み、歡喜と安心との中に生命を献げます。師よ、私の不肖を赦し、ミサの時又祈禱の時に私を忘れないやう謹んで御願ひ申します。

一千六百二十二年(元和八年)十一月一日

島原に於てイエズス・キリストの爲に焚殺さるべき

ペトロ・パウロ・ナワロ

此日十二時前に師は外套を着し首にロザリオを掛け、藤島と共に刑場に着しますと直に會の制衣を着け讚美歌を歌はれました。佐太夫と久左衛門は後から來て刑場に入りました。刑場は島原入口の南方に

ある小崎と云ふ所であります。兵卒は鎧を以て其周圍を固め、中央に柱を立て薪を積み充分な準備が出来上つてゐます。師は帽を脱ぎ柱の側に走り寄つて敬意を表しました。他の者も同じく走つて柱に近寄り敬禮をしました。其時師は大聲を發して群衆に教を説き始めましたが暫くすると刑吏は師を柱に縛りつけたのであります。やがて師は柱と共に押立てられましたが、それでもまだ頻りに教を説いて止みません、刑吏は遂に之を制して、首に掛けたロザリオと帶を取りました。後に信者は之を買取て尊き遺物として大切に保存したのであります。師は特に人望があり且つ殉教の恭しい光景を見んものと大勢の人々が集つたので、領主は若しや騒動など起りはしないかと心配をして胸を痛めながら刑場に來ました。すると刑吏は直に火を付けました。火は忽ち燃え廣がり猛火となつて師の衣に燃えうつり柱は横に倒れかゝりました。此時師は朗な音聲を以て、イエズス、マリアの御名を呼びつゞけ、其儘目出度天国へ凱旋致されたのであります。他の三人も續いて殉教の榮えを受けられました。左太夫は一番後に死なれたのであります。斯くて其死骸は三日間曝して後灰と爲し海中に投棄てられました。其名は後世に残つて今は聖人の列に加へられ、萬國の人々から尊崇せられる様になりました。殉教の日十一月一日であります。此日は諸聖人の祝日に相當するところから其祝を五日に延されたのであります。

十一月六日(第六世紀)

聖レオナルド山修士

フランク人はゴール國を占領してフランスと名付けました。その長のクロヴィス王は四圍の敵と激しい戦をしなければならぬのでした。強敵ゲルマン人の侵入に對して一大決戦が起りましたが、戦ひは慄悍無比のゲルマン人の爲めに不利となり、今や施す術もありません。時に當つて皇后クロチルダの信仰してゐる天主様に助力を願はうと思ひ、「どうか私共に助勢あらんことを、若しこの戦に勝利を得れば私は主を信じ洗禮をうけます」との約束をして切りと願ひました。此の願ひは聴き容れられ、今までの惨敗をとりかへし大勝利を得たのです。それ以來公教を研究し西曆四九六年の御誕生の夜部下の將星三十人と共に洗禮をうけました。

この將軍の中にレオナルドといふ人があつて代々の名家でその才幹と共に甚く王に愛されて居りました。

彼は洗禮をうけて後聖靈の特別の恩恵によつてこの世の榮耀榮華を棄て、永遠の寶を得ることを望み當時フランクの使徒とまで呼ばれてゐた聖レミチオ(祝日十月一日)のもとに至り教を學びました。この聖人のもとにある間にその忠實と謙遜と單純さの美しい色々の徳は遺憾なく發揮せられ、會つて大名將軍の高位にあつたものとは思はれないほど清貧にも甘んじて居りました。

天主様はこの謙遜な聖人をそんなに隠しては居られません。多くの人々の上に奇蹟を行ふ力を授け、憐な病める者貧しき者を慰めるためいつ迄もこの田舎に住はせ給はなかつたのです。

クロヴィス王は聖人の話を聞いて自分の側近くよび「汝は先祖に習つて自分のもとに仕へないか」ミ色々すゝめましたが、最早大なる使命を帯びて居るレオナルドは答へて曰ふに「この世に仕ふるものなら先づ第一に王のもとに忠勤を盡しませう。然し私はそれよりもつと高尙な天主様に仕へ廣大な永遠の義務を果さなければなりません」と辭退して王の有難い思召を厚く禮を申しました。王もレオナルドとの會話の中に彼の態度、言葉、その信仰にいたく感激し、司教の位をうける様にすゝめました。が彼はまだその位を占むるには身分不相應なるを思ひ斷つてオルレアンの名高い修道院長のもとに行きそこでまた隠れた修院の生活を始め祈禱と默想に餘念がありません。然し彼は前述の通り隠れて居るこ

とは出来ませんでした。こゝにも多くの奇蹟が行はれ病者は癒え跛者は治り悪魔は追ひ出されるなど、これを見た人々は彼の高德に併せて天主様の御恩恵を懐ひ改心して信者になつたものもその数が知れませんがせん。

ある時皇后が難産のため重態に陥り如何なる名醫良薬も少しの効果がありません、萬策つきてレオナルドのもとに使を遣して癒されんことを願ひました。彼は「私は醫術は知らない。然したゞキリスト様は醫術を用ひなくともお治しになることが出来る。」といつて彼は跪いて熱心に天主様に祈りました。ところがその時皇后は宮中にあつて無恙御安産になり健全となつたのであります。

皇帝はこれを見て大いに感心し御禮として金銀で作つた立派な器をレオナルドに送りましたが彼は断つて云はれるには「私はキリストの名によつて治したので、またそのたすけは金銀によつては求められません、それよりか貧者、孤兒、寡婦にお恵み下さい」と申しましたから、皇帝は彼のためその隠遁する森の山全體を與へ、その自由の處分に委せました。

彼のもとにはまもなく二人の修道士が来て彼の助けをしました。この地は山奥でまた水が無かつたのですが天の御示しによつて浅い井戸を掘りますと、丁度舊約にあるモイゼのホレブ山の水の様に滾々と

して清水が湧き出でました。それまでといふものは水を求めに遠く一里も離れた山里に行つて居つたといふことであります。

ある時レオナルドは牢獄を訪れ罪人を改心させようと思ひ、兼ねて王にお願ひして許をうけ、罪人のうち眞に改心したものを獄に送らせました。出獄した人々はそのはめて居つた手錠足錠をもつて聖人の山に来てともに置いて貰ふ様に願ひしましたが、それらの者に向つて天主様を愛し尊び、さうしてこの世にあつては世人の模範となる模範が子に訓す様にして歸らせました。中に眞に深く望むものはこの山に住み共に苦業と祈禱の生活をつゞけて居るなど多くの靈魂は地獄の淵より救はれたのであります。

然し最早天主は聖人をしてこの世から天國に昇らせ、その報償を御與へになるため西曆五五九年十一月六日天にお呼び寄せになりました。その遺骸は聖母マリアに捧げられた天主堂の中に葬られました。死後聖人の徳を慕ひその御傳禱を願ふものも非常に多く色々の奇蹟も行はれました。

ある時残酷な知事のため穴牢に入れられ毎日恐ろしい刑罰に處せられて居た者が、聖人に對し特別の信心をもつて傳禱を願つたところが、夜中に太陽の様な燦々光りが出で番卒これを見て恐れて逃げました。するとレオナルド現はれて彼を繩より解いて牢より出したこともありす。尙此の外聖人は多くの

奇蹟を行はれたのでありますがこゝには省略することにしました。

十一月七日 (第一世紀)

聖レスチット司教(イエズス・キリストの弟子)

佛蘭西のマルセイユとリヨンの間にフランスといふ町があります。その近くにはローヌ河が流れ、その沿岸は一帶に風光明媚のところでありますが、その中にある目立つて美しい小山の頂上にはローマン式の壯麗な天主堂が聳えてゐます。この天主堂は九世紀の建築にかゝり、今語らんとする聖レスチットに捧げられたもので、多くの天主堂のうちとりわけ立派であります。

その昔イエズス・キリストが自ら癒された盲目聖レスチットの遺骸が堂内に保存されて居ります。此處に来て聖人の傳禱を乞ひ多くの盲目は癒されるのです。今尚、參詣に来て傳禱を乞ふものも澤山あります。

聖ヨハネ福音書第九章に、生來の盲目を癒されることが記してありますが、この盲目こそレスチット

トなのであります。レスチットとは「光に回復」といふ意味であつて、盲目を癒されたことを記念するために此名に改めたのです。

彼は貧しい家に生れ、其上生來の盲目で毎日エルザレムの門の邊りに施を願つて居つたのであります。丁度幕屋祭とて舊約時代にイスラエル人がモイゼに導かれて沙漠の中に住んだ事蹟を記念する時に當り四日間聖殿に大勢集つて祭禮が行はれて居りました。その最終日の翌日、聖殿の門の邊りに多くの貧しき者亦は盲目が施を乞うて居りましたがイエズス・キリストはその真中をお通りになつた時憐れな聲をあげて施を願つて居る一人の盲目が居りました。弟子等は御主に向つて「主よ、此人の盲者に生れたのは誰の罪ですか、その親ですか彼自身ですか」と。御主の答へられるには「否彼の親も彼も罪を犯したのではない、彼の身の上に神の御業の顯はれんがためである」と言ひ終つて唾と土をもつて泥を造り、盲目の目に付け、さうして彼に「シロエの池に洗ひに行けよ」と命ぜられました。命の儘に致しますと生來の盲目は目が明きました。驚いたのは彼自身は勿論のこと今まで門の邊りで施を願つて居つた者や、彼に施をした通行人等は、彼は今まで盲であつたのに不思議でないか、あるひは別人であるかも知れない、などと云つてどうしても信じません、人々は彼に向つて「汝の目はどうして癒

されたか」と尋ねますと「イエズスといふ御方が泥を造つて我が目に塗り、シロエの池にて洗へと申しましたから、往つて洗ひますとこの通り見える様になりました」と。

この話が廣く人々に傳はり、フアリザイ人はイエズス・キリストについて何等かの攻撃すべき事からを見出さうと色々と彼に尋ねましたが、フアリザイ人の醜さを知つた彼は「貴方達はそんなに知りたいのはイエズス・キリストの弟子になりたいからですか」と。フアリザイ人も終に返答に窮して彼を家に追ひ返へしました。それ以來レスチットはイエズス・キリストの熱心な弟子となり能く聖主に従つて居りました。

イエズス・キリスト御昇天の後十二使徒は各々世界の各地に別れ々となつて傳道に出ました。その時彼は聖ヤコボと數年間スダナに残り、後マグダレナ・マリアと共にゴール國(只今のフランス)へと旅立ちました。

當時ユダヤ國とゴール國とは密接な交際があつて船舶は主としてマルセイユからジョベイへと通つて居りました。ゴール國の兵はユダヤ王の儀仗兵をも勤めて居つた程であります。

マグダレナ・マリアの一行はユダヤを逃れて地中海をたゞ天使の導を唯一の便りとしてゴール國の

マルセイユ港につき、こゝに於て聖ラザルとマリアとマルタと聖マキシミノ及びレスチット等は直ちに上陸して民衆に基督教を傳へました。レスチットは後に主としてフランスの近郷を布教し多くの偶像崇拜者を改宗させ、眞の教へに導き、終に其地に於て亡くなりました。

今も此聖人を尊び記念する爲に御堂の近くに小さな村が出来、聖人の名にちなんでレスチット村と名づけられて居ります。

十一月八日 (降生後三〇二年死)

聖クロチオ外四名彫刻家殉教者

歴史家は「基督信者を殺害することは出来るがこれに打勝つことは出来ない」と申しました。今語らうとする話は初代羅馬に於ても最も名高い彫刻家の殉教についてであります。

センピリシオは最初は偶像崇拜者でありましたが、ある時どうしても自分は友の四人の彫刻程に良い作の出来ないのを見て大いに残念に思つて居つたやさき、友等が仕事にかゝる前身に十字架の記號をす

るのに気がついたので友に教へを乞ふと、彼等は十字架はキリスト信者の印であること、キリスト教によらねば救霊を得られぬことなど公教の教理を説明したので、センピリシオは大に感服して自分も洗禮を受け、茲に五人は最も仲のよい彫刻家となりました。四人の友と云ふのはクロヂオ、ニコストラート、センフォリアノ、カストリオ等で皆立派な彫刻家であります。

彼等の作品は多く宮殿の内や貴族の家に置かれ名作よと尊ばれて居りましたが、終に皇帝は彼等に向つて偶像を彫る様に命じました。出来上つた曉は充分な褒賞を與へるとの約束であります。然し彼等は公教信者ですから如何に皇帝の命令であらうと、自分等は勿論多くの人々を迷はす様な偶像を彫刻することが出来ません。そこで断然断つて言ふには「基督教に關する仕事なら、どんな事でも引受けませんが偶像などは決して彫刻しません」と恐れるところなく申し上げました。

彼等は皇帝の命令に従はないといふ廉で一同牢獄に投込まれ、毎日の様に教を棄てよとて鐵の尖つた熊手、荒い木の鞭はところさらはず身體を打ち皮膚は破れて紅に染つて居ります。この残酷な責苦の最中に指揮者の裁判官は惡魔によつて絞め殺されました。この事件が當時の殘忍な皇帝チオクレシアノに知れると大いに怒り、五人を鎧の沸騰する釜の中に入れる様に命じました。彼等は終に其中に入れられ

次いで河に投棄られ、こゝに殉教の冠を得ました。

御攝理によつて四十二日目にニコデモといふ信者が遺物を見つけ恰も聖ニコデモがイエズス・キリストを町亭に葬つた様に五人の彫刻家を厚く葬りました。

十一月九日 (降生後三〇四年死)

聖テオドロ・チロ殉教者

テオドロ・チロは新しい軍人と云つて古い軍人と呼ばれる今一人の聖テオドロと區別されて居ります。彼は軍人でマルマリトの軍籍にあつて土耳其のアマシエに居りました。

彼は生れは小亞細亞で、幼い時から天主様に對して深い信仰をもち、長じて益々信心が厚くなつて來ました。當時公教信者に對する迫害激しく、彼も信者なるために訴へられ、法廷に引出されて教を棄てるやう迫られました。然しどんなに責められても彼は承知しないので終に牢獄に入れられました。彼は軍人としては模範的士官であり、またその風彩の立派なものと勇敢な行爲については多くの上官

も等しく惜んで居りましたため一時彼を釋放したのであります。しかしテオドロはこの期間を利用して殉教の覺悟をし、また信者を勵まして信仰を強め殉教の覺悟をさせておりました。

彼は常に叫んで「偶像は眞の神でない、眞の神はたゞ一つで我が基督教である」と述べ、終にシベルと云ふ偶像教徒の崇拜して居つた禮拜堂に火を放ちました。

彼は捕縛されて又もとの法廷に引き出され、毎日色々の責苦をうけ、終つては暗い牢獄に投げ入れられ、食物を與へずにと餓死させようとしたのです。しかし眞夜中に御主キリストが御顯はれになり、彼をお慰めになつたので大いに力付き、大聲を揚げて主を讚美しました。その時天使等は白い服を着て現はれ、喜びの讚美歌を歌つたのです。此不思議な有様を見た牢番等早速判事のもとに行つてその由を告げましたので判事は急ぎ來て見ると眞實であつたので大いに驚きましたが、まだ改心せず、それ以來わづかばかりのパンを與へるやうになりました。このことがあつてから皇帝は尙も彼に教を棄てるやう命じましたが承知しないので、此まゝ生かして置くと他の人々に影響するのを慮り彼を焚殺の刑に處す様に宣告を下しました。

愈々刑場に曳き出され、薪の重ねた上に置かれ、火は附けられ白煙濛々と立ち上る中に彼は十字架の彼の遺物は一人の美しい婦人が白い衣に包み我家へ持ち歸へり、いと町重に葬りました。

十一月十日 (降生後一五二一年生 一六〇八年死)

聖アンドレア・アヴェリノ

聖人は伊太利のナボリの舊家で、代々徳をもつて有名な家の子弟として生れました。幼時から聖母マリアに對する信仰深く毎日コンタツの祈りを缺したことなく死ぬまで毎日怠りませんでした。彼は小学校を卒へて哲學を習ふためベニジャに行き、四年といふものは懸命に勉強し、その成績も群を抜き、先生等を驚かしました。學問が衆に秀でてゐる如く、その信仰の點に於ても衆の模範となり殊、に清淨潔白を守るためには多くの苦行をして、この誘惑に見事打克つておりました。ある時は自分の乳母が誘な

はうとしましたが、斯る場合には其場を逃れるのが一番よい方法であると考へて逃げ去つたこともあり、彼はその行ひによつて當時一般に墮落して居つた人々に對し一つのよい刺戟を與へてゐたのであります。

彼はまた法律を學び法學博士の稱號を有つて居りましたが尙優れた司祭といふ聖い職に就きました。法律に詳しいため宗教上のことならについての辯護士となつて居りましたが、ある時被告を辯護するに熱心の餘り、終に過言をしたことがあつたので、彼の繊細な用意周到な良心は彼を非常に苦しめ、以後は一切辯護士としての仕事に關係しない様にしました。

彼はその後大司教の命によりある童貞會の受持ち靈父となりましたが、當時は一般人民の墮落は言ふに及ばず、衆の模範となるべきこの會の童貞の中にも墮落したものがあつたので、彼は一大英斷をもつて改革を始め、規則を嚴重にし、祈禱を多く苦行を増し、先づ自分自ら第一に衆に模範を示されましたから今までの弊害の多いこの童貞會は面目を一新して規則正しい立派な童貞會となりました。

ところがこの大改革のため或者から恨みを受けたのです。それは今迄規則が弛んでゐたため、ある邪惡な男子が外部から自由に出入して風紀を亂してゐました。此有様を見てアンドレアは嚴重に之を取締

り、絶対に外部から出入できぬ様にしたので、彼は大に怒つて暴漢に頼み、アンドレアを亡きものにしてやうとその機を伺つて居りました。丁度アンドレアが御堂から今將に出ようとする時惡人共は刀をもつて三度聖人に切り附けたのです。

その爲に傷だらけとなり出血も甚しく遂に其場に打倒れましたが、天主様の有難い攝理によつて間もなく治り傷痕も無くなつて元の通り身體になりました。しかし彼は自分を傷つけた惡漢を憎まず却つて童貞達の清淨潔白の徳を保護するための犠牲となつて苦しめられたことを深く感謝してゐました。所が此事がナポリの總督の耳に入り其惡漢を罰しようとしたのですが、アンドレアは彼を罰することを望まずたゞその改心を望むと言つて彼の惡人を赦す様總督に願ひました。しかし天主様はこの瀆聖の惡人の罪をお赦しにならず間もなく或者の爲に殺されたのであります。

アンドレアは其後ますます徳の道に進むため完全な生活をしたと思つて一五五六年三十五歳の時テアテン會修道院に入つて修練者となりましたが、人から卑下さればされるほど名譽を得た様に思ひ、目上から苦業や犠牲を命ぜられる時は、その苦行や犠牲が大きく辛いほど喜ぶといふ風で、其勇氣と忍耐の強いのに感服しないものはありませんでした。誓願を立て、から彼は多くの贖宥を得るために口

一マに至り使徒や殉教者の遺跡を巡禮し、ナポリに戻つてから十年間修練長として修士達によき模範となり、後院長に選ばれました。

彼は總會長の命によつて二つの修道院を創設しましたが、一つはミラノ市に建て、其處に居る間に有名な聖カロー・ボロメオと親密に交際する機会を得ました。も一つはピヤセンザーに建てましたが、當時此地は婦人達の間に虚榮を装ふ者多く華美な服装を競うて贅澤をする悪風があつたので彼は人々を誠めて多くの不良な婦人達を改心させました。所がこの爲に反感を持つ者もあつて彼を讒言し、總督に訴へて町から追出す様に運動したのです。しかし此不正な運動は却つてアンドレアの徳を輝かす因となりました。それは總督が人々の訴へによつて取調べる爲に呼出して訊問した所が、少しも咎むべき點はなく反つて感心するばかりで、總督夫妻は彼の雄辯と敬虔な態度に敬服してその徳を慕ふ様になつたのであります。後再びミラノに戻つて修院長となりましたが、彼はその優れた徳によつて司教の位に就く様すゝめられました。しかし彼は人の目上に立つよりも服従を守る地位に居る方を望んでゐたので辭退しました。

其後ナポリの修院長に轉じましたが、ある時聖體の秘蹟に對して疑ひを抱く不信心な人々をひどく誠

めました。翌日ある一人は彼の手から聖體を領けてすぐに口から出し、ハンカチに包んで歸りました。所が不思議にも其ハンカチは貴き主の御血によつて眞赤に染つてゐたので吃驚仰天して奇蹟々と叫びつゝアンドレアの許に走つて告げました。其時彼は此不信心な人に對して重い償ひを命じたのですが失望しないために自分がその償ひの一部を代つて果してやりました。此機會にアンドレアは聖體に對する不信心な者等の信仰を強めるやう熱心に力を盡したのであります。

其頃ナポリに暴動が起つて人民は不安を抱いて居りましたが、彼は其徳によつて圓滿に治め、又饑饉の時窮民を助け、また病人を訪問して告解を聴き聖體を授け靈肉共に助ける様努めました。ある日遠方の病人に聖體を持つて行く途中俄に暴風雨が起つたのですが、不思議な光りに照されて少しも濡れませんでした。

ある時重い病氣にかゝつて醫者は適當な柔かい食物を攝らせる様に看護人に命じましたが、彼は斷つて壯健な人の如にたゞ豆類だけを求めました。醫者は不満足でしたが案外にも間もなく病氣は癒つたのであります。

アンドレアの徳は日に／＼輝いて身分の高い人々からも尊敬されてゐましたが、さう云ふ人達は彼に

會ふのを名譽としてゐました。ある日貴族の家を訪問する時、馬車の用意が遅れたので荒馬に跨つて出かけた。所が馬が暴れて振り落され、足が踏に引かゝつたまゝ馬は彼を引づつて駆け出したからたまりません、普通であつたら生命が無い所でしたが此時彼は聖ドミニコと聖トマス・アキノの御傳言を一心に祈つたので兩聖人は現はれて彼を助け、血みどろになつた顔の傷まで癒されました。

彼は至つて謙遜深い方でしたから己が善行を見ず、たゞ欠點過ちだけを見てゐたので、自分の様な欠點だらけの者は到底救靈を得ることができぬと思つて失望しかけて居りました。是彼の徳を妬む悪魔の誘ひであつたのです。其時聖トマス・アキノと聖アウグスチノが現はれて天主様に深く信頼するやう勧め、天主様は特別の御憐みを持つて居られることを保證したので彼は大に喜んで天主様の御恵みを感じました。

アレドレアは天主様のお示しを受けて自分の死を二年前から豫言してゐました。八十八歳の時重い病氣にかゝりましたが、いつも健康の時の様に心は愉快に充たされて満足し、少しも苦痛をうつたへる様なことはありませんでした。此病氣中一人の看護の修士に向つて『八日の後には私を看護する必要がなくなる』と告げ、丁度八日目に彼はミサを献げるために祭壇の下で祈つて居る時俄に卒倒しました。そ

れで身體は其まゝ病室に運ばれましたが醫者は最早助からぬと言つたので再び祭壇の前に運ばれて、そこで最後の聖體と終油の秘蹟を受けました。この數日前から自分の臨終の時悪魔と恐ろしい戦ひをせねばならんことを豫言し且つ善き死を遂げられるやう熱心に祈つてゐましたが、果して悪魔は硫黄の煙につままれて彼に現はれ『汝の靈魂は我物である』と言つて失望を起させやうとしたのです。此時守護の天使現はれて悪魔を追出したので、一時色青ざめて曇つてゐた彼の顔は急に晴やかとなり聖母マリアの御繪を凝めながら忍耐と謙遜の報いを受ける爲にその靈魂は天に招かれました。時に一六〇八年十一月十日でありました。

彼の死後その顔は生前よりも美しく子供でもその御死骸に近づくのをおそれませんでした。病氣であつたある貴婦人は彼の愛用してゐたコンタツに手を觸れるとすぐに病は癒えました。その御遺骸はナポリの天主堂に置かれましたが、三日の後に頭から多くの血が流れ出たので三つの器に受けて大切に保存しました。醫者は之は普通有り得べきことでなく超自然の出來事であらうと申しました。翌年十二月九日御死骸を墓から出して他に移す時少しも腐つて居らず肉は柔かく頬は美しく宛ら生けるが如き御姿でありました。一七一二年聖人に列せられ、今もシシリヤとナポリの保護の聖人と仰がれて尊敬を受けて居

ります。

我々は此聖人の御徳に倣ふ様につとめるは勿論、特に善き最後を遂げる御恵みを受けるため其お傳禱を願はねばなりません。

十一月十一日 (降生後三二一六年生 三九七年死)

聖マルチノ司教

聖マルチノは御降生後三二一六年ハンガリヤ國に生れました。父は軍人で武勇の譽高い人でありましたから、マルチノも幼い時から武藝を好み常に友達と遊ぶにも弓や太刀を取て戦争ごとはばかりしてゐました。

十歳の時或る友達に誘はれて教會に行き、始めてキリスト教の話を聞いたのでありましたが、彼は性質伶俐でしたから子供心にも深く感ずる所あつて、夫れから毎日教會に行て教理を學ぶのを唯一の樂みとし早く信者となる事を望んでゐましたが、父は大反對で之を許さなかつたので志願者となつて怠らす

に教理の研究を續けて居りました。

月日は早く過ぎ去つて彼十七歳を迎へた時戦争が起つたので父に代り多くの兵士を率ゐて同じローマの領域であるフランス國に赴きました。武人と云へば兎角性質荒く温良の徳に缺けたものが多いのですが、彼は若年とはいへ言行を慎しんで兵士を勞り人々を愛し殊に貧しい者に目をかけて多くの慈善業をしてゐたのであります。或時彼は馬に乗てアミアンと云ふ所に往きましたが、時恰も嚴寒中で雪さへつもつてゐる寒い日でありました。折しも路傍に一人の乞食が此寒空に身體にまとふ衣さへ荒布にも劣つた襦袢をつけ、寒さに凍え食に餓え歩行も出来かねてうづくまつてゐる哀なる者に目をとどめました。マルチノは不憫に思ひ何か恵んでやりたいものとポケットに手を入れましたが、生憎此日は何も都合せてゐなかつたので何うしようかと思案してゐました。ふと思ひつく事があつたと見え忽ち軍刀を引抜いたと思ふと、自分の着てゐる外套を眞二つに切り裂いて半分を乞食に與へて志す方へと走り去りました。彼は其夜夢に御主が數多の天使に圍まれながら外套の半分を持ち、天使達に向ひ「今日マルチノは我が爲に此外套を與へた」と仰せられてゐられるのを見ました。是即ち御主がマルチノの愛徳を試みる爲に乞食の姿を藉りて現れ給うたのです。

彼は大に感動して一日も早く洗禮を受けたいと望み、靈父を訪ね十八歳の時喜びに充たされながら洗禮を受けて天主様の子とせられたのでありました。

其頃戦争も止み國は治まり平和の風が吹くやうになりましたので、彼はつくづく心に考へて、今日迄は國家の爲に働いたが之からは天主様の爲に働かうと決心し、夫れより斷然武藝を止めて眞の教を廣める爲に力を盡すことになりました。

當時フランスの北部にヒラリヨと云ふ後に聖人となつた司教がりました。彼は此司教の許に身を寄せて其指導を受け、司教もまた彼の熱心を見て深く愛し靈父になる様に勧めましたのでマルチノは大に喜び天主様に身を献げようと決心しました。

茲に聖人にとつて大きな心配がありました。それは未だ國に居る兩親や親戚等が眞の教を信じて居ませんでしたが、彼は司教の許しを願うて歸國する事とし、旅の用意もそこそこにしたと一人峻嶮き道を徒歩にて遙けき道を急ぎましたが、世にも各高き峻峰アルプス越にかゝつた時、夥多の山賊が現はれ危害を加へ様と致しましたが、さすが武人であつたマルチノは少しも恐れず言葉靜かに賊等を誡め其惡業を責め、人には不滅の靈魂あり、天には正義を以て賞罰を與へ給ふ天主あり、汝等早く惡しき行ひを改

め善道に歸るべしと諭されたので、極惡無道の山賊等もその正しい言葉に感じ入つて改悟し善人となりました。

さてマルチノは難路をはる／＼と戀しい故郷に歸へり、兩親をはじめ親類の者等を集めて熱心に天主の教へを説きました。一同は彼の話に感じて母親を初め多くの人々が信者になつたので大に喜びました。所が父だけは頑固でどうしても信者になりませんでした。そこで彼は再び父母に別れを告げてフランスに歸り、ヒラリヨ司教に從うて所々に傳道をし、人々に向つて「人と生れた上からは、如何なる者も皆必ずキリストに從はねば靈魂は救はれない」と云て説き勧めました。

彼の徳は日に／＼高くなり、其名聲も擴まり、多くの弟子も出来ました。ある時他出中その弟子の一人が未だ洗禮を受けずに俄かに病死しました。彼は歸つてから之を聞いて天主様に祈つた所が不思議にも今迄死んでゐたその弟子は忽ち蘇生つて洗禮を受けました。

其頃トウルと云ふ町の司教が死去せられたので、其地の人々は聖人の徳を慕ひ後繼の司教に戴かうとして願ひましたが彼は謙遜して承諾せず暫く身を僻地に隠されました。人々は熱心に探し出して尙も請うてやまないで、詮方なく遂に司教の位に昇られたのでありました。

司教になつてからも益々謙遜して小さい家に住んでおられましたが、だん／＼弟子の数が殖えてきたので一つの大きな修道院を建てて弟子と共に其中に住み、厳しい規則を制定して熱心に務めを勵み修士達を指導し又書籍を著されました。其頃はまだ活版の術も開けてゐないので古い書籍を寫して後世に傳へ若い者は各所に傳道し、老いたる者は祈禱をし、その着衣は夏冬共にたゞ一枚の荒衣を着けるだけで、食物も實に粗末な物のみを一日一回攝るのみ、専ら身を責め己れに克つべく自ら模範を垂れて修士達に示されたので一同善き感化を受け立派な修士になりました。當時フランス、ドイツの司教司祭は殆んど皆聖人の弟子から出たと謂はれて居ります。

或時某村に争論が起りました。其原因は、その村はマルチノ司教の爲に感化せられて信者となつた者が多く不信者と云ふのは極く僅かだけでありましたが、其村に一つの大きな偶像の爲に建てられた寺院があつて、人々は之を天主堂に改築しようとして圖りましたが外教人はこれを拒んだ爲に争ひとなつたので、それで村人等は司教の許に往つて裁きを願ひましたので司教は皇帝の裁決を仰がうと遙々自ら首都に赴かれました。然るに皇帝は拒んで面謁を許さないので止むを得ず退いて七日七夜禁食して聖祐を願はれました。或日祈りの時天主様は天使を彼に遣し、明日皇帝の所に往くべしと告げられたので大に

喜び、次の日宮殿に参つた所が百官等いと丁寧に迎へ、玉座近く導かれました。其時皇帝は高座にあつてマルチノ司教の近づくのを喜ばない風でありましたが急に玉座の周圍に火が燃えて皇帝が包まれるよと見えた時皇帝は驚いて下り司教を懇に迎へて其請ふ所を皆許し、偶像を祀つてある寺院を天主堂とする事も許可されました。

司教は國に歸りその古い偶像を毀ちましたが、其傍に年經し老松があつて土地の人々は偶像よりも却つて此老松に對する迷信が深かつたので此樹を伐つて迷信の根を絶やさうと思ひ外教者等に其誤りを諭しました。彼等は神罰を恐れて中々伐る事を承知しません。司教は尙も色々説き諭されたので遂に承諾しましたが其代りに司教に樹の下に立つて居る様に要求しました。司教は承知して天主様の助けを祈りつゝ恐るゝ氣色もなく老松の根元に身をすり寄せて待つておられましたが、約半分ばかり伐つた時樹は司教の方に傾いて今にも頭上に倒れんとしました。外教者等は手を打つて喜び、彼は悪人であるから我等の神は彼を罰し給ふのであると勇み立つて幾條もの繩をかけ尙も司教の上に引倒さうと致しました。司教の弟子や信者等は手に汗をにぎりながら一心に天主様の御加護を祈つて居ります。その光景は實に物凄く恐ろしいものでありましたが、今や大樹が頭上に倒れ落んとする利那司教は更に動ぜず樹に向つて

十字架の印を致されると不思議や大樹忽ち方向を轉じて反対側へ地響き打つて倒れました。外教人等は驚いて素早く逃げたので辛くも生命だけは助かりました。此奇蹟に感じて皆迷信を棄て、信者となつたのです。

マルチノ司教の行はれた奇蹟は之だけではありません。たゞ一二を述べたに過ぎませんが、御主の聖言に「汝芥種ほどの信あれば山に動けと命ずるも能はざる事なし」と。實に聖言の通りであります。又ある時未信者の家で説教して居ると、丁度門前を或家の子供の葬式が通るのでした。司教は自分の教話の偽りでない事を證據するために、その葬式の進行を止め、死んだ子供を蘇生させたので人々は大に感服して眞の教を信じ信者になつた者が澤山ありました。其時から聖人の力によつてフランス、ドイツに信者が非常に殖えたのであります。

聖人常はその弟子なる靈父達に諭された言葉に「凡そ此世に於て高い位は靈父より上はなく、此高い位に在る事を忘れることなければ罪を犯す事も少いのである」と。

聖人は言葉に靈父を尊べられたのみならず、自ら實地に行はれたのであります。或時皇帝マクシミアノの招待を受けて一人の靈父と共に宮殿に至り饗應を受けた時、其國の高臣方も招かれたのですが、皇帝

は聖人を上座に置き其次に伴うた靈父の席を設け、皇帝は先づ盃を聖人に與へ、また自ら聖人の手から受けようと致されると、聖人は皇帝よりも靈父の位を重しとして其盃を皇帝に與へず靈父に與へられました。皇帝は之を見てその所置に感じ大にこれを譽め、其後屢々聖人を招いて教話を聴き、皇后も深く聖人を敬ひ自ら饗應して他人の手を借らずに自ら給仕されたさうであります。

聖人は御年八十一歳の時熱病に罹られました。其時、天主様に祈つて「主よ、願はくは我が靈魂を肉身の獄より出し給へ」と申されました。看護の弟子達之を聴いて、「どうして斯様に祈られますか、我等の爲に今暫し今世に存へて下さい、どうぞ天主様に斯く祈つて下さい」と願ひました。それで聖人は天主様に向ひ、若し人々の爲に我の如き者でも益あらば、我は決して此世の働き苦しみを辭し奉らずと申されました。病はますます重くなりましたが少しもその苦しみを願みず、石の上に臥さうと致されるので弟子等は大に驚いで床の上に居ることを勧めましたが聖人は聴き容れずして、我主は、我等の爲に非常な苦難をお凌ぎになつたから、我も苦しみつゝ死にたいと申され、遂に三九七年十一月十一日御年八十一歳で此世を去られました。此時空には奇しき音楽の音がきこえ、其弟子等期せずして會するもの二千餘人に及び、いとむと莊嚴に葬の式は執り行はれました。今も聖人の御死骸はフランスのトゥ

ル町に在り、其昔より今日まで毎年其記念日には各地より夥多の人々集ひ來つて聖人のお傳達を祈るのであります。

十一月十二日 (降生後六五五年死)

聖マルチノ教皇殉教者

六世紀の初め伊太利のトスカナ州のトチ市に家柄の良い信仰の深い夫婦がりましたが、この夫婦の間に今御話しようとする聖マルチノが生れたのです。

彼は天稟の美しい容姿とその秀れた才能によつて人々に好かれ、その學識も夙に出藍の譽を得て居ましたが、マルチノは世の一切の名譽地位財産等より心を離し、眞の教への爲め生涯を捧げようと決心しました。そして哲學、文學を修め、間もなく先生よりも勝れた學識と徳とを以て司祭となり、後司教に選ばれました。

其後當時の教皇テオドロ第二世が亡くなつたので一六四九年その後繼者としてマルチノが撰ばれまし

たが未だ公教會の受難時代でしたから一日として餘裕ある生活は許されません。あるひは教理についての異端邪説を論破し、あるひは迷へる小羊等を、あるひは病者貧者を見舞ひ自分の食事さへ減じて施をして居ましたから、人々の尊敬は非常なもので、次いで教會なども所々に建設され次第に公教會は隆盛になつて來ました。

然し亦一方には公教會の隆になるにつれ異端異説も多く起つて害を流しましたから、眞の信仰を保護するといふ努力を要しました。就中コンスタンチノープル及アレキサンドリアの總司教はカルセドニアの公會議によつて禁ぜられた説を公然擴めました。それはイエズス・キリストは神性のみで人性を有しないといふ説で、ヘラクリオ皇帝は此異説に加擔して國內にこれを布告しました。がこの皇帝の孫コンスタンシオ皇帝はこの異端の説をよく承知して居ながら、表面のみは眞の教らしくせんとして終に次の様な説にかへました。それによるとイエズス・キリストは神人兩性を有し神の意思と人の意志をもつといふ公教會の信條を障げるため、イエズス・キリストは至きもので一性のみを持つて居る、神として又人として完全であるから一つのペルソナをもつものであると説いて居ましたが、これは巧に一性説を廣めるものなる事をマルチノ教皇は見破りました。

これこそ眞の信仰に危害を加へるもので表面のみ我が公教に追従するものであるとして、此説を斥け直ちにラテランの聖ヨハネ天主堂に當時最も有名な司教百餘名を召集し會議を開いた結果此説を異端であると宣言しました。

そこで皇帝コンスタンシオと異端者の東方の總司教等は大いに怒り、この教皇をなきものにせんが爲めオレンピオミいふ辯士をローマに遣しました。出發の前に皇帝は彼を呼んで言ふに『若しローマの人民等が教皇マルチノと共に自分の勅令に反對するなら暴力を以てども我がこの新しい信條を教會へ遵奉させよ、又若し萬一教皇と人民と共に我に逆ふなら暫らく形勢を傍觀せよ』と命じました。早速ローマに往くと、その時丁度會議の最中であつたので方向を轉じ軍隊と人民に反亂を起さす様にとめました。軍隊も人民も皆身も心も教皇に忠誠を誓つて居つたため却つてオレンピオ自身に危険をさへ感ずる様になりました。そこで卑怯にも一時の難を逃れるため改心したと公言したのです。

ある日マルチノ教皇は平常通り彌撒を捧げて居りましたが一人の刺客はオレンピオの命を受け、教皇が聖體を信者に授ける時自分に順番が廻つて来る瞬間これを刺さんとしたが、不思議にもその時彼は俄に盲目になつたので一切の事が明白になり、オレンピオも自ら隠謀を悉く白状し、その罪を償ふ

ため自ら軍隊を指揮し、強暴なサラセンの侵入を防ぐためシシリ島に参りました。しかし彼は終に多くの部下と共にペスト病に罹り哀れにも此地で死にました。

コンスタンシオ皇帝は事想ひと相違したため大いに怒り、早速侍從武官のテオドロ・カリオパスをローマに遣つて教皇を捕へて来る様に命じたのです。

そこでこの二人の武官はローマに至り、先づ教皇はネストリユウスの異端に入つたとか、又シシリイのサラセンに大金を送つて反逆を謀つたとか虚偽の事を宣傳しました。しかし間もなくそれは悉く識言であることがわかり、大金云々の事などもシシリ島に捕縛され酷使されて居る公教信者を買ひ戻すための金であると云ふ事もわかりましたから、この二人の武官も今は施す術もなく困却に陥つて居ました。もう斯うなれば最後の手段として暴力をもつても捕縛せんと謀り、先づ教皇には軍隊がないのを見て色々の口實を設け、殊更自分等は皇帝の命令によつて教皇をコンスタンチノープルにお迎へするやう命を受けて来た旨告げましたので教皇は侍從一人をつれて船に乗り、コンスタンチノープルに向け出帆しました。何分小さい船で而かも遠洋航海のため所々に碇泊しましたが、その度毎に教皇は嚴重の監視のもとに上陸を禁止され、その地方の信者等は教皇の乗船が港に着くと一目なりとも見たいものと岸に

集まるのですが、悪虐な皇帝の兵士は教皇を船室に監禁して一步も外に出さないのです。また船中の食事なども随分粗末なものばかりでした。船がナクソース島に着くと始めて上陸を許されましたから待ちに待った信者等は教皇に敬意を表するため歓迎をして又多くの土産物を贈りましたが、この土産物は兵士等が皆奪ひ且つ教皇を尊敬するものは國賊であると言つて群がる信者を追ひ拂ひ、またもとの如く船に監禁してコンスタンチノープルへと出帆しました。

愈々目的地に到着しますと、直ちに牢獄に入れ一切の人の談話も禁じられ、數日の後裁判が開かれましたが、之は死刑を目的とするものでした。ある時、教皇は重病で一步も歩む事が出来なかつたので二人の兵士に擁せられて法廷に出ました。

裁判官は先づマルチノに向つて『この不忠な者よ、汝は何故に皇帝の命に反抗するのか』と尋ねましたが、事已に自分を死刑に處する筈ですから一向返答をしません。そこで裁判官は偽證人を出しました。かの聖主のカイファの裁判所に於けるが如く、この偽證人は下層階級の賤しき者で目前の利益のために教皇に對し敢て偽證せんとする世にも哀れな者でした。そこでこの偽證人が教皇の罪をいかに眞實らしく述べ、次いで聖書の上に手を置いて誓をしようとしたから、今まで黙つて居つたマルチノは今

將さに大罪を犯さんとするこの憐れむ可き者のために、私は如何なる刑に處せられてもいとほないからどうかその誓ひだけはやめなさいと勧めました。しかし惡魔に憑かれたこの人は皇帝に云ひました。若しこの人に五十の首があれば五十とも悉く斬つて棄ててもよい程の大罪人です、彼は皇帝に對し大反逆を謀りましたと。然しマルチノは從容として『私は教皇として政治上の事については皇帝に反對したことはなく、たゞ靈魂上の事については若しそれが誤りであるならばその誤謬を正し、時として反對をすることも止むを得ません』と、先生の生徒に教ゆる如く説いたので、傍聴してゐた多くの人々は成程教皇の言はるゝ通りだと言つて感心するので裁判が非常に困難に陥り、果ては群集が次第に教皇に加擔し始めましたから裁判を中止してマルチノを鐵鎖に繋いで寒い牢獄に投げ入れました。

その中にかの異端の總司教は世にも恐ろしい病氣に罹り、皇帝に向つて、自分は天主に棄てられ地獄の火に燃さるゝものであるとて歎きもその極に達して息絶えました。マルチノは獄中にあつて大罪人と起居を共にし、たゞ一人公教信者である番卒の妻が日夜聖人の教を聞き便宜を計つて居りました。

その後まもなく夜秘かに舟に移つされてクリート島に追放されました。こゝはその昔クレメンヌ教皇

がトラザント皇帝によつて追放された土地の荒れた飲食物とでもないところでしたから、長く生活ることが出来ないで、終に四ヶ月の後この世を去りました。多くの奇蹟はその死と共に行はれ、遺骸はまもなく羅馬に送られました。

世界史を通観するに、教皇に反対する皇帝は一時は征服者の如き立場にある如く見えますが結局は天罰を蒙り最後を全うした者はありません。これに反し教皇に従ひその教を助けるものは悉く天の加護により世に榮え、その身は明君とて後世長く尊敬されて居るのであります。

コンスタンシオ皇帝も其例に洩れず、單に歴史上から見ても恐らくその存在をも多くのものは知らない程に、また其最後は哀れにも入浴中一部下によつて首を斬られ、哀れな死に方をしたのであります。

十一月十三日 (降生後一四六二年死)

聖チダコ

十五世紀の始めイスパニアのセビラに小さい時から信心の深い両親より熱心に教理を學んで居つた子



供がありました。彼は後にイスパニアの保護聖人となつた聖チダコであるのです。彼は幼い時から非常に静かな處を好み絶えず祈禱をし一度聖堂に入ると謹嚴そのもの、如く信仰が面に溢れて居りました。青年になりますと天主に對する愛熱は愈々強く、ある司祭と共に數年間靜かな田舎に入り苦業と大齋に精進し、只管五官を精神に服従させ、邪慾の念を防ぎ、多くの罪の原となる懶惰を避けるために一つの仕事を見出しました。それは籠を作ることでした。この様に隱遁の生活をして毎日大齋をしてゐると云つても食事もしなければなりません、ある奇特な人があつて時々食糧を運んでくれるのでこれ等の人々に御禮として自分の作つた籠を上げて居りました。

ある日彼は自分の作つた籠を近村に賣りに行きましたが、途中にお金が一ぱい入つた財布の落ちてゐるのを見つけました。普通の人であればすぐに拾ふはずですが、彼は「之は惡魔の試みであらう」と思つて過ぎゆきました。少し往くと非常に貧しい風體をして餓じさうにしてゐる憐れな人に出會つたので、その人に向ひ「も少し先きへ行くと財布が落ちてゐる。天主様はあなたを憐んでくださったのかも知れぬ、若し落し主が判らねば使つてもよいでせう」と言ひました。之によつてもチダコが常に世の寶から心を引離してゐた床しい心が伺はれるのであります。

この数年間の隠遁生活も了へ、コルドヴァの聖フランシスコ會に入りました。入會するや先づ自分は無學し何事も出来ないものであるからとて仲間の一番嫌ふ卑しい仕事に従事しよくこれを果してゐましたから直ちに衆の模範と仰がれる様になりました。又目上の修士の命令はどこまでも聖主イエズス・キリストの御言葉と見做し、如何なる仕事でも喜び進んでこれを果し、例へその時苦業と大齋で身體が弱つて居ても頓着せずに従順に服して居りました。

また清淨潔白の童貞の花を保つために厳しい苦業をもつて一切の邪慾を斥け、ある時は耐え得られない程の慾を制へるため嚴冬の凍つた水の中に全身を投げ入れた事もあります。

かのアシジオの聖フランシスコの貧窮に倣ひ一枚の着物一つの皿一つの十字架一冊の祈禱書のみを持つて居ました。そして又貧しき者、病める者に對しては激しい憐みの情をもつてこれ等を慰め、ある時の如きは臭氣を發する病者の傷口に接吻したことさへも再度に止まりませんでした。

彼は元來學問はあまりして居ませんでした。が當時の敬虔な學者達も靈魂上の問題については彼に教を乞うてゐたほど彼は靈魂上については聰明でありました。

ある時は絶海の孤島カナリア島へ修院を建設する命令をうけ、一日多くの未信者達と船に乗合せまし

たが、その時彼は未信者等の改心の爲め絶えず祈つてよき多くの模範を示しましたから、この乗客の一行に眞の教、眞の天主の愛を知らすことができたのです。彼は目的の島に着いたならば聖主の榮光のため殉教したいものであると望んでゐましたが、天主は彼に殉教を御許しにならないで、途中大暴風によつて船はわずかに沈没を免れて元の本國へ歸着したのです。

其後彼は西班牙のカスチラで天主の聖旨に適つたよい生活をして多くの人々に厚い信心を起させました。そしてやはり貧窮の徳を守つてゐられましたが、ある時他の修士と共に旅をして糧食に缺乏を來たし、終に仲間の修士は倒れて息絶えました。そこで聖人は直ちに跪いて天主へ御祈禱しますと不思議にも側に葡萄酒、果物、パンが置かれたのです。誰も持つて來た人がないので是全く天主の御恵みであることが判つたのであります。

またある時は當年七才の可愛い子供が悪戯をして遊んで居りましたが、側の釜の中に入り上より蓋をしめてそのまゝ寝て了ひました。この釜の中に子供が入つて居る事を知らなかつた母は、竈に薪を入れて點火しましたから火は強く燃え出しました。今まで何にも知らずに寝てゐた子供は急に身體が熱くなつたので目を醒ました。時既に遅く如何に救を求めてもこの強い火の中では流石の勇敢な母も如何

ともすることが出来ずみすく我が子供を焼き殺してしまひ、母は今狂亂してゐましたが、この事を耳にした聖人は甚だ憐れに思ひ、その家に至つて死せる子供のために祈りますと、急に冷えた身體は温かくなり次いで起ち上りましたからその母に返へしました。

斯様に聖人の生涯には多くの奇蹟も行はれ、時の人々に大なる尊敬を拂はれて居ました。がその一生の生活はどこまでも貧窮の徳と苦業の連続でした。愈病氣に罹り息絶えんとする前の如きは度々恍惚の状態に陥り、「おゝ天國の美しき花よ」と叫んで居りました。而して悔悛、聖體、終油の秘蹟をうけ、いとも靜かに感謝の念に溢れつゝその靈は天の花園へと移植されました。時は降生一四六三年十一月十三日土曜日の夜でした。手には固く十字架を握り占め、身には荒き帯をしめてゐました。その後遺骸よりは絶えず芳香を放つて居つたといふ事でありませぬ。

この聖チダコの生涯は實に苦業と貧窮によつて化粧されて居ります。この化粧こそ世のあらゆる罪惡の便りとなる化粧とは大いに趣きを異にして居るといふ事に思を致して、我々は聖人の行ひを鑑として之に倣ふやうに努めねばなりません。

十一月十四日 (祝日十三日) (降生後一五五〇年生
一五六八年死)

聖スタニスラス・コスカ修道士

僅か十八歳の短かい生涯に完徳の嶺に達した天使の如き青年聖スタニスラス・コスカは降生一五五〇年十月二十八日ポーランドのロスコフ城に生れました。父はヨハネ・コスカと云ひ當時國內に於ても權勢ある元老院の要職にあり、併せて古來よりの並びなき名家によつて秀いで居りました。母はマルガリタ云ひこれも國內有数の名家でした。この二人の間に後の聖人スタニスラスは生れたのです。

彼は幼時已に信仰の心に燃え、殊に清淨潔白でその容姿が美しいので両親は彼を小さき天使と名付けて居ました。この小さき天使の徳は城内の雇人をまでも感化し、彼をして聖人と名付けしめた程でしたが、この小さき天使は最も清淨潔白の徳を重じ、苟めにも不潔な言葉を出す者があれば彼は非常に苦しみ、時には氣絶する事さへありましたから、彼に近よる者はこの點についてよほどの注意を要しました。それ程此幼いスタニスラスは潔白の徳を重じ、邪淫の事を蛇蝎の如く嫌つて居つたのでありま

した。

彼は人々より可愛がられ乍ら中學校に入る年輩になりましたから兄のパウロと共に家庭教師附添ひでウエンナのイエズス會の經營する貴族の子弟の入る中學校に入學しました。元來兄のパウロはどちらかと云ふと世間的の人物で、その上家庭教師は父親の信任こそ得て居りましたが實際はその信任に相應しくない教師であつたため、兄のパウロは益々世間的精神を起し、終に弟の不承知にも不拘下宿をプロテスタンの家に定めました。もとよりスタニスラスはこの公教會に反對する者の家に一日も居るを潔よしとせませんでしたから、せめても毎日早朝に起き出で、イエズス會の靈父の居られる天主堂に行きミサにも與かり久しく聖體の前に默想して居りましたが、時には天主様に對する愛の激しさのあまり恍惚の状態に陥る事もあり、又一日中の學業を了へると祈禱をし、眞夜中ですら時々起きて一人熱心に祈禱をする事も度々でした。これ程熱心なスタニスラスのことですからその學校の成績も亦拔群でした。しかし謙遜な彼は益々謙遜して居りましたから一向その信仰に危險を感じる事がありませんでした。日本の青年學生もよくこの處を習はねばなりません。信心の務めをするに勉強が出来ないなどいふのは一つの口實に過ぎないもので、またいくら學問が出来ても謙遜の徳がなければ害にならないにしても

決して益するものではありません。

又彼は淫がはしい學生とは一切言葉を交へず品行の正しい熱心な公教信者の學生と談話をする事をしてこの上もなく喜んで居ました。さうして身は高貴の子弟であり乍ら極めて質素な風をして、冬でも手袋を用ひず、人々の一番嫌はしいと思ふ事でも自ら進んで心より其仕事を果しました。下宿に歸つてからも兄の部屋を掃除し一切を整頓するのでした。そして暇さへあれば毎日でもコンタツを繰り絶えず苦業に身を委ねて只管世間の慾より遠ざかり、聖主の愛に浸つて居ました。

所がこれが放縱な兄や家庭教師の嫌ふところとなつて、この信心深いスタニスラスに何にかの口實を設けては嘲り虐待をして居りました。ある時この弟の嚴格な信心に對して「多くの青年の中汝だけが正しいものであると一人合點しては大間違ひである、世間にある人々は修道院内に於て修道に専心する人々とは全然赴きを異にして居るのに、汝だけが如何にも信心深い様子をして恰も信心の深いものは我一人であると言はんばかりにして居るのは不都合である」と云つては言葉巧みに誘なはうとつとめた事もありましたが、彼にとつては如何に強い誘惑があつても益々信仰をつよめる様努力めて居りました。スタニスラスは斯様な生活をつゞけてゐる間に突然病氣に罹り床に臥しました。日頃毎日聖體を拜領

して居ましたから病床に苦しんでゐても一日もこれを缺かしたくないので毎日の様に御願ひして拜領してゐました。當時は何分ルーテルの異端の盛んに流行して居る時で、而かも下宿の主人も家庭教師も共にこの異端の教徒であつたため、この家に聖體を持つて来ることを禁じてしまひました。それでスタニスラスはこの大切な靈魂の糧の拜領が出来ないで悲んで居ますと、今度は悪魔は色々の謀をもつてこの天使の様な純真潔白な青年を誘ふため色々の方法を盡しました。ある時悪魔は大きな黒犬に化けてスタニスラスに咬つかうとしました。しかし彼はイエズスの御名を呼んで十字架の記號をすると怪犬は消え去りました。

彼の病氣はだん／＼重くなつて醫者は最早施す術もなく適薬もないと言つて見放しましたが、スタニスラスは生死は天主様の思召であるといつて、その攝理ひに委せてゐました。たゞ一つ辛かつたのはプロテスタンである宿の主人の妨げによつて聖體拜領ができないことでした。彼は先きに聖バルバラの傳を読んで同聖人の傳禱を願へば死ぬ前に必ず秘蹟を領けられるといふ事を知つてゐたので一心に祈りました。果して此願ひは容れられ、ある夜死に頻してゐた時、聖バルバラは聖體を捧げ二位の天使に伴はれて枕頭に現はれ聖體を授けました。スタニスラスは愛と感謝に充ちながら謹んで拜領しました。此

不思議なお恵みを蒙つて後又大きなお恵みを受けたのです。即ち今息絶えんとする時、聖母マリアは幼きイエズス様を抱いてお現はれになり、優しい愛を以て慰められ、そしてイエズス會に入ることが天主様の思召であると告げて幼きイエズス様を寢臺の上に置きました。スタニスラスは大に心を慰められイエズス様の愛に燃えたちましたが、それ以來病氣は次第に快方に向ひ、すつかり全快したのです。醫者も之には驚いて全く奇蹟であると申しました。

スタニスラスは其時からイエズス會に入ることばかり考へてその準備をしてゐましたが、ウエンナの修道院に入るには親の許しが要ります。しかし親は修道院に入ること大反對であるから逆も許しを受けること出来ないと思つて他の修道院へ行く決心をしたのです。所がスタニスラスの身は兄の嚴しい監督の許に置かれてあつたので兄の手から逃れねばならぬのでした。ある日兄は彼を責めるために鞭打たうとしたのです。其時スタニスラスは非常に温和い態度で「兄上が斯様な折檻をなさるならば私は父に告げず他所へ出て行きます」と申しました。兄は怒つて「何處へなりと出て行け」と奴鳴りました。スタニスラスは此言葉を待つてゐたのです。彼はすぐに神父の許に馳せ往き告解と聖體の秘蹟を領け、極めて粗末な服を着けて北ドイツの管區長聖カニジウスの居られる修道院を指して出發しました。

彼の兄は、スタニスラスが家出したのは全く自分の爲であると信じ、責任上彼を探さうと思つてウエ
 ーナを尋ね廻りましたがどうしても見當りません。人から聞くと北ドイツへ赴いたらしいので数人の者
 と共に馬に乗つて追駆けました。スタニスラスは徒歩ですから直に追付かれましたが乞食の様な服装に
 替へてゐたので見付けられずに追手はすん／＼先きへ驅けてゆきます。いくら往つても見當らないので
 兄は引歸して歸つてしまひました。スタニスラスは進んで或る村に着くとカトリックの聖堂らしいのが
 あつたので入つて見ると新教の會堂であつたので大に失望して外へ出ました。此日聖體を領けたいと思
 つて路傍で祈つてゐると天使が現はれて天から持つて來た聖體を授けてくれました。丁度昔エリヤが聖
 體の魚りである天のパンを食べて四十日歩いた事が舊約聖書に記されてありますが、今スタニスラスは
 此不思議な聖體を領けて力を得、漸く聖カニジウスの許に着きました。

カニジウスは彼を見て特別に恵まれた青年であると曉つたので直ちに入會を許しました。間もなく着
 衣式を受ける爲に數人の者と共にローマに往く事となりましたが、二百六十里の行程で途中峻しい山や
 河があつてとても弱い身體のスタニスラスには無理な旅でありました。しかし無事にローマに着いて彼
 の有名な聖フランシスコ・ボルジアが總院長であつた修道院に入つて着衣式を受けました。

彼が着衣式を受けたことを聞いた國元の親は大に怒つて嚴しい咎めの手紙を送つて、若し國へ歸つた
 ら暗い牢屋に入れると云つて嚇したのですが、彼は少しも驚かず、固い決心の中にも優しい言葉を以て
 『私が修道士になる事によつて家の恥になるのではなく却つて名譽であるのです。私は天主様に生涯を
 献げたのですから、どんな苦みでも喜んで受けます』と返事しました。

スタニスラスはイエズス會の修練者になつたことを喜び、感謝の涙を流してますます完徳に達するや
 う規則をよく守り祈禱と黙想を勵み、善行と苦業に努めたので入會後死去するまで僅か十ヶ月だけであ
 つたに拘らず他の修士達が五六十年もかゝるほどの完徳に達したのでした。彼は自ら善行の無能者であ
 ると言ひ、謙遜して人からいくら卑下されても愉快さうにしてゐるので、修友等は遂に天使の如に敬ひ
 愛するやうになりました。又彼は日日の務めに一番卑しい仕事を與へられるやう願ひ、己が缺點を隠さ
 ず、咎められることを喜び、決して他人を誹ることなく、悪口を言はれても辯解せず、人に輕んぜられ
 ることを望み、洗禮後大罪は一つもないに拘らず大罪人の様に自ら鞭打ち、身には毛衣を纏ひ、嚴しい大
 齋をするなど、有ゆる謙遜、善行、苦業、犠牲をし、之より嚴しい業があればどんなことでも行ふ筈で
 ありました。

彼は財産も榮華も名譽も悉く棄てたのであるから此世の物に心を囚へられることなく、眞に世の總てから心を引離し、たゞ天主様のみが唯一の寶であり、たゞ天主様の中にのみ己が寶を見出してゐたのであります。又彼は從順の徳に秀で、長上の命令には神の命令の如くによく従うて居りました。

天主様に對する彼の愛熱は實に燃えんばかりに熾んで、たえず天主様の愛について默想してゐましたが、その生涯は絶えざる默想であつたと云へるほどで、何をするにもいつも天主様と語つてゐるのでした。不思議なことには彼は祈り中決して心を散らしたことがなく、人が祈りの時心を散らすといふ話を聞くと彼は却つて『不思議な人もあるものですね』と云つてゐたほどであります。主の御苦難を默想する時には常に目に涙をたゝへてゐました。ある修友が悪い誘ひにかゝつたので彼に祈つてもらつと直に誘ひは去りました。

聖母マリアに對する信心とその愛は丁度生みの母に對する如きもので常に聖母の御氣に入る様によつて、修友と語る時にはいつも聖母の御徳を稱えるのを樂しみとし、恰も聖母は彼を支配しておいでになるかの様に見えるほどでした。かほどに聖母を愛してゐたのでスタニスラスは自分の死去の日が聖母の被昇天の前日であるやうに望み、そして此望みは達せられることを悟りました。

修道會では毎月初金曜日一人の聖人を選んで何かのお恵みを願ふ習慣があるので、彼は聖ロレンシオ(八月九日)を選んで、被昇天の前に我身を獻げること出来るやう、又公けに何かの苦業を行ふ事を願ひました。そして毎日我身を鞭打ち、食堂に入つては人の足に接吻し、自分には食物を斷つて人の食残しをもらひ、地に跪いてそれを食べるのでした。彼は炊事場に行き其處に燃えてゐる火を見ると聖ロレンシオが火炙りにされて殉教したことを想起し、其日から重い熱病にかゝりました。醫者は何んでもない直ぐ癒ると云ひましたが、スタニスラスは聖母被昇天の前に死ぬと告げました。果してだん／＼力減り血を吐き身體は弱つたので、最後の聖體と終油の祕蹟を受け、そして大地の上で死にたいと願つたので地面の上に運ばれ、そこに度々十字架に接吻し、諸聖人の連禱を修友達に請うて唱へてもらひながら一五六年八月十五日午前三時即ち聖母被昇天の祭典の行はれる前にその望み通り清い靈魂は聖母マリアニ導れて天に昇りました。

息絶えてからも彼の顔は恰も活けるが如く美しく大勢の人は尊敬を表す爲にその足に接吻し、葬式の時には各階級の人々多數集りました。間もなく此聖徳に充ち満ちたる聖人スタニスラスの噂がイタリー・ポロニアに廣まり、遂に全歐州に傳はつてその傳禱を願ふ者夥しくなりました。その御死骸は今も尙

腐敗することなく、御死去當時の姿のまま保存されてをります。

實に聖人スタニスラスの如く僅か十ヶ月の修道生活に於て斯ほどまで完徳の頂きに達した方は稀であります。兎角輕兆浮薄に流れて墮落し易い年輩にある青年達は彼を模範としてその徳を學び完徳の道に邁進するやう心がけねばなりません。

十一月十五日 (降生後一二六四年生) 一三三四年死)

聖女ゼルツルダ童貞

ベネチクト會の修道女達の中に、學問と天主様に對する愛の深いことによつて名高くなつた聖女ゼルツルダ童貞は、獨逸國サクソン州エイセルペン市に生れました。この選抜の靈魂は、幼少の頃から天主様の特別の恵みに満たされておりました。彼は幼い心にも我身を天主様に捧げたい決心をしてゐるので、信心深い親は大に喜び、其希望を達せしむべくベネチクト會の修道女にその教育方を任せただけでありません。時にゼルツルダはまだ乳の香もとれない僅か五歳の幼女でありました。其時から早すでに童貞達

の天配なるイエズス様の所有となつたのであります。彼は謙遜、柔和であつて特に慎み深く、祈りを好み、淡泊で無邪氣で快活であり、而も人に對しては温雅でしたから、修道女一同から非常に可愛がられ、またその清淨潔白は天使の王なるイエズス様の聖意にも叶うて居りました。

成長するに従ひますく、伶俐となり、不思議なほど智識が發達するのでした。之を見て修院長は彼を特に學問に優れた修道女の側に置いて色々の學問の研究をさせることにしました。ラテン語と文學を七年間學びましたが、性質が利口で記憶力が強いので其進歩も速かでありました。彼は學問に勤勉であると同時に信仰の道にも中々熱心で二つながら車の兩輪の如く並び進んでゐたのであります。ところが文學と哲學を修める様になつてから、どう云ふものか世間的學問に心を入れ過ぎて信心の方が留守になり勝ちとなつたのです。其時イエズス様は彼に現はれ、嚴しくその過をお責めになりました。ゼルツルダは大に驚いて其不用心であつたことに気がつき、心の眼が明瞭りひらけ、己が心に天主様の聖意に添はない思考を持つてゐたことを曉つて耐えられないほどに悲みました。それ以來斷然他の學問を棄て眞の宗教の勉強と道を修める事に専ら心を入れ、聖書と神學と聖會博士達の書物を讀むやうになりました。之等の書を読んで、其目的を研究に置かず、また智識を磨く爲にも使はず、讀書で得た所は

悉く黙想の材料として受入れ、信心を熱くする爲にのみ使うて居りました。彼は聖書を讀んで聖靈の光りに照され、いつも心に何とも云へぬ喜びを感じるものでありました。斯の如く豊にして誤りのない靈魂上の眞理を自身で見出し、またイエズス様も直接お示しになつたのであります。されば多くの童貞達や他の人々の爲に善き教訓となり靈的糧を與へて居つたのであります。

彼二十歳の時、イエズス様は自ら書物に見られない所の眞理を曉らせて下さいました。即ち聖母マリアの潔めの祝日の前夜に、彼は大なる光りを受け、今迄送つた生活が他の童貞達の目には立派に見えてゐても、自分の目には黒暗で空しい生活であつた様になり、と映るのであります。其お恵みの結果として、天主様と親密に一致するやうになり、どんな變つた仕事をして、どんな境遇に置かれても、いつも天主様の御前に居ることを忘れぬやうになつたのであります。

修道院の多くの修道女達の中に、特に徳の勝れた者があつて、完徳に達するためのセルツルダの競争者が現れました。それはメクチルダと云つて、ある日は彼は聖堂で日課を歌ふ時、高座の上にイエズス様が現れてゐられるのを見ました。其お側にセルツルダが逍遙しながら隨つてゐるのです。そして色々の用事をしながらも絶えずその視線は御主の方に注がれてゐるのであります。メクチルダは不審に思ひな

がら一心にこの光景を眺めてゐると、イエズス様は彼に向ひ「之は親愛なるセルツルダが私の目の前に送る生活の有様である、彼はいつも私の目の前に居ることを忘れず、そして如何なる事が私の心に最も適ふかといふ事のみを知るにつとめ、色々の愛徳の業を新しく案へ出しては之を實行する。彼の一生涯は私を尊敬し私に榮を歸する爲に絶間なく續けてゐる」と。つまりイエズス様の光榮を顯し、その聖旨を成し遂げるのがセルツルダの唯一の仕事であり心遣ひであつたのです。實際彼は自己を全く忘れて天主様の光榮の爲のみに働いてゐたのであつて、其着物、什器など、すべての所有品は幾ら珍らしいもの、美しいものであつてもそれは己が身を飾り五官を満足させる爲に必要でなくして、悉く天主様の光榮を充たす爲にこそ用があつたのであります。我身に必要な品をいたく時には天主様の御手から直接賜はつた如くに受けて居りました。我身は全く天主様の所有物であることを考へて、天主様に愛を現はすためにはその肉體と靈魂が懇求するすべてのものは天主様が懇求致されるものとして、即ち自分分は天主様の一つの容器の如く見做してゐましたから、一寸でも天主様の爲に使はれぬことがあれば何か盗みでもしたかの様に感ずるのであります。

聖體は彼の信心の中心で、恰も熱愛の鹽のやうなもので、そこから主の熱愛を汲取つてゐたのであり

ます。聖體拜領の前には、思も言葉も行も何も彼も悉く準備として捧げてみました。そして拜領後は一つの仕事を全部感謝の爲に使ふのでありました。ある日聖體拜領の前に充分な準備が出来てゐないと曉つた時、おづくしながら「今天配なるイエズス様が私をお招きになつてゐるのに、どうしてお迎へできようか、私は主をお喜ばせ申すための手柄は何もない」と。それでも失望しないで天主様の限りない慈愛に信頼し、其弱さと價値ない者であることを曉りながら深く謙つて斯う考へ直しました。「私が應はしい準備ができてゐないからと躊躇する理由がない、適當な準備をするためにはたとひ千年あつても足りないのであつて準備ができてゐないのと同じである。依て躊躇はずに謙遜と信頼と一杯にして進まう、さうしたら限りない慈愛のイエズス様は私の近づくのを眺め、その心の貧しさを御覽になつて必と靈魂を飾つて下さるに違ひない、御主は全能者でゐらつしやるから……」と。斯ういふ心を抱いて聖體に近づいたのです。するとイエズス様は憐みに満ちた御顔を見せながら彼にお現はれになりました。同時に幻の中に自分が謙遜を意味する紫色の衣を着、望徳を意味する青色の上衣を着、愛徳を表す金色の外套を着、其上寶玉で作つた金の冠を頭に戴いてゐるのを見ました。金の冠はイエズス様がある人の心を全く司配致される時の御喜びの象徴であるのです。

また別の日に聖體を拜領する時、イエズス様に向つて「主よ、私に何をお與へ下さるのです」と。主は答へて「私の母童貞マリアがお告の時、私を享けた如く、私悉くを與へるのである」と。

ある日聖體を拜領して後深く憤んで感謝してゐる時、イエズス様は、我が血を子に飲ませる爲に胸を傷けるペリカンの形を藉りてお現れになりました。ゼルツルダは「この形を以て私に何を曉らせて下さる思召でありますか」と訊ねました。主は「かういふ尊い賜(聖體)を與へることによつて、私のはげしい愛が、如何に私を愛する人の愛に引かされるかを曉らせたいのである。此賜を人々に與へてから、今まで私に對する愛熱に燃えてゐた靈魂が、もう之を領ける事を躊躇し遠ざかるやうになるのを見ると私は悲しいのである。汝がこの靈的糧を領けることによつて如何に勝れた生命を受けてゐるかを曉らせたいのである。何となれば親の胸から流れる血によつてペリカンの子が生命を受けると同様に、汝も永遠の生命を聖體によつて受けてゐるからである」と。

我等も聖女に倣うて度々聖體を領けるを以てイエズス様の限りない慈愛を満足させるやうにとめねばならぬのであります。さすれば其靈魂はどれほど幸福でせうか。ですから之を領けるにふさはしい者になる様ます〜靈魂を清めねばならぬのです。

セルツルダは或日聖體を拜領する覺悟として、どれほど舌に警戒を加へねばならんかを默想してゐました。其時天の光りに照らされて次の警を以てお示しを受けました。即ち「聖體を領ける前に、無駄言葉、虚言、猥褻な話、などの罪を犯してゐながら之を拜領する者は、丁度高貴なお客が門を知らうとする時彼に石を投げ、近寄つてその頭を撲りつけて迎へる者に似てゐる」と。彼は默想終つてから之に附加へて謂ふに「イエズス様の限りない慈愛と私共の酷さとを比べてよく考へねばなりません。柔和を以て此世にお降りになつたお方を、斯く酷く扱つて平氣で居ることができませうか、舌によつて犯す罪についてのお示しは、他のすべての罪にも當嵌めることができるのであります」と。

聖女は毎朝熱心と深い敬虔とを以て御ミサに與つてゐました。ある日聖體奉擧の時、司祭に心を合せて自分も限りのない、汚れない此聖い犠牲を捧げてゐました。其時イエズス様は御自分と共に彼の靈魂をも捧げられたと云ふことを感じました。この大なるお恵みを如何にして感謝したらよいかと考へてゐる時、主は次のやうなお示しを與へられました。「ある信者が、今祭壇に如何なるものが献げられてゐるかをよく辨へ、深い信心を以てミサ聖祭に與かる度毎に限りない憐みを以て眺めて下さる、なぜならば天主様は其限りない値打を以て献げられる御子の犠牲を御覽になつて御満足いたされるからである」と。

と。

後に聖女マルガリタ・マリアに聖心を現して下さつたイエズス・キリストは、セルツルダにある程度までの聖心の愛をお示しになつたのです。それは後日マルガリタに聖心をお現しになる前表の様なものであつたのです。度々聖心の不思議ないつくしみを彼に現して、それは丁度汲めども盡きない恵の泉のやうに、また確な依托所のやうに示されました。ある日聖心を金の香爐の形に現され、其中から幾條も煙の柱が立騰つてゐるのでした。それは御自分がお救ひになつた色々の靈魂の種別をお示しになつたのであります。

ある日彼は、できるだけ注意をして祈りをするやうに努めてゐましたが、弱い人間として何うしても氣が散つて仕様がなないので之を防ぐに苦しんで居りました。そして憂ひに沈みつゝ、斯ういふ風に氣を散しつゝいたした祈りは何んな効果があるだらうかと考へて居りますと、イエズス様は彼を慰める爲に熾に燃ゆる聖心を現はして「三位一體の喜びなる我心を見よ、汝の力に及ばない事があれば信頼を以て助けを願へ、されば汝の怠り、缺點を補はれるのである」とお諭しになりました。

聖女は度々イエズス様に向ひ「棺にて貫かれた聖心によつて、愛熱の刃によつて私の心を貫いて下さ

いと。斯ういふ願をしてから謂ふのに、私の願ひがたしかに聽容られたといふことを感じましたそれは十字架上のイエズス様の右の御手の傷から槍の如く光線がひらめき出て、その閃きのきつ先が私の心臓を射るのを見ました。某時から弱さに満ちた私であるに拘らず天主様は私の心から離れなさらな

いと感じて居ります」と。

ある時聖女は次の様を祈りました。「我が愛よ、我が王よ、我が神よ、臨終の時御身の聖心の保護の許に私を入れて下さい。我が愛よ、私の心は烈しく主の聖心に引つけられてゐます。その烈しさは私の心を苦しめるほどであります。私の心を悉く奪ひ取つて下さい。私を愛する爲に傷けられ、すべての罪人を絶えず招き給ふ聖心よ、罪人の依託所となるやう、また我が靈魂が肉身を離れる時どうか私の依託所となつて下さい」と。

或日イエズス様は、どれほど歡喜の中に彼の心に住ふかを曉らせるために、彼の競争者メクチルダに告げて申されました。「我れにとつて一番ふさはしい住ひ所は聖體の中と親愛なるゼルツルダの心の中である」と。

斯様にゼルツルダは大なる恵みに満されてゐるに拘らず、誇らしい様子とか自己愛とかいふものは髪

の毛ほども見せません。彼は益々謙りの徳を積む爲にたえず自分の缺點の方に目を注いでゐました。そして自分の受けてゐるお恵みが大なれば大なるほどいよ／＼益々天主様の限りない慈愛の前に謙るのでありました。彼は自分が斯ういふ大なる恵みを受けるのは天主様の特恩であると認め、自分は世界で一番の忘恩者である如くに見做して、ある日叫んで謂ふのに「主よ、御身の行ひ給ふ奇蹟の中、最も大なる奇蹟は私の様な罪人を此世に生かして置かれるといふ事でありませう」と。

イエズス様と深く愛する者の誰もが望むやうに彼も亦イエズス様の爲に大に苦みたいと烈しい望みを抱いて居りました。それで、主を愛するために何も献げるものが無い時ほど彼にとつて辛いことはなかつたのです。ですから厳しい苦業に従ふことを喜び、また病氣の苦痛を歡喜の中に迎へるのであります。彼はまた絶えず御主の御苦難の事を默想して、其默想中にイエズス様がどんなに恐ろしい苦みをお受けになつたかを曉つて深くその心に泌込ませて居りました。ある金曜日に當つて主に向ひ「我が靈魂の唯一の希望なる主よ、如何にすれば主の御苦難の大恩を完全に曉る事ができるか、その方法を教へて下さい」と。其時主は示しを與へて「若し己の考へを棄て、他人の意見に従ふ者は、私が受けた輕蔑に對して慰めを與へるものである。人から悪口をせられた時、謙遜して己が罪人なる事を認める者は、私

が人々を愛する爲に不義の宣告を受けた事を認めるものである。五官の快樂を犠牲にする者は、吾が鞭打たれたことを慰めるものである。嚴格なる長上に従順する者は、吾の茨の冠の苦痛を和げるものである。全力を盡して他人の爲に働く者は、十字架の上に苦む吾を尊敬するものである。一人の罪人を改心させる爲に恥辱と苦みを進んで受ける者は、吾に死の苦みを忘れさせるものである」と。

イエズス様の御血によつて贖はれた靈魂を救ひたいと云ふ熱い望は、ゼルツルダの靈魂を焼きつくすほどであつて、彼は聖體の御前または十字架の前に罪人の改心の爲に涙を流して熱い祈りを捧げるのでありました。彼が書く手紙とその教訓は、すべて是天主様に榮を歸することゝ愛させることのみを目的として居りました。人に對して話をするにも眞面目で熱心が籠つてゐましたから之を聽いて感動せぬ者はありません。いつも人に向つて、救かりを安全にするために、世間のすべての榮華から離れねばならぬと頻りに勧めるのでありました。そして憂ひに沈む者に對しては大なる同情と憐みとを以て慰めを與へ。また主の愛に燃えてゐる者には、まだ足らないとして、もつと熱烈な愛に燃える様にと勵ますのでありました。洵に彼の言葉と模範によつて多くの修道女達はどれほど完徳の高い所に引上げられたか知れないのであります。

天主様は此美しい靈魂をもつと華美くする爲、約そ五ヶ月間の病苦を與へられ、之を以て最後の飾りと致されました。彼は少しも憂ひや不満な色を見せず、却つて苦痛のはげしい方が満足らしく見えておりました。彼はイエズス様とよく一致してゐましたから、イエズス様のお望みになる事は自分も之を望み、いつも主と同じ望みを抱いて居るのであります。

ある修道女はゼルツルダの全快を求むる目的で、聖リエヰイノに向つて九日間の祈りをした所が、聖リエヰイノは彼に現はれて『王様がその妃に冠を與へるのを一兵卒は之を妨げる権利がない』と申されました。

一三三四年遂に御主とさうして彼が常に尊敬してゐた聖母マリアと聖ヨハネは、彼を天國へ案内すべく迎ひに來られ、その周圍には數多の聖人達も隨いて居られました。同時にはるか彼方に色々の醜い形態をした惡魔が丁度捕虜の様な恥かしさにみだされて繋がれてゐるのを見ました。彼のメクテルダは、勝利を得た聖女の靈魂がイエズス様の聖心の方に眞すぐに昇つて行くのを見たのであります。また他の信心深いある修道女は、聖女が天國に昇る時、同時に其功德によつて煉獄から救ひ出された靈魂達が一緒に昇つたといふお示しを受けたのであります。

實に聖女の其生涯は、如何にすれば天主様の聖意に叶ふかといふ事のみ心に砕いてゐたのでありまして、丁度孝行な子供が、如何にすれば父母を喜ばすことができるかと始終心遣ひをするのと同じでありました。今の世に於て多くの人は天主様を忘れ、永遠の生命を忘れ、たゞ如何にすれば金を儲ける事ができるか、如何にすれば五官を樂ませることができると専ら現世の淺慕な幸福と自己を愛することのみに心を傾けて居るのではないでせうか。我々は此聖女に倣つて常に高尚な望みを抱く様にせねばなりません。

十一月十六日 (降生後一二四〇年死)

聖エドモンド大司教

パリー大學の名譽、英國の彩華と頌へられてゐる有名な博士聖エドモンド大司教は、オクスフォードの近傍に於て、現世の財寶よりも徳に富んだ親から生れました。父エドワードは其妻の承諾を得て修道院に入り後に立派な聖人の様な死を遂げたのです。母はその子供の教育の爲に世間に残つて生活さねば

ならんのでしたが、恰も修道院に入つたと同じ氣分で信心的務めをよく守り、着衣の下に亘衣をまとひ晝夜のわかちなくよく祈りをし、たえず私慾に打撃つ様つとめ模範的生活をして居りました。

エドモンドは其の長男でしたが、朝生れて晩までといふものは聲も出さず、息もしてゐる様に見えず全く生きてゐると思はれないので、皆早く葬つたがよいと申しました。しかし母は承知せず洗禮を受けさせたのです。其時から生きて居る事が判る様になつたのでありました。

成長するに従ひ母は徳の道を教へ、犠牲的生活を勵ませ、金曜日には特に食事を節して犠牲をさせるなど、自ら進んで克己、制慾を勵む様に導いて居りました。

パリーに遊學する爲に、弟ロベルトと共に出發しましたが、母は其時、彼等の清淨潔白の貴重な徳の寶を失はせない様にと配慮して二人に亘衣を與へ、そして一週二三回之を着て身を苦しめる事を勧めました。また時々荷物を送る時には必ず何かの身を責める道具を一緒に送るのを例として居りました。母はさういふ注意深い方でしたから兄弟は遠く離れたパリーに居つても英國に於けると同様に敬虔な母の薫陶を續いて受けることが出来た譯です。

エドモンドは斯の如く母から立派な教育を受けたので柔和、謹直、信心の模範的青年となりました。

彼は毎日勉學と祈禱に身を委ね、御ミサに與るのを楽しみとし、學校と聖堂と自分の部屋に居る外あまり世間に顔を出さないのでありました。彼の持つてゐた書物の中に次の様な感すべき格言が録されてあります、「若し一方に罪を見、また他の一方に地獄を見たならば、私は罪を犯すよりも地獄に落ちるのを選ぶ。」と。是によつても如何に罪を憎み嫌うて居つたかよく分るのであります。

特に幼きイエズスに對する愛が深く、絶えずイエズス様の事を考へて、その聖慮に叶うた行ひをする様につとめて居りました。イエズス様もまたエドモンドの色々の必要を満す爲に細い點に至るまでその愛を現はし給ふのであります。ある日彼はイエズス様から不思議な恵みを受けたのです。夫れは他の學生等と共に散歩に出た時の事でした、學友等が清淨潔白の徳に背く話をしたり、愛徳に悖る談話をしたりするので、それを避ける爲彼等を離れて一人閑道に入りました。すると其處に幼きイエズス様が心を奪ひ取る様な優美しい姿を以て顯はれ、愛に充ちた御まなざしで彼に向ひ「親愛なるエドモンドさんよ、今日は良い日でございます。」と挨拶を致されました。彼は突然不思議なお方からこんな親切な挨拶の言葉をかけられ、何んと答へてよいかと大にまごついてゐます。イエズス様「私を忘れましたか。」エドモンド「どうも覚えませんが、あなたは人違ひをしてゐられるのでせう。」イエズス様「どうして私を

記憶しないのです、あなたが學校に居る時いつも私は貴方の側を離れた事なく、またあなたの往く所へは何處へでも隨て行くのです。判らねば私の顔に書いてある字を讀んでごらん下さい。」目を上げると驚くではありませんか「ユデア人の王なるナザレツトのイエズス」と奇妙な字で書かれてあります。イエズス様は言葉を續けて「これは私の名である、此の名を晝夜心に浸み込ませて其の額に刻みつけるならば、あなたは願死の禍を免れる事ができ、またあなたに倣つて斯く爲す者は皆同じ恵みを受けるのです。」と。イエズス様は彼の心の中に謂はれぬ歡喜を満しつゝお姿をお消しになりました。此事があつて後エドモンドはキリストの御苦難に對する特別の信心を抱く様になり、之について絶えず考察して居りました。

ある日エドモンドの寄宿寮へ國許の母が重病にかゝり六づかしいかも知れないので、母は彼に祝しを與へたいから急ぎ歸國せよといふ報せがはりました。彼は驚きいそいで歸りました。そして慈母の最後の祝しを受けたのです。其時彼は弟と妹二人にも祝しを與へてやつて下さいと願ひました。處が母は「その必要はない、なぜならば、お前を祝する事によつて同時に彼等も祝しを受けてゐる、そしてお前が天主様から受けるお恵みを彼等にも分たれるのである。」と。丁度其の前晩うつゝにエドモンドが

茨の冠を頭に戴き、その冠から焔が天に立のぼつてゐる光景を見たのでありました。母は彼にその弟の面倒を見る事と、妹達の徳を特に保護する様に頼み安心して此世を去つたのであります。

二人の妹はその容姿が優れて美しかったので、エドモンドは彼等を世間に生活させる事の危険を恐れ、修道院にはいる事を勧めました。二人は素より望んでゐた事として大に喜んで承知しました。そこで如何なる修道院へ入れたらよいかを天主様に祈つて、そのお示しを求めた末、嚴重な規則を守る貧しい修道院を選び連れて往きました。修院長はエドモンドを見るや否や初対面で名前も分らず用件も知らない筈であるに拘らず、不思議にも名前を呼び且つ『あなたのお妹さん二人に喜んで入院を許可します。』と申しました。斯うして妹達は徳を修め立派な修道女となつたのですが、是も矢張りお母さんの注意深い教育の結果であるのです。

エドモンドもまた生涯を清淨潔白に生活したいと思ひ童貞の願を立て、聖母マリアに身を捧げたのであります。此の願を立てる時、聖母に奉獻せられた聖堂に往き、天使祝詞を彫りつけた二つの指輪を聖母の御像の足許に置きました。そして彼は熱心に祈つて終身童貞の願を立てて後一つの指輪を取つて

聖母の指に嵌め、また一つは死ぬ迄自分の指に嵌めて永遠の約束としたのであります。夫れ以来聖母は特別に彼を保護し、またエドモンドは聖母を皇后と仰ぎ保護者として戴き、また母として尊んで居りました。

母の不幸の爲に一旦歸國したエドモンドは學業を終へる爲に再びパリへ往きました。彼は好學心が強かつたと同時に、また徳に進むべく絶えず努力をして居りました。即ちいつ迄も此世に生くべきもの様に勉強し、又明日死ぬるもの様に徳を修めて居りました。一心に勉強して他に心を散らすことがなかつたから自然虚榮とか快樂とかいふものは彼に近寄ることが出来ませんでした。同時にその行うて居つた徳の爲に靈魂は不思議な光りに照されて眞理の奥義を深く曉るの恵みを受けてゐたのであります。それで學友は素より先生達からも稀な秀才として尊敬を受け、また彼の潔白な生活、勝れた徳を見て皆聖人の如く尊んで居りました。

學業を無事に優等の成績で了へたので學士となり大學に止まり教授として文學を講じて居りましたがその質素にして無愁な生活振りに生徒達は敬服して居りました。苦學生を助はり彼等に施しをなし、ある時には病氣の生徒を六週間自分の部屋に寝させて親切に世話をした事もありました。ある生徒は腕を

病ひ長らく痛みに悩まされて居りましたが、エドモンドは心から之に同情し熱心を籠めて『主イエズスよ、彼を癒し給へ。』と祈ると、忽ちに彼の腕は癒えたのであります。

いつも變らぬ熱信を以て生徒を徳の道に導き、彼等に對してキリスト教的生活の必要を愉し、又聖母マリアを尊ぶ爲に一つの小聖堂を建て、其處に生徒を連れて行きなどして盛んに信心の方へ引入れる様に力めましたから、其の感化を受けて善良なる人となつた生徒も少くなかつたのであります。

ある日幾何學の教授の時頻りに難解な問題を講義して居りましたが、其時エドモンドは側に亡母が現はれてゐるのを見たのです。母は黒板に書いてある圖を指して『此圖は何んの役に立つのか。』と訊ねました。俄かに返答が出なくて狼狽してゐますと、母は彼の手をとり三つの輪(それは神の三位一體を表はす)を畫いて謂ふに『御身はあまりに世間的學問に氣を遣ひ過ぎる……此際専ら神學の研究に身を委ねる方がよい』と勧めました。此事あつてから彼は六年間教鞭を執つてゐたパリー大學を去つて神學校に入り神學を修めたのであります。毎日慎んで聖書を読み、御ミサに與り、格別に彼が深い信心を持つ聖母マリアの祭壇の前に跪き、涙を流して祈るのであります。また慈善心に富む彼は時々その書籍を賣つて貧しい人達に施しをして居りました。

斯の如く信仰と學事と並び進んで其の蘊奥を極める様になつたので博士號を贈與される事になりました。しかし謙遜な彼は是を辭退したかつたのですが、一面また辭退するのは從順の徳に背く事であるので止を得ず學位を受けたのであります。そして此の博士號を自分の利益の爲には利用せず、他人の益をはかる爲にのみ役立たせて居りました。弟子の中に彼の熱心と親切に動かされて天主の愛に燃えつつ此世の名譽と財産を打棄て、修道者となつた者も少くありませんでした。

ある夜不思議な豫言的幻を見たのです。それは自分受持の教室に大きな火の玉が現はれ、それが七つの焔に分れて外に出て行くのでした。其翌日シトー會トラピスト修院長がエドモンドの話を聽く爲に來訪し、歸りに其弟子の中から七人の修道志願者を連れて歸りました。

或日三位一體について講義せねばならぬので、その時間を待つ間教室に椅子に凭れてうつらうつらとして居りました。其時天からオスチャをくわへた鳩が降つて來るのを見たのです。目が覺めてから講義をしましたが、此時常とは異つて非常に雄辯を振うたので聽く者皆大に感服すると共に、あの雄辯は必ず聖靈の感導によるものであると曉つたのであります。

エドモンドが司祭の位に擧げられてから其の説教を聞いた者は如何なる罪人でも改心せぬ者は殆んど

無いといつてもよい位でありました。説教の間は手に十字架を確と握り、時には涙を双頬に流すことあり、ある時は微笑をたゞへるのでありました。此の涙は即ち大勢の人々が天主の十誠や聖會の掟を熟く知りながら、また主イエズス・キリストや聖人達の模範があるに拘らず冷淡、不信心な生活を營んで居るのを悲しむ涙でありました。又時に微笑を見せて居つたのは即ち救主が御苦難、犠牲によつて、凡ての人々に恵みを與へ給ふのを見、嬉しさに堪へずして顔に微笑が浮ぶのでありました。

幼少の頃から金曜日は勿論、四旬節中毎日大齋を守る習慣がついてゐましたから司祭になつてからも一日一食よりとらず、飲物をも犠牲にして苦業を爲し、また身體を苦しめる爲に三年間寢臺を用ひず地面に寝たり、或は腰掛けて夜を明したりした事もありました。

エドモンドの學徳すぐれて居ることを聞いて各地の司教は自分の側に彼を置きたいので多くの金を提供する條件を以て承諾を求めましたが、彼は金を持つ事が嫌ひであり且つ他の束縛を受けずに自由に思ふ存分救靈に働きたかつたので断りました。實際彼は貧しい者に施しする時の外金銭に手を觸れた事が無いほどで、會計係りに要事のあるのは殆んど施しをする場合だけでありました。

教皇様はエドモンドの信仰と徳の勝れた事を聞いて、恰もカンタベリーの司教が亡くなつたので彼を

其の後繼者にお選びになりました。彼は始めにお断りしたのですが天主様に背くのを恐れて遂に承諾致しました。そこで彼は大歓迎の裡に盛大な叙品式を受け、カンタベリーの大司教の位に就いたのでありました。

彼は貧者を扶助け、孤兒の親となり、病者者を慰め、寡婦の保護者となり、持參金の足らない結婚者に金を與へ(當時結婚する者は一定の持參金が必要であつた)其他色々の慈善救済の事業を爲して弱者のために強い力となつて居りました。

彼はまた、人の悪を見たならば黙つて居る事ができません、遠慮なくピシ／＼と戒めるのでした。又罪人を改心させる爲に非常に力を注いで居りました。

エドモンドは天主様に忠實であり其の聖意に叶うた者であつたから、斯かる人の常として苦しい試練をも受けねばならぬのでありました。即ち人から怨恨、嫉妬を受けたのです。政府の官吏や友人等から反對され、恥辱められ、迫害を受けて精神的に非常に苦しめられたのでありますが、それでもよく忍耐して少しも平和を失はず誰に對しても親切を現はして居つたのでありました。此の強い忍耐を見て不思議がつて居る人に答へていふに「若し人が私の兩腕を切り兩眼を抉抜くとも、私は猶其の人を愛する。

子供が病氣の時、苦い薬を飲ませてくれる親を恨んでならない如く、私も精神的の色々の缺點不足を直す良薬を與へてくれる敵を恨んではならない。十字架上でキリストの自由にする事が出来たのはたゞ舌だけであつた。而もその舌を御自分を十字架に釘付ける責人等の罪を赦す爲に使ひ給うたではなかつたか。」と。

益々壓迫が烈しくなり大司教としての務を自由に果す事が出来ぬ様になつたので終に天主様の啓示によつてフランス國に免れる事に決め、船の出るのを待つて居りました。其時前カンタベリーの大司教聖トマス・ベケ(十二月二十九日祝日)が現はれ、エドモンドの勇氣を勵ませ「克く忍耐せよ、間もなく汝の働きに對する大なる報いを受くるであらう。」と告げました。斯くて彼は英國を離れフランスのボンチニーといふ町のシトー會修道院に入り、其處に於て祈りと讀書に親しみ、修道者に對して熱烈なる説教を爲し、また彼等を完徳に導くために有益なる書を著したのでありました。

間もなく病氣にかゝり最後の近づいた事を悟つて終油の祕蹟を願ひ、聖體を領ける前にイエズスに向ひ「主よ、私は御身を信じ御身を人々に認めさせ、此の地上に於てはひたすら御身の聖旨に叶ふ様にとめ、その思召を全うする様に力をそゝぎました。今も他に何んの望みもありません。たゞ思召を完全

に行ひ給はん事を。」と申しました。

聖體を拜領してから大なる歡喜に満たされ、身體が弱るに従ひいよ／＼益々其の靈魂は光り輝くよと見えるのでありました。此の美しい靈魂は一二四〇年十一月十六日遂に天主様の許に歸へつたのであります。丁度其夜一人の徳のすぐれた聖人はエドモンドが天國に於て大いなる光榮を受けて居られるのを見ました。

彼は多くの奇蹟を行はれたので、嚴重なる調査の結果一二四七年インノセンチオ第四世教皇は彼を聖人の列に加へられました。其の遺物はフランスのルドピコ皇帝がボンチニーの聖堂に收め、今に至るもフランス及びイギリスの多くの人々から尊ばれて居ります。

十一月十七日 (降生後二七〇年死)

聖グレゴリオ・タウマツルゴ司教

聖グレゴリオは、其の卓絶に學問によつて世に知られて居りましたが、しかし後に多くの奇蹟を行ふ

聖人物語 聖グレゴリオ・タウマツルゴ司教(十一月十七日)

様になつたので一層名高くなりました。夫れでタウマツルゴ即ち奇蹟を行ふ者と呼ばれる様になつたのです。

グレゴリオは小アジアのネオセザレ市に生まれました。彼の親は華族で富豪でしたが一族は皆信者ではありませんでした。彼は十四歳の時父を亡したのですが、其時彼は真理の光に照されて偶像を拜むことの誤りが判り、後に學問が進むに従うてます、偶像教の迷信であることをはつきり曉る様になり、同時に神の唯一なる事、キリスト教の真理であることを認める様になりました。

彼の母は、父が死ぬ前に決めて置いた通りグレゴリオに文學、特に修辭學を學ばせることにしました。當時ローマに於て高い位に登らうとすればラテン語と法律とを是非學んでおく必要があつたので、夫れらの學問をも一心に修めたのであります。修辭學を専攻したるとはいふものゝ常に真理を愛し曲つた事を排するの念が強かつたので少しでも真理に合ぬ文辭は絶対に修飾することはしなかつたのです。

天主は此の正直な靈魂を真理にお導きになりました。グレゴリオの姉がセザレの知事の書記官に嫁いでゐたので、弟のアテノドルと共に其處をたよつて行く事にしました。(此のアテノドルは後に司教となつて殉教された立派な聖人です)其頃セザレにオリゼヌといふ學徳秀れたキリスト教の名高い碩學

があつて、グレゴリオは其の教を受けたいと思ひ一日その門を敲きました。オリゼヌは彼が勝れた理性の持主であるのに感心してキリストの正しい教を聞かせました。グレゴリオもまたオリゼヌのその博學その辯説、その徳の高いのに敬服して、其時から世間的の學問をするよりも此の學徳比びなき大先生に將來の指導を任せたいと決心をしてその弟子になりました。此時からオリゼヌとグレゴリオとの仲は丁度舊約のダビドとジョナタスの様な親友になつてしまひました。

グレゴリオの書き遺した書の中に、オリゼヌ先生の彼に對する學問指導のもくろみか收めてあります。夫れによると丁度農業者が荒地を開墾して其所に何かを作る場合に、先づ地質をよく調べて其地に適した物を作る如くに、オリゼヌは自分の門下を指導するにも矢張り其の性質をよく調査し、真理の種を時々の爲の仕度が充分でき上つてから哲學などを教へるのであります。そして特に天主の事について學ぶ時には、人間自身の智慧ばかりに頼んだら、どれほど甚い誤りに落ちるかも知れないといふ事をよく悟らせ、天主に關する學問は元則として天主御自身が直接教へられた御言葉と豫言者によつて示された事を土台として研究せねば無益である事を懇々諭して居つた事が記されてあります。

彼は一心に勉學して居りましたが間もなくマキシム皇帝の公教に對する迫害が起つたのでオリゼヌ先

生は一時セザレを立退かねばならんことになり、グレゴリオも一緒にアレキサンドリヤに避難して其所で續いて學事にいそしんで居りました。

彼は未だ志願者の身でありましたが、その言語動作の慎ましいこと、その謙として犯すことのできない態度は自然他の學生達の風紀を引締るのでありました。その爲に學生等の中に悪感を抱くものもあつて數人申合せ彼を陥れ様とし、ある一人の若い女に言合め悪計を企らみました。即ちグレゴリオが數名の學友と頻りに哲學の研究に氣を取られてゐる最中に、彼の女は如何にも馴々しく以前から關係のある様なまめかしい風をわざと装うてグレゴリオに近づきお金をねだりました。學友は此の光景を見て驚き呆れ彼女を追出さうとして騒ぎました。グレゴリオは彼等を制止して『今は大切な研究の時間である、勉強の妨げとなるから彼女の要求を容れて早く歸すがいい』と申しましたので、之を聞いた學友等は彼に對して大に疑を深めたのです。所が不思議ではありませんか、彼女は金を受けるや否や悪魔に憑かれてあたりを荒狂ひ口から泡を吹き全く狂人の如き有様に變りました。グレゴリオは此の憫れな姿を見て可哀相に思ひ、彼女から悪魔の去らんことを熱心籠めて主に祈りました所が直に悪魔は離れ去りました。之がグレゴリオの最初の奇蹟であります。

迫害が歇んだのでオリゼヌの師弟一同はまたセザレに歸りました。グレゴリオはキリスト教に關する研究を了つて二三年に洗禮を受けたのです。受洗の前に當り公開の席に於て自分の師たるオリゼヌ先生に感謝の爲、演説をして師の學徳勝れた事を頌へ、またキリスト教の眞理なる事を高誦しました。此演説は實に熱誠あふるゝ大雄辯であつて名演説として今日に至るも傳へられて居ります。

彼が故郷セザレに歸つて後オリゼヌから愛に充ちた一つの書簡を受けました。『貴方が天主から受けて居るその智識、その能力のすべてをキリストの教を宣べる爲及び其の辯護の爲に利用せよ、此の目的を達する爲に必ず働きに祈りを添へよ。』と。彼は此の勸奨に忠實に従ひ祈りを第一の武器として救靈に盡瘁しました。それによつて多くの徳を修める事ができ、また夥多の奇蹟を行ふ恵みを受ける様になつたのであります。

市の人々は、學徳秀れた偉人が自分の市から出た事を誇りとし、彼に名譽ある地位を得させ様としたのです。しかし謙遜な彼は聖寵のすゝめに従うて所有物全部を賣拂ひ貧者に施し、そして我身は天主と益々親密に關係する爲に靜かな場所を選んで隠れた生活をするにしました。

所が其處の大司教フェチモは豫言をする恵みまでも受けて居るほどの高德な方であつて彼の學徳優れ

た稀な人物であることを知り、彼を司教の位に上げたいと考へました。之を知つたグレゴリオは此の重い責任を逃れたいと思ひ、ます／＼淋しい所に隠れ様としました。大司教は彼に對してどうしてもネオセザレの司教になる事を勸めて止まないのです。此の市は大きな都會でしたが風紀が紊れ人心が極度に腐敗して居りました。當時信者の数はたゞ十七人しかなかつたのです。彼は大司教の勸めを断るのには天主に逆ふ事であると曉り遂に承諾致しました。しかし位に就く迄數日間大齋と苦業をして準備をする爲に猶豫を願ひ、そして其間に熱心に祈つて自分が受持つ筈である町の人々を改心させる事ができる様にまた改心してからキリストの教も誤りなく守つて行く様に、異端の説に迷はされない様にと涙を流して願うたのです。ある夜グレゴリオは祈りをしながら自分の重い責任のことを頻りに考へて居りました。と、そこへ聖母マリアと使徒聖ヨハネとが現はれ、彼を慰めてから聖ヨハネは、三位一體と御托身の玄義について信じねばならない事を教へたのです。彼は早速之を筆記しました。即ちグレゴリオ信經と稱して傳へられて居るのがそれでありませう。後に死ぬる時大事な遺言として之を遺しました。此の爲に其信者は當時はやつてゐた異端の説に迷はれず信仰を保つ事ができたのでした。此の御現はれによつて彼は非常に強められ勵まされたので勇氣百倍し、恰も勇敢なる兵士の如く、祈りと眞理の式器を握う

て直ちに天主の思召に従ひ司教の位を受ける爲にネオセザレに赴きました。

途中、ある夜大雨に出逢つたので雨宿りをする爲に隨員達と共に偶像の禮拜堂に入りました。其處は哀れな偶像教の信者達が、悪魔の意見を聽く爲に集る名高い祠なのです。グレゴリオが入るや否や悪魔は直に消失せました。彼は十字架の印をして日課を誦へ天主を讚美しつゝ夜を過しました。雨が晴れたので翌日そこを出發して旅を續けたのですが、一方禮拜堂の祭司はいつもの通り悪魔の意見を聽く爲に祈りをしました。所がたゞ「前晚こゝに泊つた客が我等を逐出したから再び入る事が出来ない。」といふ聲だけがきこえたのです。祭司は非常に怒つて一行の跡を追驅け引戻しました。そして裁判所へ訴へ様としたのです。グレゴリオは平氣で「私は天主から悪魔を追出す權利を受けて居る」といひました。祭司は不思議に思ひ、果して悪魔に命する力があれば再び禮拜堂に歸る様に命じて見よと申しました。そこで一枚の紙にグレゴリオは「サタンに命ず歸れ。」と認めて渡しました。祭司は之を祭壇の上に置くに即座に元の通り悪魔が返事をする様になつたので彼は大に感嘆し「悪魔さへも従ふ所の全能なる神を私に知らせて下さい。」と願ひました。そこでキリスト教の教理を彼に説明したのですが、彼は御托身の玄義だけはどうしても信じられないと言ひました。夫れでグレゴリオは、此の玄義を證明するには言葉

だけでは足りない、奇蹟が必要であると云つたので、祭司は早速傍に有つた大きな岩を示しながら『あなたの信仰の力によつて此の岩に、私の謂ふ位置に移る機命じなさい。』と申しました。彼は其通り岩に命じた所が直に岩は宙を飛んで移つたのです。之を見た祭司は全く感服してしまひ、己が今迄の迷信を棄て、偶像に別れ、家族にも離れてグレゴリオに随ひ、後に布教の爲に非常なる助けをしたのであります。

グレゴリオは司教となつた日に眞の教を廣める爲に説教をしました。之を聞いた町の多くの未信者は大に感動して改心する者が續出するのでした。翌日はまた奇蹟を行つて夥多の病人を癒しました。ほどなく信者が急速に殖えてゆきましたので天主堂を建てねばならん様になりました。信者達は潭山の寄附をしたり勞力を惜まらず働いたので立派な聖堂が出来上りました。歴史によりますと聖堂を建てる位置が山と川との間で非常に狭くて皆残念に思つて居りました所が、ある夜グレゴリオ司教は熱心に祈つたのです。すると翌日山の位置が少し移つて聖堂を建てる爲に丁度適當な場所が出来てゐたと云ふ事です。即ちグレゴリオは聖書の『汝等若し芥種ほどの信仰だにあらば此山に向ひて、此處より彼處に移れと云はんに山移らん。』とあるを其儘實際に行はれた譯です。此聖堂は迫害の時にも害を受けず、地震にも破

壊せず石一つ崩れることなく残つたのであります。

グレゴリオ司教はまだ多くの奇蹟を行はれましたが、其中三つ四つだけ述べませう。

ある時二人の兄弟が一つの池の附屬した田畑を家督として譲受けました。所が二人は此の池を共同で有つよりも各々自分の有にしたかつたのです。ために互に争をはじめ遂に司教の意見を伺ひに來ました。司教は色々と和睦させ様として骨折りましたが、どちらも譲らず各々の權利を主張し、つひに武力に訴へて解決しようと鬭争の準備にかゝりました。司教は此の争ひに血を流すことを悲んで前の晩に天主にお祈りしました。すると其池の水が夜中すつかり涸れてしまつたのであります。

又、アルメニヤの山から出るコリといふ川がネオセザレ市の側を流れてゐます。冬になると時として洪水を起して附近の麥畑に浸水し、家を倒し、羊を失ひ、大きな害に悩まされて居りました。グレゴリオ司教は住民達を氣の毒に思ひ、川の側に行つて其岸に自分の杖を突き水に向つて『天主の御名によつて命ず、水は決して此境を越ゆべからず』と命じました。此時から全く洪水は起らなくなつたのであります。そして突差した杖は根が生えて成長し大木になりました。

また、二五〇年デシオ皇帝の迫害の時でした、司教は信者達に逃げる様に勧め、自分も附近の山に遁

れました。逃げ遅れた数名の信者は勇敢にも殉教致しました。迫害が歇んで司教は管轄内の信者を訪問し色々の規則を立て弊害を矯し、殉教者を尊ぶ爲の祝日を定めたのです。所が當時ネオセザレ市は風紀が頹敗し市民は歡樂に酔うて居りまして、ある偶像教のお祭の日に大勢の未信者が芝居を見る爲に一つの劇場に集つたのですが満員で押寄せた人々を到底全部入場させる事が出来ませんでした。そこで世話人達は『ジュピテールよ(彼等が信じて居る偶像の神)場所を與へよ。』と叫びました。之を聞いた司教は劇場に人を遣して言はせました。『汝等が望んでゐるよりも、もつと廣い場所が出来ろ。』と。數日後恐ろしいペストが流行し出して多數の市民が斃れました。是天主はネオセザレの墮落をお誠になつたのでせう。司教は熱心に祈つた結果惡疫は歇んだので之を知つた夥多の未信者は改心をしたのであります。

聖バジリオは、グレゴリオに就て次の様に謂ひました。『彼は使徒達と豫言者達の精神を有つてゐた。即ちキリストの教訓を完全に守り、信心の務めを果す時には深い敬虔の態度を顯し、淡泊と慎みを以て語り、偽と眞理に背く事を非常に嫌ひ、妬みと傲慢を知らず、愛徳に背き他人の名譽を傷ける様な言動を爲すが如きは彼の忍び得ざる所であつて、常に沈着にして怒る事なく、苦い言葉さへ發することは

なかつた。』と。

聖グレゴリオは二七〇年十一月十七日に死なれたのですが、死が近づいた時側の人に向つて『今ネオセザレに何人の未信者があるかと訊ねました。十七人ありますと答へたので聖人は涙を流し、目を天に上げ、自分の受持つてゐる此町の人々全部を改心させること出来なかつたのを謝すると共に、曾て司教になつた時十七人の信者より無かつたのが今は反對になつた事を深く感謝し、且つ信者の爲に益々その信仰を強め彼等を保護せられんことを祈り、また残る未信者の爲に改心の恵みを祈り求められたのであります。そして息絶える前に當つて『私を葬るに特別の場所を避ばず一般信者と同一墓に葬つて貰ひたい。私は過ぎゆく旅人の如くに地上に生活をしたのであるから死後も我名を地上に止めたくない。たゞ私は此世のすべての物に對する愛着から離れて居つたと云ふことだけを人々に知らせる事を望む。』と申されました。聖人は此の感すべき美しい言葉を遺してその靈魂を天主の御手に返されたのであります。

十一月十八日 (降生後三〇三年死)

聖ロマノ補祭殉教者

聖ロマノはパレスチナに生まれました。幼少の頃からカトリックの雰圍氣の中に育てられ、成長するにつれて徳の勝れた立派な青年となり雄辯家でありました。彼はセザレの教會で補祭の務を忠實に果して居りました。

チオクレシヤノ皇帝が、公教信者迫害の最初の布令を發した時に、ロマノはアンチオキヤに居りました。其時の布令には『キリスト教を棄てざる者は生くるを許さず。』といふ峻嚴なものであつたので、多くの未信者は信者で無い事を證する爲に偶像禮拜堂に集つて居りました。また信者中に生温い者は恐れて信仰を棄てるのも可なりあつたので、ロマノは此の狀態を非常に悲しみ歎き、信仰の弱い信者や苦しみを受けるのを恐れて居る信者達を聖堂に集めて、キリストの教を棄てるのは、つまり神を棄てるのであつて最も恐ろしい禍であることを雄辯を振つて陳べ、天主に對する愛熱を彼等の心に燃えさす様に

努めました。

アンチオキヤの知事アスケレビヤドは、信者等が今聖堂に集つて居るから丁度よい機會であると思ひ一隊の兵を遣して『キリスト教を棄て偶像を拜禮し之に獻物をせよ、若し聽入れざる時は聖堂と共に滅すべし』と告げさせたのです。ロマノは兵隊の近づくのを知つて信者達に向ひ『今迫害者が武器を以て近寄つて來た、皆さんは怖れてはなりません、今迄犯した罪を償ふに最もよい時だと思ひ公けに信仰を顯はし、そして苦しみを甘んじて耐忍ぶを以て罪を償ひなさい。』と勵ませました。そこで老も若きも幼子も皆一致して、聖堂を汚さすよりも生命を棄る決心をしたのです。兵士等は御堂に侵入しようと押寄せましたが此の生命にかけての防禦を、どうしても破る事ができませんでした。兵士は此の次第を報告しましたので知事は怒つて『之はロマノが信者を煽動したからである。よつて彼を捕縛せよ。』と命じました。

兵隊が捕縛に向ふと、ロマノは待つておりましたとばかり自ら進んで其の前に走り出で、速かに知事の前に連れ行く様願ふのです。彼は一刻も早く殉教の恵みを受けたいと思つておりましたから勇みに勇んで兵隊よりも先に進み、裁判所に第一着に到着しました。番兵は知らずに『ロマノは何處か』と訊ねまし

た。彼はにっこり笑ひながら『ロマノは私である。』と答へて驚かしたのでありました。

聽て知事をはじめ裁判官等居列ぶ前に牽き出されて訊問がはじまります。知事は言葉荒々しく『貴様は多數の人民を煽動して皇帝の命令に背かした不届な奴じや、汝の行爲は正に皇帝に對する叛逆である汝と共に背いた奴等も悉く罰する筈であるが、彼等を咬かした汝は彼等よりも先に嚴罰に處せねばならぬ。』と申しました。ロマノは自分の深く愛する信者に代つて犠牲になるのを大なる名譽とし、また血を流すを以て自分の誇いた真理の種を播すのであるから喜びに充ちつゝ『私は如何なる責苦を受けても喜んで之を耐忍ぶ。』と答へたのです。

そこで知事は大に怒りロマノを鐵の簀の上に登らせ雁爪(鐵で造つた猛鳥の爪の様な責道具)で肉を搔撈る様に命じたのです。ロマノは華族の身分でしたから、國法に従ふと罰する場合に酷い罰を加へることができないのであります。しかし知事は憤怒のあまり目が暗んでおましたから貴族である事に氣付かず前の様な罰を命じたのでせう。そこで刑吏等はロマノの身分を告げましたので、止むなく前の命令を取消しましたが、それは丁度鷲が折角獲た獲物を放した時前にも増して猛然と再び飛びかゝる用意の瞬間の様なものであります。『よし、華族ならばそれにふさはしい罰を與へてやらう。』と。こんど

は鐵のついた鞭を以て打つ事を命じました。ロマノはいくら甚く打たれてもよく耐忍び頭を上げて『天主に仕へ天主の爲に苦しみを受ける……之に勝る名譽はない。』と恐れずに申しました。知事は之を聞くに益々怒り色々變つた責に逢せたのです。ロマノはどんなに扱はれても少しも不平を洩さず天主の佑助を求め、イエズス・キリストの神なる事を宣言して『キリストの掟に背く如何なる命令にも従ふ事は出來ない。』と、きつぱり言放ちました。知事は之は自分を侮辱するものであるとして、前に云つた鐵の簀の上に登らせ雁爪で搔撈らせました。彼は斯ういふ酷い苦しみを受けても心の平和を失はず、却つて喜びに満され、その流れる血潮を見て裁判官に感謝して謂ふに『私はキリストの教を宣傳するにたゞ一つの口よりないのを遺憾に思つてゐたが、幸にも無數の傷の口ができ、そこより流るゝ鮮血は幾千萬語の言葉となつて宣傳することができるようになつたのを悦ぶ、天主讚美せられかし。』と。

ロマノはいくら苛責を受けても一向平氣で疲れもせずすゝ元氣です。却つて刑吏等は疲れはてゝ大汗を流し氣息奄々の有様であるのも可笑しく、彼等は遂にロマノの忍耐に負けて知事に休息を與へられん事を願ひました。ロマノは心に満ちあふるゝ喜悅が自然顔に現はれ如何にも嬉しさに見えるに引きかへ、知事は反對に憂色深く不快な面色をして一體どうしたら鬱憤を晴すことが出来るかと焦燥るば

かりです。刑吏の休息中に思付いたのは烙刑に處することでした。ロマノは定めし驚くだらうと思つて申渡すと、却つて喜び怖れず其處に居る刑吏や其他の者に向ひ盛んに公教を宣べるのでした。忍苦の中に血を流しながら眞剣に説くのですから何より雄辯である、聴く者をして感動させずには措かないのでした。しかし公教の奥深い妙理を説き聞かせても、それは丁度豚に寶玉を與へる様なもので彼等に解らないから玄義に關する話は致しませんでした。

舊約聖書に『天主は幼子等より讚美を受く』とある句を思出し、ロマノは知事に向つて若し私の言葉を疑ふならば一人の子供を呼出して下さい、彼はきつと正邪の判断をするから』と申しましたので知事は之を許可して附近の大勢の子供を呼集め、その中から七才になるバルラスといふ少年を選びました。ロマノは彼に向つて『數千の神を拜むのと一體の神を拜むのとどちらが正しいか』と質問を試みました。知事をはじめ裁判官等は此の少年の口から如何なる答が出るかと固唾を呑んで注意して居ります。少年は微笑ながら『唯一つの眞の神を拜む外、他の神を拜んではなりません』と答へたのです。知事は赫と怒り、子供までが我を嘲弄するかとばかり彼に向ひ『お前は誰に教へてもらつたか。』バルラスは『お母さんに教へてもらひました、そしてお母さんは眞の神様から教へてもらつたのです』と。知事は彼の母

を連れ來ることを命じ、母の面前に於てバルラスを裸にし責道具の上のせ、骨も碎けとばかり血だらけになるまで打叩かせました。之を觀てゐた他の子供の母達は、酷い知事の仕打を呪ふのでした。所がバルラスの母は我子の憫然な姿を見て一時は胸を痛めました。氣を取り直して至極落着き高尚な喜びを面に現はしつゝ『私の残念に思ふのはたゞ一つ、マカベの様に七人の子供を有つてゐたら悉く天主に捧げようものを、しかし一人よりないから喜んで彼を捧げませう』と。またバルラスに向ひ『愛する子供よ、その尊い犠牲によつて天主様はお前に無上の榮を與へて下さるのです。同時に母もその榮を分けてもらふ事ができるのです』と云つて感謝しました。バルラスは苦しみの中から聲を上げて渴きをうつたへたので母は心配して『我子よ、間もなく永遠の生命を與へる活きた水の泉に飲むことができるから辛抱なさい。今はたゞ主イエズス・キリストを見たいといふ希望の渴きの外、そなたの心を充たすものはない筈である』と云つて勵ませたのです。知事は僅か七才の少年に負けるのを恥かしく思ひ、此處より早く立退かせる爲牢舎に投込み、またロマノをますます責める様に命じましたから、刑吏等はまた新らしい傷を所々に負せるのでした。しかし彼は平氣で責人等の意氣地なさを嗤ひ、もつと苦しめよとばかり平然として居ります。知事は遂に斷然烙刑に處する事を命じました。ロマノは裁判官に向ひ『私

が眞の教の爲に死ぬのは此上もない名譽である。しかし神の代理者なる私の複讐は間もなく汝を主キリストに上告するであらう。」と申しました。

斯てロマノは火刑場へと牽きゆかれましたが、バルラス少年は斬首の刑に處せられる事となり、最後の別れを爲すべく母と共にロマノの前に來ました。ロマノは此の可憐なる少年の固い信仰と勇氣に感じ入り、熱涙をしばりつゝ、熱い接吻をなし、懇に慰めを與へ、「愛するバルラスよ、また天國で……。」と云つて別れを告げ責人に渡しました。母もまた、たゞ一人の愛らしい我子を涙を呑んでいさぎよく渡しました。

刑吏等は無慘にも此の幼い無邪氣な少年の心臓に劍を突刺し、そして首を刎ねたのであります。母は側でたえず天主を讚美し、冠布を以てその滴り落つる血潮を受けたのであります。斯して感すべきバルラス少年は殉教の榮冠を得ることになりました。

一方ロマノを烙刑にすべく備へられた猛火は時々注ぐ油によつて其勢ひを増し毒々しい火焰は天に立騰つて居ります。ロマノは之を眺めて「私の爲に備へられた殉教の仕方は火刑ではない。」と云ふや否や天も裂けよとばかり大雷雨となり猛火は忽ち消えてしまひました。知事は此の光景を見ていよゝ猛り

たち「此の魔法使ツ、此上はどうしてくれよう、……首を斬らうか、……しかし首はまた元の通くつて却つて彼に榮とならう……よし良い考へがある。」

直ちにアリストンといふ熟練な醫者は呼出され、彼はロマノの舌を根元から切落す様に命令を受けました。醫者は勇氣を出し左手でロマノの舌を力に任せて充分長く引張り出し、右手のメスを以て根元からブツリと切落したのです。口から迷はる血潮を見てロマノは、王の王なるキリストと共に大なる榮に入る時の近づいたのを喜びました。知事は今度こそは成巧したと思ひ、そこに祭壇を設け上に香と炭火とを置きました。所がロマノは息を吹いて火を消したのです。しかし知事は舌を切つたから彼は話が出來なくなつたと思ひ、嘲りながら「さあ言ひたい事をいくらでも喋れ」と謂ひました。舌が無いにも拘らず「キリストの教を宣べるに舌はいらない」と答へたので皆驚き顔を見合せて呆れてゐる間に大演説を始めました。其の聲は未だ會て誰も聞いた事がないほど美しい朗かな聲で、聖靈自らあるひはキリスト自ら語り給ふのでないかと思はれるのであります。此の明かな奇蹟を見て知事は改心するだらうと思ひの外ますます激怒し、これはまた例の魔法によつて醫者は瞞されて舌を切らなかつたのだらうと疑ひました。醫者は疑ふならば手で觸つて調べて下さい、あの通り無いではありませんかと申します。

知事はあの血は本當の血だらうかとまだ疑ひが晴れません。ロマノは莊重な言葉で「之は本當の私の血である、私は今から沈黙を守る。最早苦しみの終りが近づいた。此の苦しみの戦ひに勝利を得、間もなく天國へ凱旋の名譽を擔ひ、殉教の榮冠を受ける事が出来る。」と最後の言葉を遺しました。

知事は侮辱を加へた彼を牢獄に投ぜよと命じ、刑吏は引立しました。ロマノは全身の血をほとんど流し盡したので歩行にたへかねてゐるのを無理にひきづる様にして薄暗い牢舎に入れました。此處に數日間苦しみのうちに天主の御召を待てゐましたが、ある夜偶像教のお祭で世間が騒いでゐる最中に入口が開いて獄卒が入り來り遂にロマノを絞殺して丁ひました。

斯の如くして聖人のその美しい靈魂は肉身から離れ天國の殉教者の榮ある列に加へられたのであります。時は三〇三年十一月十八日、其名はアンチオキヤの信者に尊ばれ崇敬の的になつて居ります。聖ヨハネ金口は聖ロマノについて立派な頌徳演説を遺したのをはじめ、後世多くの人々から雄辯を以てその徳を稱へられ、詩に謳はれ、樂器に奏でられて天國に榮を受けるばかりでなく此世に於ても不朽の譽れある名を止めて居るのであります。

此聖人は實に珍らしい殉教を遂げられたのであつて、如何に苛責を受けても苦しみの中から絶えず天

主を讚美し、眞の教を宣べて止まないのでした。聖人は舌が無くても斯の通りでしたが我々はどうか、立派な舌が有りながら何故人々に救靈を得させる爲に眞の教を宣べるのを躊躇するのでせうか、此點大に我々反省して聖人に學ぶ所がなくてはなりません。

十一月十九日 (降生後一二〇七年生 一二三一年死)

ハンガリヤの聖エリザベト寡婦

茲に語らうとする傳はハンガリヤ國王の王女であつて、榮耀榮華の頂きに生活することの出来る身分でありながら、最も卑賤いドン底に落ちて悲惨な生活を送つた聖女エリザベトの事蹟であります。彼は僅か二十四年間此世に居つただけであります。その行ひは總ての子供、許嫁、妻、母、寡婦、修道女、富者、貧者の模範として尊ばれて居ります。彼はその生涯中平和な時にも艱難な時にも決して犠牲的精神を失ひませんでした。

彼の父は信心深いハンガリヤ國王アンドレア第二世でありまして、エリザベトは千二百〇七年に其宮

殿の中に呱呱の聲を上げ、そしてすぐに洗禮を授かつたのでありますが、其式はいと莊嚴にまた華美に行はれました。彼は三歳の時から早や天主様から特別に恵まれてゐることが現はれ、信仰と愛の心がすでに芽を出して居りまして、貧しい者を見ると深い同情を表して之を憐むのでありました。不思議なことに當時國は亂れて、國中何となく騒がしく、國民は不安のうちに日を送つてゐたのでありますが、彼が生れた時から急に戦争は戢り、内亂は靜まり、世に彌蔓つてゐた罪ある惡習が改まる様になつたのです。

天主様は時として一國の人民を徳に導く爲に一人の聖人を送り給ふことがあるのです。我々は天主様によく祈つて多くの聖人が現れるやうにしたならば、必ず此世を腐敗から救うて下さるに違ひないのであります。

エリザベトが生れた時、或る大學者があつて、大名達の集まつてゐる席上で斯う申しました。「私は一つの喜ばしい事をお知らせせしませう、私はハンガリヤ國から一つの美しい星が現はれたのを見ました。その星はやがて全世界に光を放つてあります。即ち昨夜國王に一人の王女が生れ、その王女は後にチユーレンズの王子と結婚して聖女となり、公教會の飾りとなる筈であります」と。果して後日この學者

の豫言の通りになりました。

エリザベトは其頃の風習に従つて四才の時チユーレンズに連れ行かれ、其國の王子である十一歳のルイと盛大な許嫁の式が行はれ、其時からルイの御殿に生活することになりました。成長するに従うて其靈魂に聖寵の作用が現はれてまゐり、目や耳を樂ませる遊びに耽つたり、身を飾つたりすることを嫌ひ、宮殿の中に色々ある樂しい遊びを退けて、黙想や祈りに心を引かされて居りました。時々宮殿内の聖堂に行つて聖體の御前に祈つたり黙想することを無上の樂みとして居つたのであります。又たび／＼小さい友達を墓地に連れて行つて彼等に語つて謂ふのに「私達もいつか此通り塵埃となることを忘れてはなりません。此處に葬られて居る者は、皆以前私達のやうに此世に生きて居つたのです。私達も後日此通りに死なねばならぬのです」と。そして一同に跪かせて、死者の爲に次の様な祈りを捧げて居りました。「イエズス様、あなたの痛ましい御死去の功力と聖母マリア様のお傳禮によつて、此處に眠つて居る死人の靈魂達を助けて下さい。また、あなたの五つの御傷の功力によつて私達をも助けて下さい」と。彼の愛徳は實際に極に達して居つたと謂てよいほどで、自分の色々の所有物は勿論、食物までも減らして貧しい人達に施すのであります。また毎日些細な言葉や行ひに至るまで愛徳に背かないやうによ

く注意をし、自分の意志をすて、いつも己に勝つ様にとめ、犠牲に捧げて居りました。友達と遊んで勝負ごとに勝つて喜びを感じた時は、すぐに其喜びを抑へて「イエズス様、私はこの遊びで愉快を感じて居ります。これをあなたに捧げます」と。

エリザベトを非常に可愛がつてゐた許嫁けルイの父は、彼の九歳の時死去致しました。其時ルイはまだ若年で父の後を承けて領地を治める大任を継ぐ事が出来ませんでしたから、母のソフィヤが後見をして居りました。ソフィヤはエリザベトが小さいにも拘らず、あまり信心深い行ひをするので之を嫌ひ、たび／＼咎めるのでした。ある年の聖母被昇天の祝日に、ソフィヤは王女達に向ひ「今日は被昇天の祝日であるから、町の聖母の聖堂へ参詣しよう、皆一番美しい服を着て金の冠をつけなさい」と。王女達は喜んで準備をしました。エリザベトも皆のする通りに身を整へて従うて行きました。そしてお聖堂へ着くと一同大十字架の前に頭を下げて禮をしました。十字架を見たエリザベトは直ちに冠を取つて地に平伏して拜禮をしたのです。之を見たソフィヤは彼に向つて怖い顔をしながら「エリザベトよ、又變な態度をします。王様の娘は王様の娘らしくシヤンと立て居らねばなりません、そのやうな全でお婆さんのやうに腰をかゞめて何事です。冠が重たいのか、地面に頭をつけたのは何のためですか」と。

エリザベトは謙つて答へました「どうか赦して下さい、私は今日の前に憐み深い我神、我王なるイエズス様が痛々しい茨の冠をかぶつておいでになるのを見ると、私の様なつまらぬものが此美麗な冠をかぶつて居るのが何だかイエズス様を輕蔑して居るやうな気がしてならないのです」と。彼は斯ういふ心がけて居りましたから、毎時も十字架の前へ出る時は冠を取るのでありました。

エリザベトは斯様に信心深く、殊に聖體に對する熱愛は非常なものでありました。したがつて宮殿内で贅澤な生活をするよりも、祈りや默想するのを好み、また貧しい者を憐む心が深いでしたから、之等の者を助けるのが彼にとつて樂しみであつたのです。ソフィヤやルイの姉のアグネスや、また重臣達は皆世間的の精神を有つてゐましたからエリザベトの行ひが氣に入らないので、其信心を嘲つていじめるのでありました。彼は常に不思議なほどの忍耐を以てよくこらへて居りました。周囲の人達は斯ういふ娘は宮殿に生活するよりも修道院の生活の方が適してゐるから、ルイの妃として迎へるのは面白くないと謂つて極力引離す様にとめるのでありました。しかしルイは正しい人でしたから中々彼等に從はず、ある時斯う申しました「向ふの山を見よ、あの山よりも尙大きな黄金を與へても決して私の心は變らない」と。ルイは勝れて聰明な人でありましたから、母や姉や其他世間的放逸な生活を愛する者は

エリザベトのやうな信心で徳の道を歩む者を嫌ふといふ事をよく分つてゐましたから、自分の考へを明瞭に言ひ表したのであります。

一二二〇年に結婚式を擧げて後、一人の徳のすぐれたコンラードと云ふ所の神父を教導師として選びましたが、それ以來エリザベトは益々世間のすべてのものから離れて、天主様とよく一致して完徳の奥深く進むやうになりました。さうして我々人類の爲に貧しい者となつて苦みと恥辱とを受け給うたイエズス様のことを默想して感謝し、自分も之に似た者になりたいと謂ふはげしい望を抱くやうになると同時に、すべての虚榮的なことや宮殿の榮耀榮華な生活を何よりも嫌うて居りました。夫ルイとの間は非常に親密で、ルイが何處へ旅をするにも之に随ひ、いつも一體のやうに平和な有様に生活し、丁度イエズス・キリストを教會の頭として尊ぶ如く夫を自分の頭としてよく服従を守つて居りました。

ルイもまた勝れた人物で、エリザベトの様な徳の勝れた者を持つに誠にふさはしい人でありました。その稟として男らしい容姿もさること乍ら、その靈魂の美しさはそれにも増して立派な模範的青年でありました。彼が世間的の快樂に流れず、罪惡の行ひに染まなかつたのは強い意志を持つてゐたからであります。ルイは十六歳にして豊かな領地の主となり其地位として榮耀榮華の出来る身分であり、且つ周圍

には奸臣などがあつて兎角惡に誘はれる機會が多いにも拘らず、彼等の阿諛に耳を藉さず、天主様に對する義務を忠實に果し、また妻に對する愛と親切も深く、洵にカトリックの良き君主でありました。また正義を重んずる事が深かつたので、臣下に不正な者があると厳しく罰し、若し人民を壓迫したり困窮者に對して無慈悲な行爲をする者があつたならば之を斥けるなど、一言で謂へば彼は信心と清淨潔白と正義との三つの徳を具へてゐたのであります。

ルイはエリザベトが祈りや默想をし、また善業をすることに對して全く自由を與へてゐたのみならず完徳の道を勵む爲には互に力を協せて居りました。エリザベトは斯ういふ徳ある夫と結婚する事が出来た大きなお恵みを想へて天主様に絶えず感謝して居りましたが、しかし自分が此地上に置かれたのは苦みを耐え忍び罪を償ひ、天國の爲に功を立てる爲であることを決して一日も忘れた日はありません。それで常に美しい着物の下には表衣を着、毎金曜日と四旬節中には毎日己が身を鞭打つなど色々の苦業をするのでしたが、いつも其顔には喜ばし氣な微笑が現れて居りました。

貧しい人達に對する同情心が厚かつたので、自分の所有物を施し、時として着てゐる着物を脱いで與へたことさへありました。ある日貧しい百姓が來てエリザベトに訴へて謂ふのに『昨日家來の方が宅の

家畜を掠めてゆかれまされたので困つて居ります」と。エリザベトは斯様な貧困者が生活の資として居る物を掠め取るとは不埒な者であると思ひ、大に同情して夫に告げ飽まで調べてもらひ、遂に盗まれた物を返したことがありました。

不幸な者を憐む中にも特に癩病者に對しては懇切を盡して居りました。ある日身體腐れ爛れた見るもあはれな癩病人に出逢うたので、甚く憫んで館に連れ歸へり、自ら病人の髪の毛を洗ひ傷に手當をして懇に世話をしてやりました。ある年の聖木曜日(木曜)の事でした、多くの癩病人を集めて自ら其足と手を洗つてやり、その前に跪いて爛れた傷に接吻をしました。また或時夫の不在中例の通り貧しい者に施し病人を慰めて、歸りに一人の癩病人を連歸へり自分の寢臺に寝させて置きました。母のソフィヤは之を見て驚き、常にエリザベトのする事に懐かず思つてゐたのですから、ルイが歸るとすぐに此有様を告げて寢臺の側に連で行き、此通りですと蒲團を勢ひ荒くめくると、これは意外、癩病者の代りに十字架に釘付けられたイエズス様が寝んでおいでになるのです。

其後エリザベトはフランシスコ會の第三會に屬する一つの修道院を建て、此處に修道者を招き天主様の光榮の爲に力を盡したのであります。

彼は清貧を尊び、此世のすべての物から心を引離して専ら天主様の光榮となる事ばかりに心を傾けてゐましたから、天主様は彼の徳に報いる爲に奇蹟を行ひ給ふことが屢々あつたのです。ある日各地の名達が集つて會議が開かれた時、エリザベトは夫と共に議場へ出席せねばならぬのであります。しかしエリザベトは貧しい者と同様な生活を送つてゐましたから、斯ういふ席へ出るに適當な服が無かつたのです。ルイは彼の側に來り心配な顔をして居ります。エリザベトは却つて夫を氣の毒に思ひ「どうか私の爲に心配せずにおいて下さい、私は美麗な服を着て名譽とする考はありません。席上で私は一同にお断りをしてあらゆる親切を盡し快活にお歡待をしますから、却つて美しい服を着るよりも一同に良い感じを與へるに違ひないと思ひます」と。さう謂てすぐに跪き天主様にお助けを祈り、やがて立上り一緒に會場へ出ようとすると、彼はいつの間にか金銀寶玉で飾つた美麗な服を纏うて居るので、ルイは此奇蹟を見て驚きました。彼は微笑んで「御覽の通り主はお望みなさる時いつでも不思議を行ひ給ふことがお出来になります」と。

茲にエリザベトの上に大なる試練の時が參りました。即ち當時起つた異端者に對して十字軍を編成するに當り、カトリックの君主達は教皇の意に従うて立ちました。ルイ王は眞先に進發することになつた

のです。エリザベトは此時の別れを非常に悲み歎きましたか、しかし天主様の攝理であるから致し方がないとして、夫に向ひ「私は天主様の思召に逆うて、あなたを引止めたくはありません、思召を完全に行はれるやうに祈ります」と。やがてルイ王は涙のうちに己を勵まして出征の途に就きました。そして聖地へ向ふ途中シリ島に止まつてゐた時、あはれ病魔の襲ふ所となつて惜くも世を去つたのであります。此訃報が届いた時エリザベトは大に悲みました。彼には四人の子供があつたので其頭たるエルマンが當然父の後を繼ぐ筈であつたのに、叔父のアンリーが之を排斥して無法にもエリザベトと四人の王子に一物も與へず哀にも全部追出して終つたのです。彼はハンガリー國王の王女に生れ、サクソニーの王妃として高貴の身であり乍ら、今は四人のいたいな子供をかへて纖弱い身を乞食同様に路傍に彷徨せねばならなくなつたのです。時恰も寒風吹荒ぶ冬の真中で、生後二ヶ月の乳香子を抱いて嶮しい路をたどりつゝ町へ下つて行く姿は實に哀れな有様でありました。町の人々の多くはエリザベトに大恩を受けてゐたのでありますが、今はアンリーの権力に恐れて誰一人助るものもないのです。自ら探しあつた豚小屋に暫く住ひをしました。此様な有様のうちに彼は、昔主イエズス様が厩の中にお生れになつた時の事を偲び、自分もいくらか似た有様であるのを考へて涙を拭ひ、心に云ひ知れぬ喜悅を覚えるのであります。

でありました。

ある日フランシスコ會修道院に往き、聖體のイエズス様の御前に平伏して、自分もイエズス様のやうに貧窮と恥辱を受け、謙遜な生活をするやうに選ばれたことを深く感謝致しました。しかし可愛い子供達が餓死しようとするのを見ては耐へられない辛さを感じるのであります。彼に對して同情を寄せるものは誰もないばかりか、以前彼の親切を受けた一人の老婆はエリザベトが川を渡る時橋から突落したのであります。しかし彼はほゞえみながら之は今迄榮華に生活した報に違ひないと思つて、決して人を怨んだり不平を言つたりした事はありませんでした。

エリザベトが不幸な境遇に陥つたことを聞いた親戚、殊に修道院長をしてゐる叔母のマチルダやベネルの司教である叔父などは捨て置けないので交るゝ親子五人の者を引取て世話をする事になりました。

斯くするうちにフレデリック第二世皇帝と再び結婚するやうに勧められましたが、エリザベトは之を斷つて其後天主様のみに全く身を捧げる覺悟を致しました。

出征中異國で病没したルイの遺物を持歸つた臣下の者はエリザベトが追出されたことを知り、大に怒

つてアンリーと談判の結果彼はその非を悟り、エリザベトを又元通りルイ家に戻すこととなり、長子エルマンにルイの後を継がせ、アンリーは其後見をする事になりました。それ以來アンリーはエリザベトに親切を盡す様になり信心と善業に身を委ねることを快く許しました。エリザベトは聖クララ會の服を着て死ぬるまで修道女と同じ生活をして其生涯を送つたのであります。また二人の女の子は修道院に入り、一人はブラバンBrabantの領主の許嫁となりました。其時彼はまだ二十二歳の若い寡婦でありましたが丁度聖パウロの言つたやうに「生きるのは私ではない、私の中にイエズスが生き給ふのである」と云ふ事が出来るほど徳の道に深く進んで居つたのであります。前に仕へてゐた二人の忠實な侍女に代つて意地の悪い者等に取圍まれ始終侮り辱められて居りましたが、如何なる恥辱でも喜び甘んじて受けて居りました。

彼は天主様の聖意に適うた者でありましたから奇蹟を行ふ恵みを受けて居りました。ある日彼が病にかゝつて臥してゐた時、其口から妙なる讚美歌を歌うてゐるのを一人の友達が聴きました。大變美しい歌でしたねと申しますと、彼は不思議らしい顔をして、何か聞えましたかと反問しながら謂ふのに『今一羽の美しい小鳥が私と壁とのまんなか飛んで来てうるはしい歌を聞かせてくれましたから自と心が

愉快になつて、私も歌はねばならん様になつたのです。そしてこの小鳥は三日の中に私が死ぬと告げました。これは多分守護の天使であつたのでせう』と。果してエリザベトは善い覺悟をして悔悛、聖體の兩秘蹟を受け『聖母マリア様が私を迎ひに来て下さつた……イエズス様は今私を永遠の婚筵に招いて下さる、嬉しい〜』と謂ひつゝ其靈魂を天主様の御手に返されました。時は一二三一年十一月十九日の夜でありました。

フランシスコ會の修道女達は、エリザベトの死骸を修院の聖堂に運び、此處に四日間置かれたのであります。其間死骸から不思議な佳き香が發してゐました。そして此聖堂の中に葬られたのであります。其後此處に来て聖女の傳禱を祈り、盲目、つんぼ、其他色々の病人が多數全快の恵みを受けたのであります。間もなくこの聖堂の代りに莊麗な天主堂が建立され、そこに聖女の遺物が納められました。

十一月二十日 (降生後 一一二七年生 一一二二年死)

聖フェリクス・デ・ワロア (三位一體の律修會創立者)

萬事について行届いた天主様の攝理は、何時の時代に於ても必要な場合に、聖意に應じた任務を行はすべく適當な聖人を送り給ふのであります。カトリック教が回々教の爲に迫害を受けてゐた時代に、哀れな状態に陥つてゐた捕虜を救ふ爲に聖ヨハネ・デ・マタ(二月八日参照)と聖フェリクス・デ・ワロアを送り給うたのであります。

フェリクスは一一二七年にフランスの北方の貴族の家に生まれました。父は名高い家柄であるのみならず優れた徳行家として人望のあるお方で、アンリー一世皇帝の孫に當り、フランス皇帝の位に登る希望を有つことのできた身分でありました。しかし天主様は彼の上に他の思召があつたのです。母はフェリ

クスが未だ生れない先きに幻を見て子供の將來の運命を知りました。ある時聖堂の祭壇の下で祈りをして居る間に、いつのほどしか假睡の境に入つたと思ふと、聖母マリアが幼きイエズス様を抱いてゐられるお姿を見、その前に見知らぬ一人の美少年が居るのです。イエズス様は御自分の負うてゐた十字架をとつて其少年に與へられ、少年はにこくと愛嬌のある顔つきをして、恭しく受取つて、其代りに美麗な花束を捧げました。是は如何いふ意味かと頻りに考へてゐると、一人の聖人が現はれて「あなたが今懐胎してゐる子の母となるのは大なる幸福である。そのわけは貴女が今見てゐるあの美少年は貴女の子である。そしてこの子は後日フランスの王冠の代りに十字架を負ふであらう。其十字架は彼一人で負ふのでなく貴女に半分を譲るはずである」と告げました。其時彼の少年は十字架の半分を母に渡したのです。之を受けるや母は驚いてはつと氣がつくと、身は祭壇の下に平伏してゐるのでした。

其事あつて暫し後玉の様な可愛い男の子が生まれました。これぞ即ちフェリクスであります。彼が生れて間もなく其地方に大饑饉が起り餓死する者が相次ぐ有様でありました。母は憐み深い人でしたから餓餓に迫つてゐる夥多の人々を館に招じて豊に施しました。施與を受けに来る者が日に多くなつたので最早食物が盡きて、我が家族の者の食糧にさへ心配せねばならない様になりました。しかし天主様は

御自分を信頼する者を決してお捨てにならないのです。ある日乳母がフェリクスを抱きながら食物を困つて居る人達に配つて居りました。其時乳母はフェリクスの紅葉のやうな可愛い手を取つてパンの上に十字架の印をすると、不思議にも少しだけになつてゐたパンの数が殖えて、數日間續いて貰ひに来る多數の人に配つことが出来たのでありました。乳母はこの奇蹟を見て大に感服し、今度はフェリクスを附近の畑に連れて行つて其處を祝別させました。すると俄かに雲が現れてしとくと慈雨が降り畑を潤しましたので豊作となり、豊に收穫をすることが出来る様になつたのでありました。之によつて小さい無邪気な子供の願ひがどれほど天主様の聖意に叶ふかがよく分るのであります。

兩親は信仰の篤いお方でありましたから、彼の小さい時からキリスト教的教育を施して徳の道に進むやうに導いて居りました。其頃教皇インノセンシヨ第二世は難を避けてフランス國に逃れねばならない事になりましたので、フェリクスの母の兄弟は教皇様にクレビー城を使つていただく事にして此處にお迎へ致しました。フェリクスの母は之を聞いて大に喜び、教皇様を訪問してその足許に平伏し「どうか此小さいフェリクスを祝して下さい」と願ひました。丁度此席に居合せた聖ベルナルドは幼いフェリクスを抱き上げて聖母マリアに献げ「どうか此子を御身の保護の中に加へて下さい」と祈りました。其後

彼は天主様の寵愛を受け益々豊に聖寵を蒙る様になつたのであります。

フェリクスの其性質は温順で、親によく従ひ、又他人に對しても柔和で、特に貧しい者に對する同情心が深いのであります。彼は信心深い兩親の行に倣ひ、またその叔父のチパウの模範に倣うて德行を磨いたのであります。此叔父は國中で一番美しい心の持主で愛徳に富んだ人と謂れてゐました。彼はその甥に當るフェリクスをよく愛し善導して居りました。そして自分の會計係をさせて居つたのであります。ある冬の寒さ厳しい日、二人は連立ち、附近を散歩してゐた時、身には薄い破れ衣を着た見ても哀れな乞食に出遇ひました。乞食は二人にすがりつき「どうぞ私を憐んで下さい、天主様の御名によつてお願い申します」と。そこで慈悲深いチボウは彼を憐み「何がほしいか」と訊ねますと、彼は「貴方の外套を與へて下さい」と願ひました。早速承知して脱いで施しました。そして「まだ欲しい物があるか」乞食「はい、すみませんが貴方の手に光つてゐる寶石入の指輪を下さい」チボウ「よし、まだ欲しい物があるか」乞食「ありますよ、貴方は金持です。私は乞食です。貴方の高いお身分を表すその襟飾をいただけませんか」チボウ「なるほど之はほしに違ひない上げよう、此手袋もほし

たいです』チバウは此時ニヤ／＼と笑ひながら『上げるが、しかし之を取られると私の禿頭が隠せなくなるから人が笑ふだらう』と申しました。斯うして乞食の望む品を何も彼も與へて愉快らしくして居ります。乞食は厚く御禮を言つたと思ふと先程から貰つた物全部を其處に置いたまゝ忽ち何處へか姿を消してしまひました。チバウはあの乞食は天主様から遣はされた天使であつたことを曉りました。其後甥と共に天主様の御名によつて願ふものには施しを断らないといふ願を立てたのであります。

ある日また二人はベルナルドに會ひに行かうとして馬に乗つて出かけました。途中で憫れな癩病人に出遇うたので之を見つけたフェリクスは、ひらりと馬上から下りて病人を慰め様としました。チバウは自分より先きに甥が病人に近づいたのを残念に思ひましたが、すぐに力を協せて慰め助け、附近の家に運んで毎日食物を與へ親切に見舞に行くのであります。所がある日此癩病人は死にました。其時チバウは旅行中で死んだ事を知りませんでしたので、歸へるとすぐに毎時の通り見舞に出かけました。所が不思議にも病人は全快して而も其身體からは眩いほどの光りを放つてゐるのを見たのです。それで『あなたは癩病人でないか』と訊ねました『左様、私です。今私は貴方の恩を謝しに來ました。あなたは私の爲に馬から下りてくださった如く、私は今限りない幸福を受けて居る天國から下りて來ました。有難

う、天國に於て貴下のために祈りませう』と謂つて天國へ歸へりました。チバウは此時大に感じて他人を救助する約束を新に致しました。

此時代には子供はたいてい家庭で教育を受け、成長してから修道院に入つて高等の教育を受けるのが習慣でありましたので、フェリクスは聖ベルナルドの居られるクレルヴォ修道院に入つて學問をするこゝとなりしました。その勉強ぶりといひ、行ひといひ、他の若い學生達の立派な模範となつて居りました。殊に彼の徳の中に優れてゐたのは他人を愛する徳でありました。ある時聖ベルナルドと一緒にシヤルトロ市に往つた時、不圖も大悪人が死刑場へ曳かれてゆくのに出逢ひました。此邊一帶は叔父チバウの領地で、すべての權を叔父が有つてゐますので、フェリクスは彼の死刑囚を何とかして赦してやる様に願ひました。しかしチバウは正義な人でしたから、義に於ても此大悪人を赦すことができない、また赦すにしても彼は善人を苦めるから危険であるとの理由で聽容れませんでした。しかしフェリクスは彼の死刑囚が何んな罪を犯したか知らぬが、若し貴方が彼の生命を助けるならば彼は必と大なる聖人になりますと申しました。それでチバウは甥の徳の勝れてゐるのを知つてゐますから遂に其願を容れて罪人を赦しました。果して此大罪人は己が罪を悔改めてクレルヴォ修道院に入り、祈りと嚴しい苦業とに身を

委ね、數年後に聖人のやうな立派な死を遂げました。

人の一生涯は旅人のやうなもので、路傍の花を摘むことが出来ても同じ所にいつ迄も止まつて居ることができません。目的を達するまで進まなければならぬのです。フェリクスはいつ迄も修道院に居りたいたのでしたが、彼はフランス皇帝の親戚に當るので、或る職務に就く爲に宮殿に入ることを斷ることが出来ませんでした。宮殿に入つてからも立派なキリスト教的武士としての模範を示して居りました。其徳が秀でてゐるために皇帝をはじめ他の高官達からも愛せられ、天使のやうに扱はれ、また多くの奇蹟を行ひましたから人々から敬ひ尊ばれて居りました。ある日競馬會があつた時、家來の一人が落馬して即死したのです。フェリクスは之を見て馳せ寄り、祈りをしてから死骸の手を取つて『三位一體の御名によつて起きよ』と命ずると、死骸は忽ち蘇へつて起き上りフェリクスの側に行つて天主様に感謝しました。

其後、彼の聖地を取還すべく十字軍が組織された時、フェリクスも之に應じ、皇帝に従つて戦地に往き勇敢に戦うたのであります。後にフランスに歸りましたが、彼に取ては此世の榮耀榮華は空しいもので彼を満足させる事は出来ませんでした。其時彼の選んだ道は即ち未だ生れる前に母が見た幻の通

り十字架を負ふことであります。即ち苦業に身を委ねて天主様のみ仕へるといふ決心をしたのです。そこで宮殿を離れて沙漠に行き、其處に於て燃えるやうな愛熱を起し、専ら天主様に仕へ、信仰はますます堅固なものとなつて参りました。しかしまた一方に靈的の烈しい戦ひにも遭つて苦闘をせねばならないのでしたが、天主様の忠實な此僕は靈的の戦ひに勝利を得る方法を知つて居りましたから、益々身を苦しめ、謙つて絶えず熱禱を捧げてゐました。前には莊麗な宮殿に住ひして居りましたが、今は見すばらしい洞窟に身を托して居ります。昔着てゐた美服の代りに今は荒い袈衣を纏うて居ります。以前には王様の食卓についてゐたのが今は苦い草を食べて居ります。丁度昔のアントニオやヒラリヨンの様な生活を送つてゐたのであります。天主様は彼の上に度々奇蹟を行はれ、ある時には日曜日毎に一羽の鴉がパンを持つて来てフェリクスに與へてゐた事もありました。

彼は其處に於て四十年間克己、制慾と戦ひ、苦しい生活を續けました。共時天主様は彼の許にパリイ大學の博士である聖ヨハネ・デ・マタを送られたのであります。どちらとも未だ會うたことのない未知の間であるにも拘らず互に名を呼んで挨拶を致しました。この選抜の二人の間には、懐かしい舊知の如く心を打明けて親密な話が交されました。ヨハネは此沙漠に導かれて來たのは貴方のやうな優れた徳ある

人の指導を受ける爲であると謂ひ、フェリクスはまた精神的に進んだ教訓を受けるために天主様は貴方を遣して私に會はせて下さつたのであると謂つて互に天主様の御恵みを感じたのであります。ヨハネは暫く此處に止まつてフェリクスと同じ様に己を鞭打ち、熱禱を献げ、天主様を讚美して二人は溢るゝ友愛を味ひつゝ生活を續けて居りました。

或日二人は天國の幸福について語つてゐる時、ほど近き泉の側に一匹の白鹿が現はれ、その額には青と赤の二色になつた十字架が畫かれて居るのであります。フェリクスは之は何の意味だらうと頻りに考へてゐますと、ヨハネは自分も先きに之と同じ不思議を見たことを告げましたので、之は必ず天主様が我等二人協力して捕虜贖ひの任務を行ふやうにお選び下さつたことを悟つたのであります。

當時戦争の爲捕虜になつて居つた者は實に可哀相なものでありまして、市場に引出され動物のやうに賣られてアフリカの熱い所で朝から晩まで働かされるのであります。そして働きがにふいとすぐに鞭打を加へ、立つことのできなくなつた者や、又キリスト教を棄てない者は、時として惨酷にも全で魚の料理をするやうに腹を裂いて腸を引張り出し、まだ生きて居る人を鐵棒の先の尖つた柵にひつかけたり、或は焚殺したりするのであります。フェリクスは斯ういふ酷い話を聞いて彼等を救ひたいと云ふ

決心をしたのであります。ヨハネも同じ心であつたので二人共之について相談をして居る時、ある夜夢の中に教皇の許に往けといふ示しを三度も受けたのです。それで少しも躊躇せず洞窟を出て二人一緒にローマをさして出發しました。是より先き教皇インノセンシオ三世は彼等が來るといふ示しを受けて居られました。即ち夢に白衣を着た一位の天使が、青と赤との十字架をかけて、キリスト信者と回教徒の二人の捕虜の上に手を拖うて居るのを御覧になつたのです。それで此二人は天主様から遣されたものと信じ、二人が願ふ所の希望と計畫を嘉して、先きに現はれた天使が着てゐたやうな服を與へ、天主様から與へられた高尚な任務を果すやうに彼等に祝しを與へられたのであります。

それから二人は一端フランスに歸り暫く一緒に生活し、其後別れてヨハネはローマに往き、捕虜贖ひのための修道院を設立し、三位一體の律修會と名付けました。フェリクスは彼の不思議な白鹿の現はれた邊りに同じ會の修道院を設け其院長になりました。

フェリクスの徳を慕うて修道者になる者が續々と集り來り、中にもバリー大學を出た數人の名高い人も弟子として此處に入りました。フェリクスは慈父のやうな愛を以て弟子等をいつくしみ、自分が燃えてゐる其熱心の火を彼等の心にも燃えさすやうにし、また自ら立派な模範を示して天使のやうな清らか

な生活を送らせたのでありました。

度々天主様や聖母マリア、天使達が彼等に現はれたことがあります。之は決して不思議ではありません。天主様の愛に燃えてゐる人に時々斯ういふ恵みを與へられることがあるのです。ある年の聖母御誕生の祝日に當つて納室係りの修道士が、鐘を鳴らすのを忘れて居りました、フェリクスは聖堂に行つて見ると、其處に係りの修道士が美しい光に包まれてゐるのを見ました。もつと不思議なのは澤山な修道士の席には同じ修道服を着けた天使が着席して、聖母マリアが其頭となつて居られるのです。フェリクスが入ると、聖母マリアが讚美歌の初句を歌ひ出され、他の天使は何んともいへぬ美しい聲で唱和するのです。その光景はまるで地上に居るか天國に居るか判らぬほど楽しい心地がして、思はず一緒に聲を合せて天主様を讚美したのであります。此時の出来事を記念するために、三位一體會では聖母御誕生の祝日の夜十二時にミサを立てる許しがあるのです。其後フェリクスはフランスの各所に修道院を設立し、年老いてから自分で働きができないので捕虜贖ひの爲に多くの弟子を遣はして働かせました。

彼は若い間からの刺しい働きと厳しい苦業の爲に年老いるに従ひ疲れが出て病氣に罹り弱つて参りました。天主様は特別の恵みによつて彼に、近い中に世を去らねばならんことをお示しになりましたので

非常に喜んで感謝しましたが、彼がたゞ心配なのは、自分の弟子を孤兒として先立たねばならんことでした。其時聖母マリアは現はれて彼を慰め「我れ汝に代つて彼等の母となるから安心せよ」とお告げになつたので、全く安堵して彌々益々天主様に對する愛熱を燃しながら次のやうに叫びました「私が沙漠に隠遁すべく宮殿を離れた日は幸ひであつた、私が行うた苦業は幸ひであつた、私が流したる涙は幸ひであつた、それらは皆今私を受けんとする天國の幸福の貴い代價である」と。そして十字架に熱い接吻をし、一三二二年十一月四日遂にその靈魂を天主様の御手に返されました。時に御年八十五歳。息絶えると同時に修院の鐘が獨りでに鳴り響くのでした。又同時に聖人は榮えに滿されながらローマに居るヨハネに現はれました。

十一月二十一日

聖マリアの奉獻

信心深い親は、その子供がまだ胎内に居る間から、或は生れて後に天主様に獻げることが忘れないの

です。昔ユデア人の中にも熱心な者は、たゞ精神的の一般の献げだけでは満足せず、生れて後乳離れ頃になると聖殿へ連れて行き、其身を悉く献げてゐました。この特別の奉獻は舊約のサムエルが献げられたのをはじめ其他多くの例があります。

エルザレムの聖殿の中には、献げられた子女達の住居の爲に別の建物が設けられてあつて、ある説によると九十の室があつたさうです。其處には彼の女豫言者アンの様な信心深い婦人がゐて、子女達の監督をし、教育を授け、年齢に應じてそれ／＼ふさはしい手藝即ち聖殿内に使用する裝飾物や祭服などの製作をさせたりして居りました。

斯ういふ風に献げられてゐた子女達は、約そ十五才になつて婚期が近づくと幾らかの献金をして自由に家庭に引取ることが出来るのであります。元來舊約時代は新約の豫表であつて、此奉獻もやはり今日の童貞生活者の象をなしてゐたものであります。其頃天主様は今日のやうに豪勇の殿しい修業をすることを要求されませんでした。しかし新約になつてから天主様は終生童貞の願をたてることをお望みなるのを聖マリアは早くもお悟りになつて居りましたから、御自分の一生涯を天主様にお献げになつたのであります。

聖マリアは其頃の風習に従つて三才の時に父ヨアキンと母アンナに伴はれて聖殿に献げられました。聖マリアは僅かに三才の幼児ではありましたが大人も及ばぬほどの理性を具へてゐられ、その惻愍はその愛くるしい容姿と共に人々から尊ばれ可愛がられ居られました。それも其苦で、彼は救世主の母となるやう天主様からお選びを受け、原罪の汚れを免れて居られましたから、母の胎内に孕つてゐる間から聖寵に満されて、智慧の暗黒の影さへ見ることのできないのです。さう云ふ有様でしたから奉獻の意味などよくお曉りになつてゐたのであります。

聖イエロニモの傳へるところによりますと、その時御両親は種々の献物を携へ、一子マリアを伴うて聖殿に登られました。祭壇は高い所にあつて其處まで行くに十五の階段があります。先づヨアキンとアンナは聖マリアを最初の段の上のせ式服を着せました。聖マリアはいそ／＼として其可愛い身體を自ら祭壇の方に運ばれるので人々は皆驚いて居りました。かくて規則に従ひ奉獻の式が行はれ、御両親は聖マリアを聖殿に残して家に歸つたのであります。此時献げられた聖マリアの身を受ける役を勤めた者は當時の司祭で後に洗者聖ヨハネの親となつたザカリアであつたと傳へられて居ります。聖アンドレアは「世界開闢以來、聖マリアの奉獻に勝つた潔き献物はない、また何人と雖、斯の如く天主様の聖意

に適した宗教的行爲をした者はない」と申しました。

聖殿に入つてからの聖マリアの動靜は實に例へることのできないほど完全な徳に満たされ、その一言一行はどんな些細なことでも天主様の聖意に適はぬことゝてはなく、その潔白の光輝は丁度渺々たる蒼天が地上の煤煙によつて少しも汚されない如く美はしく、その御行は天主様の聖意に適ひ、特に童貞者の完全な龜鑑でありました。毎朝、鶏の鳴く頃になると疾く起き出て聖所に赴き、其處に於て祈りをし詩篇を唱へるのが常でありましたが、格別次の聖句を愛唱してゐられました。

主は、繋がれし者の鎖を解き、

盲目を見えしめ、

倒れし者を起させ、

義人を愛し、

主は萬代までも生き、萬民を統治給ふ。

聖マリアはまた熱心に聖書を研究致されるのでありましたが、聖アンセルモの説によると、聖マリアはヘブレオ語(天主様がモイゼに十誡を授け給うた時の言葉、ヨズエが太陽を止めた時の言葉)に精通

して居られたと云ふことです。また聖殿内には高徳な婦人が居つて童女達の年齢と性質に應じて裁縫、編物、刺繍、染色などを教へ、聖マリアもそれらの手藝を習はれましたが他の者よりも非常に勝れた技術を具へてゐられたので人々は感服して居りました。主に聖殿内の裝飾物や司祭の式服などを製作せられたのであります。

聖イエロニモの謂ふのに「聖マリアの一日は次の通りであつた、朝は鶏鳴時から九時まで祈りと黙想九時から午後三時まで手藝、三時から夕食まで祈りと黙想をし、また律法をよく學び、特にダビドの詩篇を歌ふに熱心で、善業に勵み、童女中最も潔白にして、すべての徳に秀でてゐた」と、色々の傳へを綜合すると、十一才の時父ヨアキンを失はれましたが、其時父の最後の祝しを受ける爲に家に歸られ、間もなく母アンナも世を去られたのであります。

御両親を失つてから聖マリアは終身童貞の願をお立てになりました。舊約では両親が生きて居る間に子供自身で願を立てる事は認められぬことになつて居りまして、若し勝手に願を立てたとしてもモイゼの律法によると無効になるのです。それで聖マリアは御両親が死なつてから公けに願をお立てになつたのであります。

十五才になつた時近親達から結婚するやう勸めを受けたので聖マリアは大に當惑して、終生童貞の願を立てたことを告げて拒絶致されました。しかし天主様は彼の童貞の徳を損はずして其御子の母たらしむべく玄妙な思召を持ておいでになつたので、聖マリアの念願は聞きとゞけられずして結婚せねばならぬ様になりました。此時聖マリアは天主様にその思召を示さるゝやう祈られました所が、「その夫となるべき人は汝の初志を貫通せしめ、之を保護するものである」との默示をお受けになつたのでありました。天主様は大司祭に命じてダビドの子孫に屬する未婚の男子を集めさせ、そして各々聖櫃の中に一つの枝を置かせて其枝に花が咲くならばその枝の持主こそ聖マリアの夫たるべしとお默示があつたのです。斯くして此榮譽ある淨配、童貞の保護者として聖ヨゼフが選ばれたのでありました。聖マリアの奉獻は我々に立派な教訓を與へるのです。即ち我々も聖マリアに倣つて完全に己を天主様に獻げねばならんと云ふことであります。天主様に身を獻げるといふことは最も勝れた行爲ではありませんが、しかし年老いて散り果んとする残りの花を獻げるだけでは足りません、まだ若い若の値打ある潔き身を獻げてこそ天主様の御意に御満足を與へることが出来るのであります。

十一月二十二日 (降生後二二〇〇年生)

聖女セシリア童貞殉教者

公教徒に猛烈な迫害を加へたセブチム・セベル帝の後を承けたアレキサンドル・セベル皇帝は、前帝ほど苛酷ではありませんでした。まだ大迫害の餘焰が消えやらないので、時の教皇ウルバノ一世は、ローマ郊外のセシリアメテルラと云ふ有名な貴族の墓地の附近にある偶像禮拜堂の地下深く掘つて造つた隠れ場に住ひをして居られました。其處に信者も集まれば志願者も訪ねて来て洗禮を受けてゐたのです。しかし何時再び迫害が起るかも知れないので、此場所を絶対秘密にして其入口の附近には、物乞ひに變装した信者が見張りをしながら地下の教皇を訪ね来る者を案内して居りました。たゞ、此處へ訪問して来る人々の中に年若い敬虔な美しい一人の少女がありました。彼女はローマで誰知らぬものもないセシリアと云ふ名高い貴族の娘であつたのです。

セシリアの両親は未信者でありましたが、娘の信仰については自由に委せてゐたので、天性眞面目で

慎まやかな彼女は、キリストの教へを研究して、之ぞ眞の宗教であると曉りましたから、迫害の激しい時であつたにも拘らず洗禮を受けて信者となつたのでありました。

セシリアは貴族の身分であるに拘らず、たゞ一人街頭に出て貧しい者に施しをしたり、度々地下の聖堂へ参拜に出かけて祈りや黙想をして居りました。其頃の信者達は御法度のキリスト教を信する者は死刑になるといふ事をよく承知して悲壯な覺悟のうちに信仰を守つてゐたのです。セシリアも素よりその覺悟をして一日も早く主の御招きにあづかつて血を流すことを望んでゐたので、此世の幸福を求めず、懐にはいつも聖書を抱いて主の御旨を曉るに努め、つひに童貞を守る決心をして願を立てました。主イエズス・キリストもこの愛すべきセシリアの善き志に報ゆる爲に、その守護の天使を視るのお恵みをお與へになりました。この大なる恵みを受けたセシリアは、童貞の願を立てたことが主の聖慮に叶うてゐることを悟り、また守護の天使が自分を護つてゐる事も明かに識ることができたのであります。

所が茲にセシリアにとつて大層困つたことが出来ました。それは當時華胄界にもその名のきこえたワレリアノと云ふ模範的青年があつて、彼はセシリアの氣品高く容姿麗しきを慕うてゐたので、セシリアの兩親に縁談を申込みました。兩親は此上なき良縁であると思つたのでセシリアの意中を知らずに承

諾を與へてしまつたのです。これを聞いたセシリアは大に驚いて、如何にしようかと心を痛めました。最早致し方がありません。彼女は心の中に何か期する所あると見え、兩親の意に従うて約束をしました。そして心に怖れを抱きながらも天主様に對する信頼心をますます強めて精神的戦ひの準備にとりかゝりました。即ち身には絹の美服を纏うてつてもその下には荒い毛衣をつけ、常よりも一層嚴しい大齋をなし、多くの祈禱と犠牲を献げ、心を勵まして結婚式の日を待つて居りました。

やがて調度も整うていよいよ擧式の當日が來ました。何分双方とも門地の高い貴族の事ですから善美をつくした仕度が出来上り、ワレリアノ家の大廣間でいと晴やかに華燭の典は擧げられました。終ると大勢の僕等が手に手に松火を點して新夫婦の爲に新たに邸内に建てられた別館に案内しました。

ワレリアノ家では上下擧つて歡喜の聲に充たされてゐましたが、セシリアはたゞ獨り心の中に天主様とのみ語つてゐたのでありました。新館の玄関にはワレリアノは正装して出迎へてゐます。セシリアは胸の中に天主様を愛する愛と清淨潔白の願望とを秘めて偶像の奴隸となつてゐる者等を以て洗ふために悲愴な覺悟を以て天使に護られながら入りました。いよいよ宴會がはじまる、山海の珍味が運ばれる、何處からともなく奏樂の音がもれてきて興を添へる。しかしセシリアには御馳走も咽喉を通らず

樂の音も耳にはいりません、たゞ心に天主様を讚美して『主よ、私の身も心も清らかに保つて下さ』と一心に念ずるのみでありました。

宴は閉ぢられ、客は去り、新夫婦二人きりとなりました。くさぐさの話を語りはじめられましたが、セシリアは此時容形を改めていと眞面目に嚴かに言葉静かに『親愛なる我が夫よ、私の胸に抱いてゐる一つの秘密を明したいのです。あなたは守つて下さいますか？』

『守りませう』

『そんなら申しますが、實は私は天主様に童貞を守る願をたてゝゐるのです。天使は私を護つて居ります。私の身體は天主様に捧げて天主様の物となつてゐますから、あなたが私をたゞ肉体的の愛を以て愛するならば天使は之を見てあなたを罰して頓死させる筈であります。しかし若し私の童貞を尊んで潔白を保たせて下さるならば天使は私を愛する如くにあなたを愛する筈であります』

ワレリアノは意外な言葉に驚き呆れ、且つ疑ひながら

『和女の言葉を信ずるには、その天使とやらを見せてもらはねばならぬ、其上で果してそれが神の使ひであることが判つたならば、和女の言ふ通りにしやう、しかしその天使と稱する者が若しか和女の隠し

男である事が判つたならば和女と共に斬り棄てゝしまふがよいか』

『あなたが唯一の眞の神、生きた天主を信じて洗禮を受けるならば、あなたは私を護つてゐて下さる天使を見ることが出来ませう』

『しかし誰がわたしに洗禮を授けて清めることができるか』

『私の教へる所へ往きなさい。そこへ往くと貧しい態をした人に出逢ふでせう、彼等は私が救うた人達で、私の秘密の望みをよく知つてゐます。その人に會つたらセシリアからウルバノ老人(教皇)の許に遣はされた者であると告げて案内を請ひなさい。老人はあなたに洗禮を授けて靈魂に新しい衣を着せてくれる筈です、そして歸つたらあなたは天使を見る事ができませう。』

ワレリアノはセシリアの言葉に従つて教へられた所へ往くと果して貧しい人に出會うたので、ウルバノ老人の許へ案内を請ひました。そしてセシリアから聞いた秘密を語ると、老人は大に喜んで天主様に感謝しつゝ祈りを捧げました。

『主よ、潔白なる決心を人の心に起させ給ふイエズスよ、セシリアの心に蒔き給ひし善き種の實を摘取り給へ。善き羊飼なるイエズスよ、御身の雄辯家なる羊セシリアは御身によく仕へました。彼女の夫

なる此ワレリアノがセシリアに初めて會つた時には猛き獅子の様であつたのに、今は柔和羊の如くになりました。どうかますます彼の心を照して造主なる御身を信じ愛せしめ、悪魔を棄てさせ給へ。」と。ウルバノ教皇が祈つてゐる間、その側に一人の白衣の老人が何處からともなく現はれて立つてゐました。これは聖パウロであつたのです。彼は手に金の文字で書いた聖書を持ち、其中の一節を指示しながらワレリアノに向ひ「之を讀め、而して信ぜよ、然らば天使を見るを得るであらう」と。ワレリアノは黙讀すると「神は一、信仰も一、洗禮も一」とあります。ウルバノ教皇は「之を信じますか」と尋ねると、彼は心に大に感じて居りましたから直ぐに信する旨を答へました。そこで洗禮を授かつたのであります。

此間セシリアは自室に籠つて一心に夫のために祈つてゐました。ワレリアノが歸つた時一目見るとすぐにイエズス・キリストの勝利を曉りました。なぜなればワレリアノは身に受洗者の白衣を着け、喜ばし氣な顔をしてゐたからであります。暫く互に心の悦びを語り合つてゐると、美しい天使が現はれました。見ると手に薔薇の冠と百合の冠とを持つて二人の頭の上に戴かせ、そして言ふのに

「我は此花を天の花園から持つて來た。汝等清き心を保てば此花は萎れることなく又香りも失はじ。

ワレリアノよ、汝はセシリアの望みを容れて童貞を守ることを諾ひしにより、イエズス・キリストはその功に報ゆるため汝の願を容給ふ思召である。我はそれを告げんために遣はされたものである。」と。

ワレリアノ答へて

「私にチブルチオと云ふ愛する兄弟があります、彼にも眞の教へを信する様お恵みを與へて下さい。」と。天使は

「その願ひは主の聖慮に叶ふことで汝が望むよりも主はもつと烈しく望み給ふ所である。キリストはセシリアによつて汝の心を得給ひし如く汝によつてチブルチオの心を得給ふべし。」と言つて姿は消えました。

翌朝チブルチオは新夫婦に挨拶のために訪ねて來ました。彼は導かれて部屋に通ると薔薇と百合の馥郁たる香りが鼻を打つて何んともいへない快感をおぼえたので「私は新しい人間になつた様な心持がする」と申しました。ワレリアノは「セシリアと私とは、あなたが未だ見たことのない美しい花冠を持つてゐる、若しあなたが眞の神を信するならば私等の持つてゐるその花を見る事ができるでせう。」と言つて、受洗の新しい熱の籠つた雄辯で眞の教へを説いて偶像を排斥するやう奨めました。セシリ

アも偶像を拜むことの不道理にして且つ眞の神に對する反逆であることを豫言者の言葉を藉りて頰に説きました。チブルチオは耳を傾けて聽いてをりましたが、心に感ずるところがあつたと見えて『私は今迄宗教について盲目であつた。私はキリストの御教へを信する』と決心を表しました。セシリアは大に喜んで『それでこそ貴兄は本當に私の兄妹と呼ぶことができます、一刻も早く洗禮を受けて下さい、洗禮によつてあなたの今迄の總ての罪は悉く赦されるのです。そして天使はあなたに姿を見せて下さるでせう。』と。ワレリアノは早速彼をウルバノ教皇の許へ連れて行き洗禮を授かつて精神は大なる喜びに充たされながら歸りました。七日の後には早や堅振の秘蹟によつて聖靈の賜を豊かに受け、キリストの兵士となりました。そして彼は度々天使と語るの恵みを受けたのであります。

セシリアとワレリアノはチブルチオが靈肉共に眞の兄弟となることができたとを天主様に感謝し、其後三人は心を協せて慈善に力を盡し、貧しい者を救ひ弱い者を助けてゐたのであります。間もなく或る者のために訴へられてワレリアノとチブルチオ兄弟は國禁を犯して邪教を信するといふ罪名のもとに捕へられたのです。そしてキリストの教へを棄てる様迫られました。二人共入信後日尙淺いにも拘らず固い信仰を有つてゐましたから、どんなに責められても恐れることなく斷然キリストの御教を宣言

して教へを棄てないので遂に死刑の宣告を受け斬首せられて殉教致されました。

知事アルマキオは二人の財産を沒收しようとして邸内を搜索させましたが目ぼしい物は何一つ見當りません、それは斯様なこともあらうとセシリアはかねて覺悟してゐましたから家財悉くを貧しい人達に施してしまつたからでした。其時セシリアは自分の導いた二人が先きに殉教の恵みを受けたことを羨ましく思うてゐましたから、役人等に向つて自分も公教信者であることを宣言したので。役人は直に知事に報告しました。しかし知事はセシリアの様な身分の高い者を捕縛すると、ある方面から非難されるかも知れないと思つたので捕へることを躊躇して彼女に國神を拜み献物をする様に勧めるため役人を遣はしました。役人等は彼女の信仰の正しい事を曉つて心の中に彼を尊敬してゐたので、命令を傳へる事を恥かしく思ひましたが知事の命を拒むわけにいかないので命令を果しました。セシリアは彼等の心の中を察して『我が同胞たる貴方等が、知事の宗教に對する無理解を承知しながら不義なる使命を果さざるを得ない立場を哀れに思ふ。しかし私にとつてはイエズス・キリストを宣言することによつて責苦を受けるのを却つて光榮とし喜びとするのです。』と申しました。役人等はセシリアが貴族の身分でありながら死をも怖れない雄々しい決心を見て暗涙を催し、若盛りの美しい彼女に生命を犠牲にするのを惜

んで、表面だけでも知事の命に従ふやうにすゝめました。しかし彼女は答へて『イエズス・キリストのために生命を献げるのは決して若盛りの美しさを犠牲にすることにならない、却つて美しさを新たにするのである。即ち僅かの泥を渡して黄金と替へると同じである。茅屋を渡して宮殿を貰ふのと同様である。私の神たるイエズス・キリストに何かを献げる時には百倍に返した上永遠の幸福の生命を加へて下さる。』と。

役人等はいよ／＼感嘆しました。そして『貴女の様な婢を有つ神様こそ眞の神様であることを信じます。』といつて自分等も洗禮の望みあることを打明けました。セシリアは大層喜んで彼等に向ひ『役所に歸つて知事に、私を死刑にすることを數日間延してもらひたい望みであることを告げて下さい、そして戻つて來たら貴方等に永遠の生命を授けて下さる人に會ふことができる。』と。彼等は知事に復命するために立去りました。

セシリアはウルバノ教皇の許に馳せ往き、自分の生命を棄てる時が近づいた事を知らせ、尙洗禮を希望する色々の階級の老幼男女がある旨を告げたので、教皇はセシリアに最後の掩祝を與へるため、また彼女が導いた人達に洗禮を授けるためにセシリアの館に出て來られたのです。此時改心して受洗した者

約四百人ありました。

さてセシリアが數日間捕へられることを延してもらふ様に願つたのは色々の準備をするためであつたのですが、知事は許しました。之は天主様の御計ひであつたのでせう。

知事は猶豫期間が終つたので彼女を裁判所へ引立てました。セシリアは教會の子供としての憤みと、ローマの臣民としての誇りと、イエズス・キリストの靈的妻としての威嚴とを以て恐るゝ事なく沈着な態度で法廷へ出ました。

訊問が始まります。

『汝の姓名と身分とを告げよ』

『私はローマの臣民で華族であります。名はセシリアと謂ひますが、キリストの信者と呼ばれるのが私に一番適當な名であります。』

知事は彼女が弱い女性でありながら少しも怖れなく公教信者であることを公言する勇氣を見て不思議がつて居るのを見たセシリアは

『私は信仰のお蔭で少しも怖れない力を受けてゐます。人間の力は丁度空氣袋の様なもので、針で突